石井勲の漢字教室

5 漢字は生きている



I 漢字の神話

第一章 復活する漢字

漢字はなぜ誤解されてきたか？

人は、言葉で物事を考えます。だから、理解する言葉の数が多ければ多いほど、その人の思考の幅は広く、理解する言葉の深さが深ければ深いほど、思考の精密度が高いわけです。近ごろ、アメリカで、人間工学研究所の大々的な調査により、「言葉を正確に、豊かに使う人が、あらゆる方面で成功している」ということが実証されましたが、それは当然のことだと言わなければなりません。

日本でも、最近、「漢字に強い生徒は、どんな学科にも強い」ことが、多くの学校の調査で明らかにされてきています。世界的な数学者として有名な岡潔先生は、「子供たちの使う漢字を制限すると、思考力の発達が妨げられる。今のような教育が今後も引き続いて行なわれたら、日本の文化は滅びてしまう」と警告されています。

明治以来、漢字は原始的な文字で、これを棄て、表音文字に改めない限り、西欧の文化に追いつき、追い越すことはできない、という考え方が、根強くなっていました。ところが、最近になって、表音

文字よりも表意文字の方が機能的に優れていることがわかり、欧米語国では、何らかの形で漢字を取り入れる研究まで進められているようです。

ともあれ、人間の思考の土台になる概念を直接に表現している漢字を、一つでも数多く正確に理解することが、あらゆる学問、またあらゆる仕事を進めていくのに、最も必要な最も基本的なことであることは、まちがいありません。

本書は、若い人々に、現在最も欠けているといわれる正確な漢字の知識を補うべく、合理的な新しい漢字の学び方、考え方を提示するものです。漢字の学び方は、推理小説の謎を解くようでなければいけません。クイズを解くようなつもりで、読んでいただきたいと思います。

復活する漢字

漢字は、古代に創作された文字で、現在に引き続いて生きている、世界でただ一つの文字です。今までは、古い故にそれが時代遅れのように考えられていましたが、今は、文字の本質からみて、文字の機能を最もよく備えた文字であることが再認識され始めたのです。

なぜなら、文字は、時間的にも空間的にも極度に制限されるという言葉の欠陥を補うべく生まれたもので、音声の届かない範囲にまで、しかも、いつまでも保存のきく言葉として働くところに、価値を持つものです。

とすれば、漢字ほどその機能を大きく効果的に発揮している文字は、他に全く見ることができません。「日・月・山・川」……これらの文字は、それが生まれた中国という地域を超えて、また五千年という驚くほど長い年代をも超えて、その文字の持つ思想をそのまま今に伝えています。

こんな文字が、他のどこにあるでしょう。漢字が、今、欧米諸国の間で見直されようとしているのは当然のことと言わなければなりません。先ごろ、名神高速道路で、標識認知のための実験が行なわれた時、ローマ字標識は認知するのに、仮名の十倍もの時間がかかったのに対して、漢字は、逆に仮名の十分の一の時間で認知できることが確かめられました。それは、漢字が伝えようとする思想そのものを直接に表わす文字だからです。文字とは、元来そういうものであり、またそういうものでなければ、今後の世の中では十分な効果を発揮することはできなくなるでしょう。

わが国では、今まで、表音化が国語政策の目標でした。ところが、欧米では、逆に表音文字の表意

化が、今、真剣に考えられているのです。$・£・&・Co.・№……これらは漢字の効果をねらった表意文字であり、欧米では今、益々増加の一途をたどっているのです（このような略号符号は現在でも二～三千ほどは用いられています）。

これは一体どう考えたらよいのでしょうか。

漢字は表意文字ではない――表語文字である

漢字は従来、表意文字という名で呼ばれてきています。しかし、表意文字は表音文字に対立する名称です。ところが、漢字は、最初から、発音と意味とこの両者を表わしている文字なのです。だから、漢字を表意文字と呼ぶのは、少なくとも正しい呼び方ということはできません。そう呼んでいたからこそ、今まで、漢字は〝非表音文字〟であると人々に誤った解釈をさせてしまったのです。しかし、これは事実に反しています。

私は、漢字を、〝表語文字〟と呼ぶことを提唱します。音声と意味とを持つ〝ことば〟を表わすのが、文字の本来の使命であり、その〝ことばを表わす〟という名の〝表語文字〟こそ、漢字に最もふさわしい名称だと思うからです。

表語文字という名称ならば、表音、表意を兼ね備えていることが、明らかに察知できることでしょう。しかも、それが表意文字、表音文字の上に立つ、最も理想的な文字であることをもよく示すことでしょう。

漢字がこういう文字であるからこそ、欧米でも再認識され、これを取り入れることに真剣になっているのです。

先年来日された、アメリカ最高の言語学者と言われるノアム・チョムスキー氏が、〝表音的な表記法〟を、

「それは、意味を理解しようがしまいが、聞いたことをただ再生するためにできていると言えるでしょう」（朝日ジャーナル vol. 8 No. 40）

と言ってこれを否定し、

「日本語の事情についてはよく知りませんが」

と断って、

「漢字仮名まじりの文字体系は、世界で最も良い表記法かも知れないと思います」と言っていることは、文字に対する評価が今変りつつあることを表わしていると思います。

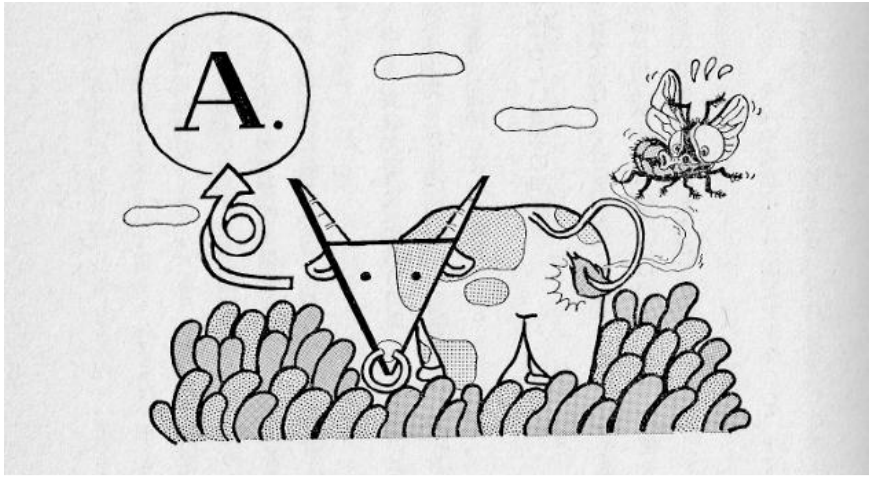
代用品だったローマ字

ローマ字は、今までは世界の文字の中で、最もすぐれた文字であると考えられていました。ところが、表音文字は、文字の生命である最も大切な〝思想〟を直接に表わすことのできない文字であり、機能上決してすぐれた文字ではないことが、次第に多くの人々に指摘されるようになってきました。

ローマ字が、そのもとは象形文字であったことは確かです。しかし、それが今のように表音文字になったのを、文字の発展と見たのは間違いだったのです。それは大変軽率でした。

なぜなら、文字を持たない民族が、文字を持つ先進国の文字を取り入れる時、表音文字という形でしか取り入れることができないからなのです。これは明瞭な歴史的事実です。

Aは〝アレフ〟という〝牛〟の意味の象形文字でした。Aを逆にしてにしてみれば、牛の頭を象(かたど)ったことがよくわかるでしょう。このAを、自国語を表わす文字として借り入れるには、牛という意味を棄てて、ただ〝ア〟という音を表わす文字としなければなりません。ちょうど、わが国で、〝波〟の〝なみ〟という意味を棄てて、ただ〝は〟という音を表わす文字として漢字を取り入れたのと同じことです。



つまり、文字の表意性を棄てない限り、外国の文字を借用して、自国語を表現することはできないのです。表音性に頼ることだけが、他国の文字を借り入れる場合に許された、ただ一つの方法だったのです。

だから、表音文字は、文字の発展として出現したものではなくて、文字の機能上、不便であるのを承知で、止むを得ない便法として誕生したものなのです。表音文字はすぐれた文字だというのは、とんでもない曲解と言わなければなりません。

すばらしい漢字の訓読法

表音文字は、文字を創作できなかった民族が先進民族の文字を借りる時に必ず生ずる用法で、表語文字の代用品です。不便なのは当然であり、不便を承知で表音という手段に依っているのです。それでも長い間使用していますと、so、sow、sew のような〝表意化〟が行われ、だんだん使いよくなって来ます。

しかし、そんな表意化では満足できなくて、外国の文字を自国語の表語文字にしてしまった民族が、この世界にただ一つあります。それは私たち日本民族で、その用法は漢字の訓読と呼ばれているものです。つまり、漢字の意味を借りて、その音を捨て、その音の代りにわが国の言葉の発音で読むのです。

この用法は、表音的用法と違って、桁違いに多くの漢字の知識を必要とします。極端に言えば、表音的用法では五十字の漢字を知ればそれで足りますが、この用法だと、二千、三千の漢字を理解できてもまだ不十分です。

しかし、私たちの先祖は、その労をいとわずあらゆる漢字についてその意味を調べ、その意味に当たる国語の発音をその漢字に押し込んでしまいました。これで、外国の表語文字がそのままわが国の表語文字になってしまったのです。

万葉集を見ますと、

和我夜度爾　左加里爾散家留　宇梅能波知流倍久奈里奴　美牟必登聞我母

というように、漢字を表音文字として使って書かれています。これがいわゆる万葉仮名です。わが国の最も古い言葉は、すべてこのような表音文字である仮字で書かれています。

ところが、同じ万葉集でも、中期以後になりますと、

橘之　花散里乃　霍公鳥　片恋為乍　鳴日四曽多寸

というような表語的用法が多くなってきています。表音的用法だけで書かれたものは、何度も繰り返して読み、考えてみませんと、全くその意味がわかりません。ところが、後者の例のように表語的用法が多く用いられていますと、実にその意味がわかりやすくなります。

私たちの先祖は、学習には安易でも、わかりにくい表音的用法に満足しないで、学習には大変でも一度身につければわかりやすくて便利な表語的用法を開拓し、ついに、二、三百年の間に外国の表語

文字をわが国の表語文字にしてしまったのです。

このように、外国の表語文字を自分の国の表語文字に改造してしまったという例は、世界の長い歴史の中にも一、二あったに過ぎません。それも古い昔のことで、今はわが国以外には存在しません。外国の文字を、自分の国の表語文字として取り入れることは、理想的な最も良い方法であることがわかっても、それが容易にできることではないからです。

ついでに言いますが、仮名は日本人の発明だと一般に信じられていますが、それは真実ではありません。中国人から教えられたものです。漢字を表音的に用いることは、中国では古くからあって、これを仮借と呼び、その用法による文字を仮借字と言います。略して仮字。字は国語では〝な〟と言いましたので〝仮名〟となったものです。

中国の仏典の中には、インドの言葉を表音的用法で書き表わしたものがたくさんありますが、それは全く万葉仮名と同じ用法です。中国ですでに長い間外国語を表記する場合に使用していた用法、仮借で日本語を表記することを日本人に教えてくれたものであることは、一点の疑う余地もありません。

だから、「日本人は、中国人も発明できなかった表膏文字を作り出した。これは日本人の優秀さを証明するものである」という論をなす者がよくいますが、それはとんでもない誤りです。ただ、仮名が中国からの帰化人に教えられたものであることは事実ですが、教えられなかったとしても、また、日本人が優秀でなくても、日本人は仮名を作り出しただろうとは思います。それは、すでに述べましたように、表音文字は外国の文字を借りる時に必然的に生ずる用法であって、すべての後進民族が例外なしに作り出しているものですから。

従って、たとい日本人が仮名を発明したとしても、少しも自慢できることではありません。それに比べると、山を〝やま〟と読む用法は、今まで当然のことのように考えられていて、これに特別の価値を認める人がありませんでしたが、これこそは大いに誇ってよいことなのです。

もう一つ、ついでに言います。同じ漢字を用いている国に韓国があります。同じ外国の文字を使用してはいても、わが国と韓国とでは大変な違いがあることです。わが国では漢字を国語を表わす文字にしてしまっていますが、韓国では中国語を表わす文字のままこれを取り入れています。韓国語を表わすために漢字を借り入れたのではないことです。言わば、漢語に征服されたのです。わが国と違い、地続きの上に政治的な支配を度々受けたのですから、それは無理もないことだと思われます。

ともあれ、同じ漢字を使用していると言っても、わが国の用法は韓国とも中国とも大変な違いがあることを理解しなければなりません。従って、わが国の漢字の使用について、中国や韓国と同日に論ずることは慎しまなければならないことです。

漢字は言葉よりも覚えやすい

いずれ近いうちに精しい発表ができると思いますが、漢字の学習は、幼児が言葉を覚え始めるようになったら、すぐに始めるのがよいのです。言葉は、人類がこの世に現われた時から存在したでしょうが、文字の発明は、人類の歴史の上ではごく最近のことです。だから、文字は言葉よりも高度のものであり、従って、学習するのにも当然むずかしいものだと、だれもがそう思っていました。

ところが、漢字のような表語文字[1]は、言葉よりも覚えやすいことが、実験の結果明らかになったのです。言葉が覚えられない脳障害児や重度の精薄児でも、漢字は覚えられるのです。

言葉は耳でとらえるものであるのに対し、文字は、目でとらえる言葉、ということができます。目でとらえる文字は、とらえられるまで待っていてくれますが、耳でとらえる言葉はとらえられるのを待っていてくれません。それどころか見せられるや否や消えてしまいます。しかも、いくつかの音声がつぎつぎに現われてはつぎつぎに消えていく、そういう音声を一つ一つ順序正しくとらえ、最後にそれらを一まとめにし、その全体が何を意味する約束であるかを理解して、その音声全体と意味とを結びつけなければなりません。

このように考えてみますと、言葉を覚えるということは実に大変な仕事であって、決して容易なことではないことがわかります。

それに比べたら、漢字の学習など実にやさしいものだと言わなければなりません。漢字は初めから一つの図形としてまとまっており、それを確認し、記憶するまで、決して消えてしまうことはありません。だから、どんなに能力の低い者でも必ず記憶することができるのです。言葉を覚えることのできるのです。

---

[1] これは表音文字ではだめです。必ず表語文字でなければなりません。また、同じ漢字でも、鳥や虫よりも、鳩、鶴、蜂、蟻の方が理解しやすく、覚えやすいことも明らかにされています。「蟻、虫、中」この三つの字の中では、蟻が最も覚えやすく、中が最も覚えにくいというのが幼児の漢字学習の実際なのです。だから、正しい漢字学習は、蜂、蟻を学習させてから虫の学習に移るのです。

きない重度の精薄児でも漢字を覚えることができるのは当然のことなのです。

言葉も文字も幼児期に覚えさせるもの

一家そろって外国に転住した場合、一番早くその国の言葉を完全に覚えて使えるようになるのは必ず幼児です。年齢が進むにつれて上達が遅れるのは今や衆知の事実です。幼児は語学の天才と言われ、その学習は早ければ早いほど良いと言われています。

漢字の学習も同じことです。漢字は目で見る言葉であり、耳でとらえる言葉よりもとらえやすいものですから、生後八か月を過ぎたら、漢字を覚えることが可能になります。私どもの実験によれば、幼児ほど無雑作に覚え、漢字を覚えることに少しの負担も感じません。幼児には、覚えようという努力なしに覚えられるのです。

韓国の金雄鎔ちゃんは、生後八か月から漢字を教えられ、一年間に五百字くらいの漢字を覚えています。この程度のことは、天才でなくても、ごく普通の子供でもやればできるものであることが、私どもの実験で証明されています。

十数年前の文部省の調査ですが、中学一年生に対して行なわれた漢字力テストの平均読字力は五百字に足りなかった、と報告されています。その程度の漢字力なら、幼児は二年間で楽々と身につけることができます。

進歩のなかった漢字学習法

漢字は長い間〝前時代的〟な文字として、不当な汚名を着せられてきました。そのため、教育の面でも、いずれは廃止されるべきものとして、その教育指導法は全くだれからも顧みられず、十年一日いや百年一日の如く、ただ旧式な機械的な詰込み教育しか行なわれませんでした。明治以降、どの教科の学習方法も日進月歩の発展があったのに、漢字の学習方法だけは進歩はおろか、退歩しているとさえ思われる有様です。

ところが、漢字はよく考察してみますと、全体として縦に横に相互に密接な関連があって、その一つをつまみ上げると、全体がそれに従って、つぎつぎとひとりでにつまみ上げられるような関係にあるのです。このような関係にある漢字を、ばらばらに切り離して一つ一つ学習していったのでは、時

間がかかり、骨が折れるばかりではなく、折角苦労して覚えても、すぐ忘れてしまいます。

英語では、早くから、体系的に学ぶ方法が能率的であることを、実験によって確かめております。

私は、漢字を体系的に学習する方法について、二十年来研究し、実際の指導にもこれを実践して、その効果を調査してきました。その結果、小学校の一、二年生でも、今の中学生くらいの漢字力を身につけさせることは、特別の努力をしないでもできることがわかりました。

体系的な漢字学習の大きな特長は、基本的な一字の学習で、それに数倍する漢字を類推して知ることができることです。つまり、一字を習えば、十字が自然とわかる、ということです。また、良いことには、それは、大変に良い〝頭脳の体操〟になるということです。しかも、それは興味ある楽しい体操なのです。一石二鳥どころか、三鳥、四鳥ということができます。

では、漢字の体系的な学習法とは、どういうことでしょうか。

漢字の体系的学習とは

漢字の大部分は、部首と呼ばれる部品の組み合わせによってできています。たとえば、当用漢字は全部で一八五〇字ありますが、それに使われている部首は全部合わせても一九二個しかありません。つまり、一九二個の部品が、いろいろに組み合わせられて、一八五〇字の漢字になっているのです。

だから、一九二個の部品の持つ意味や性格を、その本質からよく理解していくならば、一八五〇字の当用漢字はもちろん、それに数倍する量の漢字の意味、読み方まで大よそ推察することができるのです。

たとえば、〝整〟という漢字について考えてみることにします。この字は、〝束（ソク）・攵（ボク）・正（セイ）〟の三つの部品によって組み立てられていますが、さらに〝束〟は木と口（輪の形）、〝攵〟は又（手）と／（棒またはむち）、〝正〟は止（足の形で、とどまる意味）と一（線）と、それぞれ二つの部品によってできています。

束は、木に輪をかけて〝たば〟ねたことを表わしています。攵は、手に棒を持って〝たたく〟ことを表わしています。正は、止まるべき線に止まっていること、つまり〝ただしい〟ことを表わしています。ですから、〝整〟という字は、「木を束ねて、不ぞろいになった所を棒でたたいて、きちんと正しくする」ということを表わしていることが、その部首によって正しく汲み取れるのです。しかも、

この字の発音は、正（セイ）であることまで、わかるのです。

漢字は、字形が複雑で、機械的にただがむしゃらに覚えようとしたら、確かにむずかしいものと言わなければなりません。しかし、その部品を一つ一つ理解して、これを論理的に学習するなら、これほどやさしく、楽しく覚えられて、しかも忘れようとしても忘れられない文字は他にありません。

整という漢字を、試みに和英辞典により翻訳してみますと、

to put (things) in order

に当たることがわかります。to put は〝攵〟という意味に当たります。〝束〟は、英語の things に当たります。order は全く正と同じ意味です。

漢字は、ローマ字のアルファベットに当たるものと考えるから、複雑であり、むずかしいと誤解されているのです。漢字は、少なくとも英語の word に当たるものであり、時には「整」のように、数個の単語の集合体にさえ当たるものがあるのです。

このように、漢字を、その本質から考えていきますと、むずかしいどころか、世界一やさしく、機能的にもこれほどすぐれている文字は他にないことが、よくおわかりいただけると思います。また、漢字の学び方も、その本質に根ざした〝科学的〟〝論理的〟な学習法でなければならないことも、ほぼおわかりいただけると思います。

漢字のしくみ

漢字の構成法には、四つの種類があります。その第一は、象形です。象形とは、形を象（かたど）るという意味の語で、形のある物について、それをスケッチ風に描いた、言わば絵文字というべきものです。従って、これに所属する文字は、字形をよく観察すれば、大よその見当のつくものが多くあります。

第二は、指事です。指事とは、形のない、抽象的な事がらについて、その事を符号的に指し示す、という意味の語で、「上」「下」というような字がこれです。

形のある物は〝象形〟で、形のないものは〝指事〟で、すべての言葉はこの二つの方法で表わせるはずですが、単純な内容のものは表わすことができても、内容の複雑なもの、また表わしにくい言葉もあります。そこで、この〝象形〟〝指事〟を基にして、それらを組み合わせることにより、複雑な内容を表わすことを考え出しました。これが、〝会意〟と〝形声〟という方法です。

会意とは、〝意味を会わせる〟という意味のことばで、人と木とを組み合わせて、〝人が木のかげでやすむ〟という考え方で「休」という字を作ったのがこの例です。

しかし、象形、指事、会意によって作られた漢字は、漢字全体からみると、ほんの一部に過ぎません。漢字の大部分、およそ九十％までは〝形声〟字なのです。

形声とは、「形と声との両面を備えた文字」という意味のことばです。形とは、象形の形で、〝言葉の内容〟〝物事の実体〟を指しています。声とは、ことばの発音のことです。つまり、ことばの〝意味〟と〝発音〟とを兼ね備えた文字、という意味であって、形声文字をよく観察すれば、その文字の持つ意味も発音も知ることができるのです。

第2章 漢字の見方、考え方

漢字を推理する

今までは、まだ学習したことのない漢字、初めて見る漢字は、先生に教えてもらうか、辞書で調べるかしなければ、読めないもの、わからないものと決まっていました。しかし、形声文字の構成法がわかれば、初めて見る漢字でも、どういう意味を持った、何と読む字か、おおよその見当がつくのです。

こういう学習法で漢字を学習していきますと、推理力が高まり、ほんとうの意味での学力がつきます。なぜなら、ほんとうの学力とは、知識を丸覚えして蓄えることではなくて、既知の知識を活用して、未知の分野を開拓していく力のことだからです。

今までのような、がむしゃらに漢字を覚えるような態度、ただ数を多く覚えさえすればよいというような学習法で得られた漢字力は、ほんとうの漢字力とは言えません。

では、漢字をどのように見、どのように考えたらよいのでしょうか。これを実例によってお話いた

しましょう。

冓

まず、構造の〝構〟という字を考えてみることにします。冓という部首は、その字形が示しているように、棒をたてによこに交叉させ組み合わせて、物を形づくることを表わした部首です。発音は、交叉の〝コウ〟です。従って、〝冓〟の部首を持った字は、すべて〝コウ〟と読んで、〝物を左右、または上下にさし渡す〟〝組み立てる〟という意味を持った字と考えればよいのです。

構は、木を左右上下にさし渡し、組み立てることです。それで「構造」「構築」等と使います。

講は、言（ことば）を組み立てて、それを話し手から聞き手へとさし渡すことです。講義、講話、などと使います。

購は、貝がお金を意味する部首ですから〝お金を相手に渡して、品物を買う〟ことだとすぐ見当がつくでしょう。購入とは、買い入れると いうことです。

溝は、こちらから向こうへ〝水をさし渡す〟ためのみぞだということも、容易に察しがつくはずです。

このように〝冓〟という部首の持った意味や発音を理解することによって、それと何とが組み合わされるかにより、どのような意味の漢字ができあがるかということが推察できるのです。「構、講、購、溝」これらの漢字を、ぱらばらに一字ずつ無関係なものとして学習するならば、どの字一つを取ってみてもひどくむずかしく、覚えにくいものになるでしょう。ところが、これをひとまとめにして、相互に関連させて学習しますと、かえって、全体の方がこの中の一字だけを覚えるよりもやさしく簡単に覚えられ、しかも、その記憶は強く、しっかりとしたものになることが、よくおわかりいただけると思います。

では、形声文字の構成法を理解するために、いくつかの部首についてしばらく考えてみることにしましょう。

僉

よくテストに出されるもので、誤まりやすい漢字に、探検の検と冒険の険、試験の験と検査の検が

あります。

検、険、験、……。右側の部分が同じだけに、これらをよく取り違えてしまうわけです。それは、これらの漢字の意味を正確に知らないために間違えるのですが、結局は「木、阝、馬」と「僉」という、部首の持つ意味や性格を知らないためにおかす誤まりというべきです。

今までのように「探検」とは「……」という意味のことば、「冒険」とは「……」というように、ただがむしゃらに覚えたのでは、検と険と取り違えるのがあたりまえです。ところが、木と阝の違いさえ理解すれば、もう絶対に取り違えることなどなくなります。

僉は、亼（シュウ）と口（くち）と人（ひと）の三つの部首から成り立っている部首です。旧字体では「僉」で、亼と𠙵と从でできていましたが、構造的には新旧とも全く違いはありません。

亼（シュウ）は、「集（シュウ）」の意味の部首で、三方からひと所に集まることを符号的に示した指事字です。亼が原形です。「会」や「合」の上の部分がこれです。従って「僉」は「人の口を集める」つまり、「人々の意見を集める」ことだと推察がつくでしょう。古典に「公卿僉議」という見慣れないことばが出て来ても、このような学習をしていれば困らないはずです。

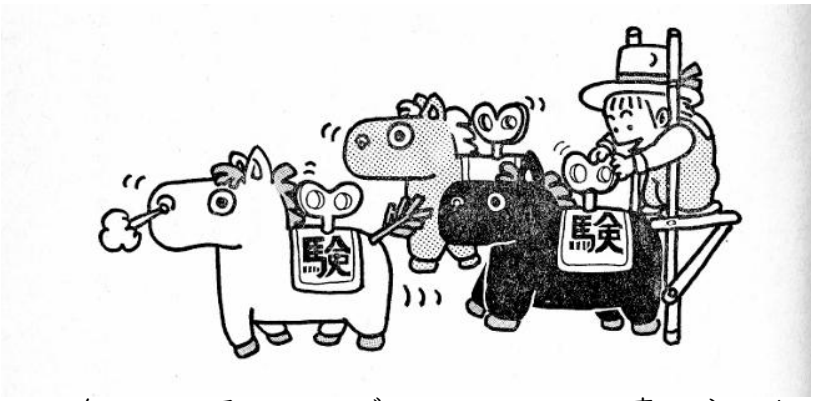
検は、記録（昔は紙がなかったので、木や竹のふだに字が書かれた）によって意見を集約する、「しらべる」という意味の字です。つまり、木は今の書類を意味する部首で、同じ木から成る査という字と組み合わせて「検査」というように使われます。「探検」は「さぐりしらべる」意味ですから、どうしてもこの「検」でなければなりません。

僉は、議論を集約することですから、「約」（きりつめる）という意味にも使われます。「倹約」の倹がこれです。人が生活の無駄を切りつめることなので、亻と組み合わせられました。

また、物を集約するためには、取捨を峻厳にしなければなりません。選抜するためには、どうしてもきびしさが伴います。それで「僉」には「きびしい」という意味が生まれます。険や嶮の僉がこれです。

阝は、古い字形は𠂤で、崖の象形です。崖という意味の部首です。崖の峻厳なのが険であり、山の峻厳なのが嶮です。大変に「あぶない」ので「危険」、というようにも使われます。「冒険」とは、あぶないことをあえてする（冒はおかす）ことですから、これも「険」でなければなりません。

験は、たくさんの馬の中から駿馬を〝選抜する〟ことです。これは毛なみや体格を見ただけではわ



からないので、駈けさせて〝ためし〟てみなくてはなりません。だから〝ためす〟というのが本義で、「験算、実験、試験」など〝ためす〟意味の時に使うのです。

且

検査の検はよくわかったと思いますが、では〝査〟はどういう漢字でしょうか。

且は、地上に物を積み上げた形を表わした部首です〝積み重ねる〟のが本義です。

査は、〝記録（書類）を重ねる〟ことで、〝しらべる〟という意味を表わしたものです。音は、且（ソ）が変化してサとなりました。so→sa このような変化を同行相通と言い、よくある変化です。

祖は、なくなったおじいさん、ひいじいさん、そのまたおじいさんを言います。〝礻〟は示（しめす）へんと言い、神様に関係ある部首で、多く〝神〟の意味に使われます。従って〝祖〟は、先祖代々の神様ということで「先祖」「祖先」というように使われます。

組は、何本もの糸をくみ合わせて編んだ〝くみひも〟が本義です。今は、糸をくむことに限らず〝くみ合わせる〟意味の〝くみ〟に広く使われています。

租は、積み重ねられた稲のことで〝税として納めるために用意された稲〟を指しています。今の租税は、金で納入するので「税金」と呼ぶようになりました。

粗は、積み重ねられた米ということで「玄米」が本義です。禾は木で、稲の象形ですが、米は稲から脱穀した米粒の象形です。税用の米は、長く貯蔵され、もみがらをつけたままですから禾へんで、「租」となります。

しかし、家庭用に貯蔵された米は、もみをついてもみがらを取り去り、玄米にしますので米へんの「粗」という字になります。食べる時には、玄米をついて、黒皮やぬかを取り去ります。これが精米です。今では、粗も精も、米に関係なく「粗製」「精製」などと広い意味で使っています。

助は、〝力を重ねる〟という意味で〝力を貸す〟つまり〝たすける〟ことを表わした字です。音は

ソがなまってジョ。援助、助力。

且のついた漢字には「岨」「阻」「疽」「沮」などがあります。どういう意味の字か考えてみて下さい。きっとわかるでしょう。

岨は、山また山、山の重なりあった〝けわしい〟という意味。阻は、崖の重なりあう意味。疽は皮膚のはれ上がる病気です。沮は、提防を高く積みあげて、洪水を〝ふせぐ〟という意味の字です。

青

粗の反対の精が出たので、ついでに「青」のつく字を考えてみましょう。晴・清・情・静・請のほかに、晴・靖という字もあります。

青は、𠙵が本字で、生（セイ）と丹の合字です。丹石という石から赤色の染料をとるのですが、同時に青の染料もとれるので、あかを丹（タン）と言い、あおを〝丹より生ずる〟という意味で〝青〟とし、発音は〝生ずる〟のセイを取ったのです。あかとあおとは色の基本ですので、絵の具や絵のことを「丹青」と呼ぶことがあります。

清は、水の青くすきとおって見える状態を言います。「濁」に対する字ですが、今では、水に関係なく、清潔、清新など、広く汚れのない意味に使います。

晴は、青空と日とで〝はれ〟の意味を表わしています。清も晴も、〝すぐれた状態〟ですから、〝青〟は〝すぐれて良い〟という意味を持つようになりました。

情は、心のすぐれた状態を意味しています。〝思いやりの心〟です。人情、情愛。

請は、情をこめて言うこと。〝真心こめた言葉〟という意味です。請願、請求。

靖は、落ちついて、静かに立っている状態を表わしています。〝安定〟していることですから〝しずめる〟〝やすらか〟の意味に使われます。靖国。

静は、争いを〝しずめる〟意味から、〝動かない〟〝しずか〟の意味に使われています。静止、安静。

晴は、目の最も大切なところ〝ひとみ〟です。西洋人のひとみは文字通り「青い目」をしていますね。

瀞は、水が静かにさざ波も立てずに流れている所、つまり〝とろ〟を言います。埼玉の長瀞、吉野

の瀞八丁など。

主

主は、で、燭台にあかりのついている象形です。あかりは家の中心に置かれるので「中心」の意味に使われます。キリスト教では、中心の意味でキリストを指して使います。部首としては「中心に向かって集まる」「集中する」の意味に多く使われています。

音は、火のシュウシュウと燃える音を取って「シュウ」ですが、つづめて「シュ」と読む方が多いようです。主人（シュ）（一家の中心となる人）の意味。主従、主客（従に対するもの、客に対するものとしても使います）。

柱は、〝家の中心となる木〟の意味で〝はしら〟です。大黒柱、支柱。〝ささえ〟の意味にも使われます。

注は、川の水が、中心である海に向かって〝そそぐ〟意味です。この主は〝集中〟の意味に使われています。「注目」「注意」は、目や心をそれぞれある点に集中させることです。

戉

住は、人が集中するの意味で、それは、人が都会に集まりすむことを表わしています。居住、住民。

駐は、馬が集中するのは〝軍隊が滞在する〟場合です。だから〝軍隊がある場所に止まる〟という意味に使われます。駐屯。

また、役人が任地に止まる意味にも転じて使われます。「アメリカ駐在大使」。

駐を〝馬を止める〟の義として、今では、転じて、車を止めることにも使われます。駐車。

註は、言葉を集中させるの意味で、むずかしい言葉に対して〝説明を加える〟ことを表わしています。註釈、註解。〝言葉を注ぐ（そそ）〟の意味です。だから注釈、注解とも使われています。

戉

戉は戈の略字。戈は〝ほこ〟の象形字。ほこには、〝矛〟〝干〟の象形字もあり、〝干戈〟で戦争の意味にも用います。戈は、ほこを交えた形ですから、〝戦う〟〝きずつけあう〟のが本義です。部首としては、〝きずつけそこなえばなくなる〟ことから、〝わずか〟の意味に使うことが多い。音はセン。

浅は、水がわずかということで〝あさい〟ことを表わしています。深浅、浅薄、浅学。今では、水に限らず〝学問が浅い〟というようにも使います。

銭は、わずかなお金ということで、今ではわずかなか金の単位（一円の百分の一）に使われています。金銭。

賤は、お金がわずかしかないということで〝貧しい〟〝身分のいやしい〟ことを表わした字です。貝は、かいの象形ですが、部首としては財宝や金銭の意味を表わします。貧賤、下賤。

残は、わずかな骨（歹は骨の一部を表わした形）ということで〝食べのこり〟の意味を表わしたものです。今では「残金」「残月」「残念」（心のこり）などと広く使います。音はザン。

餞は、わずかな食事という意味で〝送別の宴〟を、送る側が謙遜して〝餞〟と言いました。餞別、はなむけ。

箋は、わずかな竹ふだという意味で、今の「メモ」に当たるものを言います。紙のない昔は、木や竹のふだに字を書きました。便箋、通信箋。

盞は、小さい皿（さら）の意味で〝さかずき〟のことです。音はサン。

桟は〝わずかな木の切れ〟が本義で、今では戸や障子の横木のことを桟と言います。「桟橋」というのは〝木切れを組み合わせて作った粗末な橋〟という意味のことばです。

践は〝小きざみに足を運ぶ〟ことで〝踏む〟〝行なう〟意味に使われます。実践。

喬

桟橋ということばが出ましたので、今度は喬について調べてみましょう。

喬は、夭（ヨウ）と高（コウ）との合字で、音もkôとyôでkyôです。夭は、で、頭の曲がった人の象形です。従って、喬は、高くひそびえて、上の方の曲がっていることを表わした部首です。

「喬木」「喬松」など、単に〝高い〟意味に使いますが、〝そりかえる〟意味から、〝威張る〟という意味にも使います。

橋は、まん中が高く、そり返った形（アーチ形）の〝だいこ橋〟が本義です。力学的に丈夫な形なので、昔からこの形の橋が多いのです。今では形、材料に関係なく使われます。石橋、鉄橋。

驕は、背の高い馬の意味ですが、〝いきおいが良い〟ことから、〝おごる〟〝たかぶる〟意味に使

います。驕慢。

嬌は、スタイルの良い婦人が本義で〝なまめかしい〟ことですが、驕と同じく、〝たかぶる〟意味にも使われます。嬌笑、愛嬌。

蕎は、背の高い草の意味の字で〝そば〟のことです。そばの茎は、高くなるので、この字ができました。

僑は、華僑などと使われる字ですが、喬は、高（建物）を表わしたものです。従って、僑は〝人が建物にやどる〟ことを表わした字です。〝仮のやどり〟の意味に使います。華僑はこの意味です。

矯は、〝先の曲がった矢〟という意味になりますが、これはそうではありません。曲がった矢ではあたりませんから、必ず〝まっすぐにため〟て使います。だから〝曲がっている〟という意味（矯偽）と〝ためる〟意味（矯正）とあるのです。

高は、高で、高い建物の象形により〝たかい〟ことを表わした指事字です。僑では、象形字として〝建物〟を表わしました。

圣

圣の本字は巠で、（巠）織機（はた）に張られた〝たていと〟の象形です。〝たてにまっすぐに通す〟という意味の部首です。音はケイ（漢音がeiの音は、呉音はyôですから、圣の呉音はkyôです）。

経は、圣の本義「たて糸」を表わした字です。これに横糸（緯）が加えられて布ができあがります。横糸は糸を代えることも、切れた糸をつなぐことも簡単にできますが、縦糸はそうはいきません。そこで、基本になる大切な糸というので、「経典」「経文」のように、〝大切な書物〟また「経営」のように〝計画〟し、〝おさめる〟という意味にも使います。

地図の上に南北に引かれた線を経線というのは〝たて糸〟という意味です。

径は、〝まっすぐな道〟が本義で、山道に設けられた〝近道〟〝小みち〟の意味に使われます。山道はつづら折りの道が本道ですので、近道はまっすぐな道であり、小道なわけです。彳は行、つまり⺾で道の象形です。〝道〟または〝歩く〟ことを表わす部首です。

〝直径〟というのは、円周上の一点から反計側に円周にそって行く、行き方に対して、「中心を通って〝まっすぐに〟引かれた線」という意 のことばです。

茎は、草のまっすぐな部分ということになりますから〝くき〟であることはすぐわかると思います。

脛は、月が〝肉体〟の意味の部首ですから、体のまっすぐに伸びた部分とは〝すね〟を表わした字であることがすぐわかったと思います。

頸は、頁が〝頭〟の意味の部首ですから、頭の茎に当たる所は〝くび〟以外には考えられないでしょう。故事にある「刎頸(フンケイ)の交わり」とは、くびをはねられても後悔しないというかたい交わりのことです。

痙は、疒が〝病気〟の意味の部首ですから、〝すじの病気〟ということになります。筋が引きつれる病気で普通「痙攣」と言います。

軽は〝径（小道）を走らすことのできる車〟という意味で〝径車〟が本義です。〝軽快な車〟ということから、単に〝軽快〟の意味になりました。軽便、軽装。また「軽率」（かるはずみ）や「軽蔑」（軽んずる）というようにも使います。

勁は、〝つららき通す〟力のあることを表わしています。〝つよい〟〝丈夫〟の意味の字です。

剄は、刂が刀の意味の部首ですから、〝刀で頸(くび)を切る〟という意味の字です。

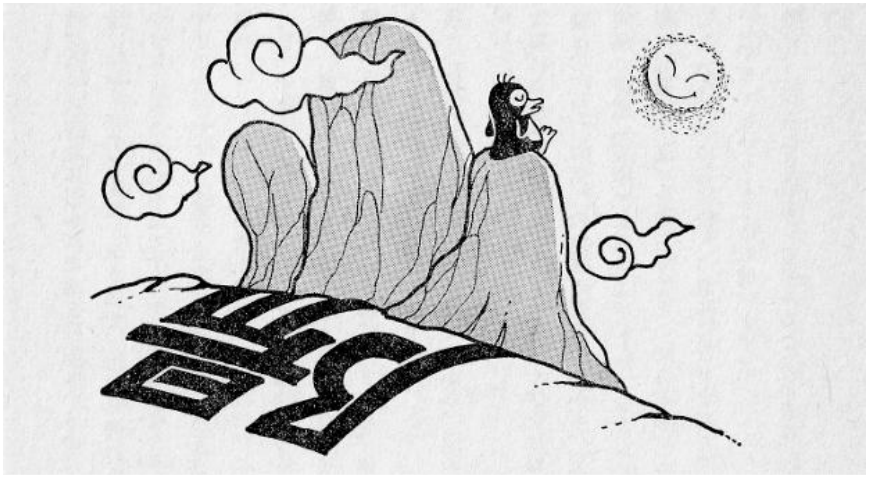
逕は、径と同じ成り立ちの字で「小みち」「近道」の意味の字です。径と同じように使われます。

易

易は、の変形です。丁はこの字の音を表わす符号だけの存在です。意味はにあります。日の光のふりそそぐ有様を表わした部首です。音はトウ。普通はなまってチョウと発音します。ㄊㄤˊ→ㄓㄨㄛˊ濁ってジョウ。ㄧㄤˊ→ㄖㄨㄛˊまたㄧㄡˊヨウと発音されることもあります。

湯は、〝日光であたためた水〟ということで〝日なた水〟が本義です。今は、火であたためたものを湯と言いますが、昔は、太陽光線を利用したことが、字の成り立ちから察せられます。

陽は、阝が崖の意味の部首ですから、〝日あたりの良い崖〟が本義です。山の南側は、日あたりの良い斜面になっていますから、これを「山陽」と言います。中国山脈の南側を山陽地方と呼ぶのは、陽の本義にかなっています。ついでに言いますと、川では北側が日あたりの良い斜面になっていますので、「河陽」と言うのは、川の南側ではなくて、北側なのです。陽は、南斜面の意味から〝ひなた〟の意味に用いられ、さらに〝日そのもの〟を指すようになり、「太陽」という言葉が生まれたのです。



場は、〝日あたりの良い土地〟というのが本義です。今は、単に〝土地〟または〝ところ〟の意味に使われています。牧場、劇場。

暢は、構成がちょっと違います。申はで、両手（）で棒をまっすぐに引きのばす意味の字で、「伸」（のばす）の本字です。易（チョウ）は、音の同じ「長（チョウ）」の意味を借用して、〝長く引きのばす〟意味を表わしたのが暢です。流暢（のびのび、すらすら）。

腸も、易は長を借用しています。人体で最も長くのびのびと続いているものが腸です。

傷のは、の略で、〝日にあたる〟のでなくて〝矢にあたる〟こと。傷は、〝矢にあたって受けたきず〟が本義。音は矢易（シヨウ）です。

莫

莫は、で、草原の草の中に日が沈んだところを表わしたもので、〝夕ぐれ〟が本義です。日が隠れて見えないので〝ない〟の意味にも使われます。音は、が草の茂しげっている形を表わしているので「茂（ボ）」です。転じてバクの音があります。寂莫（セキバク）。

「莫大」は、草原の〝果てしなくひろい〟意味を取って〝とてつもなく大きい〟という意味のことばです。

寞は、家（宀）の中に人がいないので〝ひっそりと静まりかえっている〟こと。〝さびしい〟の意味もあります。寂寞。

暮は、莫が〝夕ぐれ〟の本義を失なったので、莫にさらに日を付けて〝夕ぐれ〟専用の字としたものです。「歳暮」（年のくれ）という使い方もあります。

墓は、人生のくれ、終着所の土、つまり〝おはか〟です。墓地、墓穴（を掘る）、墓標、墓碑。

慕は、〝夕ぐれの心（小）という意味の字。夕ぐれになると、何となく物悲しく、人恋しくなるものですから、〝したわしい〟気持を、〝夕ぐれの心〟で表現したものです。慕情、愛慕、追慕。

募は、〝夕ぐれのカめ（つと）〟という意味の字。夕ぐれになると放牧の家畜を呼び集めるのが仕事です。〝呼び集める〟こと。募集。今の入学試験のように、集めようとして苦労しないでも向こうから集まってくるのはほんとは〝募〟とは言えませんね。

摸は、夕ぐれになり、物が見えないというので、手さぐりすることで、〝手でさぐる〟のが本義。暗中摸索。手で物をさぐる時は、手の感触から、その物の形ありさまを心の中にえがきます。それで、〝同じものを心の中にえがく〟ことを摸と言うようになりました。「摸倣」は、実物と一々ひき比べながら、それと同じものを作り出すことです。〝まねる〟こと。摸写。

模は、同一の物をたくさん作る時の〝木で作ったかた〟。木と摸の意味の莫との合字です。ついでに言いますと、〝土で作ったかた〟は「型」、〝竹で作ったかた〟は「範」と言います。模と型と合わせて「模型」というのは〝いろいろなかた〟という意味です。模と範の「模範」は〝手本〟という意味に使われます。

幕は、莫と巾（ぬの）の会意形声字。〝日ぐれのようにあたりを暗くする布〟の意味で「まく」を表わしました。軍人（武士）は幕を張ってこれに宿営することが多いので、軍政のことを「幕政」と言い、その役所を「幕府」と言います。

漠は、草原の果てもなく広い意味の莫と水との会意形声字。〝広々とした海原〟が本義ですが、「砂漠」というように、見渡す限り何もない砂原の意味にも使います。「漠然」は、〝とりとめもない〟ことから〝ぼんやり〟という意味に使います。

驀は、道が暗くてはっきりしない（莫）のにがむしゃらに馬を走らせること。驀進、まっしぐら。

貘、豸は〝むじなへん〟と言い、四つ足の動物の象形です。貘は、実在しない、想像上の動物ですので、〝とりとめもない〟という意味の莫（バク）と名付けたものでしょう。人の悪い夢を食べて邪気を払ってくれるという霊獣だということです。

膜は、幕の〝物を隔て〟たり〝物を囲っ〟たりする意味の莫と肉体の一部分であることを示す月（にくづき）との会意形声字。横隔膜、腹膜、肋膜、鼓膜、網膜、粘膜、角膜、結膜。

甬

用は甩で牧場にはりめぐらした柵の象形で〝はりめぐらす〟のが本義です。「用心」は〝心を用（もち）い

る〟ことだと解いていますが、〝心をはりめぐらす〟ことだと解くべきでしょう。柵のどこが破れても牛は逃げてしまいます。火の用心は、どこにちょっとした油断があっても大事をひき起こします。どこにも欠けた所がないように心を周囲のすみずみまではりめぐらすのが、「用心」ということなのです。柵は牧場になくてはならぬものなので、〝必要〟〝役に立つ〟〝使う〟の意味が生まれました。

甬は、柵の上に人の頭の見える様子です。柵の様子を見に柵にそって〝まわる〟のが本義です。

踊は、〝足でぐるぐるまわる〟という意味で〝おどる〟ことを表わしています。舞踊というものは、輪を作ってぐるぐる回りながら踊るものです。

俑は、見かけない字ですが、孟子という書物に、孔子が〝初めて俑を作った人はその子孫がほろびるであろう〟と言って俑を作った人を憎んだことが見えています。人形ですが、手足が動くようになっていたと言いますから、〝踊る人形〟の意味で、甬と亻とで作られたのかと思われます。

涌は、〝水が踊る〟という意味の字です。地中から、地下水が踊り出るように〝わく〟ことです。涌の音は用(ヨウ)で、甬、俑、踊、みな同じです。

勇は、甬と力との会意形声です。〝涌き出る力〟という意味の字で、泉の涌き出るように自然と心の中にみなぎってくる力が「勇気」です。たまり水のように使えばなくなってしまうような力ではなく、使っても使っても溢れてくるような力です。音は用(ヨウ)が変化したYǔ

湧は、全く涌と同じ意味の字です。発音は、ヨウともユウとも読まれ ます。湧出（ユウシュツ/ヨウシュツ）。

通は、柵にそって道を行き来するのが本義です。柵があって安心してとおれるので、〝物事がうまく行なわれる〟の意味に用いられます。「通人」というのは、「世の中の万事を知りつくした人」という意味です。通は、単に「歩く」「行く」の意味ではなくて、〝すらすらと〟という意味が加わった字です。通用、通読。音は用から変化したトウ、またはツウ。

桶は、まわりを木でぐるっと囲んで作った〝おけ〟ということが想像できますか。この甬は〝はりめぐらす〟の本義によったもので、〝木をはりめぐらして作った容器〟という意味の字です。音は用(ヨウ)ですが、トウ、ツウの音もあります。

痛は、休じゅうにはりめぐらされた神経に感ずる病気という意味の字で、〝いたむ〟ことを表わしています。痛み自体は病気ではありません。体のある部分が病気で異状を呈していることを通信するのが〝痛み〟であるわけです。音は、通と同じツウです、痛快、痛感というように、〝ひどく……〟の意味にも使われます。

俞

俞は、𠆢と舟と川の合字です。現在の「月」の部首には「月」のほかに「肉」の変形したもの（にくづき）と、「舟」の変形したものとあります。「前」という字の月はやはり舟の意味の月です。𠆢は、32頁の**舎**の𠆢、〝集合〟の意味の部首です。〝川に舟がたくさん集まっている〟ことを表わしたのが**俞**です。〝舟で物を運ぶ〟の本義です。音は舟（シュウ）ですが、つまってシュ、今はさらに省略されてユと発音されます。

輸は、〝車で物を運ぶ〟という意味で、舟で物を運ぶ意味の**俞**に車を加えて作られました。「輸送」は、車で荷物を運送することで今も昔も変りませんが、今の「輸出」や「輸入」は「**俞**出」「**俞**入」の方が字義に合っていますね。これからは、車を除いて使おうではありませんか。ついでに言いますと、「舶来」という言葉は〝船舶で運んで来た〟という意味の字で、今の「輸入」と全く同じ意味の言葉ですが、この方が。〝ふね〟という字を使っているだけ、正しい使い方をしていると言えます。

諭は、〝人を言葉で運ぶ〟という意味の字です。道理のわからない人、間違ったことをしている人を、正しい道へ移るよう、よく言葉をつくして〝さとす〟ことです。説諭。小学校から高校までの先生を〝教諭〟というのは、生徒をりっぱな人に導くため、教えさとす役目を持っているからです。

愉は、〝人の心を望む所に運ぶ〟という意味の字です。従って〝気持が良い〟〝たのしい〟ことです。愉快。

愈は、愉と同じ、**俞**と心との会意形声字です。この字は〝心が前進する〟という意味で、舟が前へ前へと進むように、心の働きがだんだんとりっぱにたることを表わした字です。〝りっぱである〟という意味と、〝ますます〟という意味とあります。

癒は、病気がなおって、気持良くなることです。治癒、快癒。

瘉　病気を向こう岸に渡すという意味の**俞**と疒とで病気の「なおる」意味を表わしています。癒と同じように使います。

喩は、論と全く同じ意味で出来た字です。従って、〝さとす〟が本義ですが、教えさとす場合に用いる〝たとえ話〟の意味に使うことが多いようです。比喩。

覦は、舟をあやつる時には、絶えず水路の状況を見ていなければなりません。それで、**俞**と見とで、〝様子をうかがう〟〝のぞき見る〟という意味を表わしました。

偸は、〝物を運び去る人〟という意味で、〝ぬすびと〟を表わした字です。音は、舟（シュウ）がなまったチュウ、またはトウ。「偸安」は一時の平安をむさぼって努力しないことを言います。

踰は、舟でなくて〝足で歩いて川をわたる〟ことから〝渡る〟〝越す〟という意味です。音は兪ユ。

菓（菫）

菓（菫）は、黄と土との合字です。中国の黄河の上流には広大な地域にわたって黄土層があります。この黄土が黄河にとけこんでいつも黄色く染めているのです。黄土は、質は至って細かい、粘って扱いにくい土です。それでこの黄土で、〝細かい〟〝扱いにくい〟という意味を表わしたのです。音は、黄（コウ）から変化してカン（kān）です。また、土（ト）（tǒ）の音が加わってタン（tǎn）とも発音されます。

艱は、〝扱いにくい〟という意味の菓と、根元の意味の艮との会意形声字。〝ひどくむずかしいこと〟〝なやみ〟という意味を表わしています。艱難。

難は、菓（タン）という鳥（隹）の名が本義です。羽が金色をしてとても美しく、手に入れることが大変に〝むずかしい〟鳥なので難（扱いにくい鳥）と名付けたものでしょう。今は、単に〝むずかしい〟という意味に使われています。音は菓（タン）が変化してナンになりました。困難、難問。

嘆は、〝ああ！むずかしいなあ〟と思わず口につぶやくことです。〝なげく〟という意味の字です。嘆声はなげきの声。「感嘆」は〝すばらしいなあ〟と思わず声を出して感心すること。

歎の欠は、欠で、口を大きく開いた形を象った部首です。従って、歎は嘆と全く同じ意味に使います。感歎、歎賞。

謹は、〝細かい〟〝緻密〟の意味の堇と言との会意形声字です。言葉少なに、つつしみ深くもの言うことが謹です。〝つつしむ〟と読んでいますが、行ないや心をつつしむのは「慎」で、〝言葉をつつしむ〟のは「謹」です。謹言、謹啓、謹慎（言と行ともにつつしむこと）。

僅は、〝人が少ない〟というのが本義で、今は、人に限らず、物の少ない意味に広く使われています。わずか、僅少。

饉は、〝食べ物が少ない〟という意味の字です。作物のみのりが悪く、食糧が不足する状態を「饑饉」と言います。

瑾は、きめの細かい、黄色い宝石のことです。

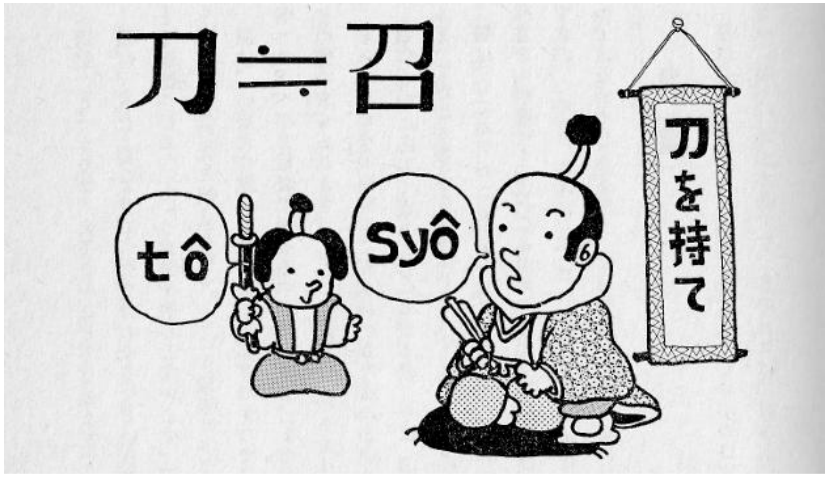
勤は、きめ細かに心を働かしてつとめる、という意味の字です。力は努力の力で、〝つとめる〟ことを表わす部首です。勤労、勤勉、精勤。

覲は、諸侯が勤務として、天子や将軍に謁見することを表わした字です。参覲交代というのは、江戸時代、大名が一年ごとに江戸に出て将軍に謁見することを言います。

槿は、朝、花を咲かせて、その日の夕方にはもうしぼんでしまうという、〝むくげ〟の木のことです。僅かの命しかないというので「槿」と名付けたものでしょう。「槿花一日の栄」などと、人の栄華のはかないことによくたとえられます。

召

召は、殿様が「刀を持て」と言って、小姓を〝よびつける〟ことで、刀と口の会意形声字です。殿様は、普通、「刀」と口にするだけで、小姓は殿様の前に進み出ます。この〝刀〟のトウという音がなまってショウになったのが〝召〟の音です。「行きましょう」が、幼児のまわらない口では「行きまとう」となりますが、toとsyôとは大変通じやすい音です。ナルホドの関係はよく覚えておいて下さい。



召集（よび集める）、召使い。

招は、召が口で呼んでよびつけるのに対して、手でおいでおいでして〝まねく〟ことです。召が目下をよびつけるのに対して、招はお客をまねくことです。今では、召も招も、口や手に関係なく使いますが、召は目下に対し、招は自分と同等以上に対して使い分けています。招集、招待状。

詔は、人をよびつけ（召）て、命令を言いつける、という意味の字ですが、古くから天子の命令に限って使われます。「詔勅」というのは、天子のみことのりのことです。詔書。

紹は、人をよびよせて〝引き合わせる〟という意味の字です。糸はむすぶものですから、〝人と人とを結びつける〟という意味を表わしています。「紹介（状）」というように使います。

昭は、〝日の光を招き入れる〟という意味の字で、〝明るい〟

〝照り輝く〟という意味に使います。

照は、灬が火の燃える様を表わす部首ですので、日や火が明るく〝てらす〟意味に使います。「照明」は、へやを電燈で明るくすることです。また、「照合」（二つの物をてらし合わせる）、「対照」などの使い方もあります。

沼は、召（ショウ）が小（ショウ）の意味で、湖水の小さなものという意味の字です。〝ぬま〟のこと。

超は、〝召に応じて走りよる〟のが本義。今は「跳」と同音なので（どちらもチヨウ）、〝とびこえる〟こと、またこえることから転じて〝ずぐれている〟などの意味に使われています。超越、超人、超特急。

貂は、〝てん〟のことです。豸は貘の所でお話したように四つ足の動物です。さて、天子の近侍の高官を「貂蟬」と呼ぶことがあります。侍臣の冠の飾りに〝てん〟の尾と蟬の羽とを使っていたからですが、〝てん〟の名前は、これを近侍の臣の冠に使っていたことから、召と豸とで貂と名付けたものではないでしょうか。

雀（雚）

雚は、艹（草）と隹（鳥）と口口（カン）（たくさんの口）との会意形声字。草むらで、鳥がカンカンと〝しきりに鳴く〟のが本義です。音のカンは、日本人である私たちはちょっと変に聞えますが、鳥の鳴き声を表現したものです。

部首としては、〝しきりに〟〝熱心に〟〝心をこめて〟という意味に使われます。

観は、〝熱心に見る〟〝心をこめて見る〟という意味の字です。観察、観光。また、〝ながめ〟という意味にも使います。外観、壮観。

勧は、〝熱心にすすめる〟こと。力は、人の名前で〝つとむ〟と読むように〝つとめる〟（努力）という意味の字で、部首として用いられる時は、ほとんどこの意味です。勧誘。

権は、もとは木の名前ですが、その木は、枝葉が〝しきりに〟繁茂して勢いが強いので「雚の木」＝権と名付けたものでしょう。今では、〝勢いが強い〟という意味に使われています。権勢、権力。

鸛は、鳥の名前です。カンカンという鳴き声の鳥で〝こうのとり〟のことです。

灌は、水がしきりに音を立てて流れこむこと。雚は水の流れこむ音を表現しています。「灌漑」は、

田畑に水を〝そそぐ〟こと。「灌腸」は、腸の中に水を〝流しこむ〟という意味の言葉です。

歓の欠は、で、人が口を大きく開いた形を表わしています。歓はこみ上げてくる喜びで思わず〝声を出す〟ことです。おさえきれないような、とても黙ってはいられないような。〝よろこび〟のことです。歓喜、歓声。

監

監の古い形はです。臣はで、目を大きく見開いた形です。〝見張る〟のが本義で、普通は〝見張る人〟つまり〝家来〟の意味に使われます。は人（ひと）の変形です。は、皿（さら）に水がいっぱい入っていることを示したものです。だから監は、皿に満だした水に人が顔をうつして、それを見つめることを表わした字です。

つまり、〝水かがみ〟が監の本義です。上から見おろして見なければならないので、〝見おろす〟〝部下を見張る〟という意味にも使います。監督、監視、監査。

鑑は、金属性の〝かがみ〟が本義です。鏡と同じものです。ガラス製の鏡ができるまでは、銅や鉄板を磨いて作りましたので、鑑とか鏡とかという字になりました。人は鏡を見て、初めて自分の姿が分かるので、〝反省する〟〝手本〟の意味にも使われます。亀鑑（かがみ＝手本）、年鑑。

檻は、囚人を監視するために入れておく木製の〝おり〟のことです。監視の意味の監と、材料の木とでこの字を作りました。檻（おり）は格子（こうし）で囲ってありますから、〝格子〟や〝手すり〟を檻（カン）と言うこともあります。欄檻（橋の手すり）。

艦は、海上の戦闘のために、防禦の檻（おり）を備えつけた大きな舟です。檻と舟との会意形声字です。軍艦、戦艦。

濫は、水かがみ（監）の水が〝外にあふれ出る〟という意味の字です。氾濫は、川の水が外にあふれ出ることです。転じて〝度が過ぎる〟という意味に使われます。濫用、濫造、濫読（みだりに読むということで、乱読では意味が通じません）。音は、監（カン）（kān）が変化してラン（lān）です。k音はl音に変じやすいのです。

覧は、見おろす意味の監の省略した形〝〟と見との会意形声字で、〝上から下をつくづくと見る〟という意味の字です。尊敬すべき人について使います。御覧、遊覧。

藍は、監（ラン）という名の草のことです。日本名では〝あい〟と言います。この草をとかして作った染料の色が〝あい色〟です。藍汁（あいじる）を煮つめると〝青色〟の染料ができあがります。それで、「青は藍より出でて藍よりも青し」（出藍（シュツラン）のほまれ）という諺が生まれました。弟子の方が先生よりりっぱになったことを表わした諺です。

襄（𧘇）

襄の古字は**𧘇**。衣と口口（カン）と𠂢との合字です。**丗**（𠂢）は、人が土仕事をしている形です。襄は、発音が「上」と全く同じなので「上（のぼ）る」という意味に使われることが多く、人名などで〝のぼる〟と読まれますが、本義は〝上衣をぬいで、ロ々にわいわい話しながら畑仕事をする〟ことです。話しながら仕事をすると、能率が〝上がる〟ので「上（ジョウ）」という音になったのかも知れません。

醸は、酒と襄との会意形声字です。〝かもす〟こと。酒がぶつぶつと言って発酵することです。〝ぶつぶつ言う〟意味の襄と、〝泡が上がる〟意味の上と、どちらからでも理解できる字です。醸造（酒）。

譲は、〝ぶつぶつ言う〟意味の襄と言とでできていて〝たがいに自分 の主張を思いきり言い合う〟のが本義です。酒が十分にぶつぶつ言えば、それが止んだとき、酒がりっぱにでき上がるように、人も十分に言いたいだけ言えば、自然と相手の立場がたがいによくわかりますので、〝ゆずる〟気持が自然と出てきます。譲は、今はもっぱら〝ゆずる〟意味に使われますが、本義が主張すべきことを十分に主張することにあるのは興味深いことではありませんか。「謙譲」とは、決してただ人の言うなりになることではありません。

穣は、禾（稲）と、酒が醸造される意味の襄とで、〝稲が豊かにみのる〟ことを表わした字です。「五穀豊穣」。人名では〝みのる〟と読まれます。

嬢は、醸造や豊穣の意味の襄と女（むすめ）とで、〝りっぱに一人前に完成したむすめ〟という意味を表わした字です。良い女（よむすめ）という意味の「娘」は、嬢と発音も意味も全く同じなのですが、今では、娘は〝むすめ〟、嬢は〝お嬢さん〟というように使い分けされています。

壌は、畑仕事をする意味の襄と土とで〝穀物を作り育てる土〟という意味を表わしています。「土壌」とか「壌土」というのは、単に〝土地〟という意味ではなくて、〝耕作のできる良い土地〟という気持がこめられているのです。「天壌無窮」の「天壌」も同様で単に天地という意味ではありません。〝物

を生み育てる大地〃という意味があるのです。

攘は、口々に言い合う意味の襄と手との会意形声字です。相手の意見を口でしりぞけるばかりでなく、手まで使うのが「攘」です。〃手でしりぞける〃つまり〃はらいのける〃ことです。「尊皇攘夷」は、皇室を尊び、夷（えびす）（外国人）を日本から追い払うという意味で幕末時代に口にされた言葉です。

五

五は、で〃片方の手〃の象形です。片手には指が五本あるところから、〃いつつ〃という意味を表わしたもので指事字です。

伍は、〃五人〃という意味の会意形声字です。軍隊では、五人をひと組とし、これを一つの単位にしました。これが伍です。この伍の長が「伍長」で、わが国の軍隊でもこの名称がありました。昔の軍隊は五人ずつ列を作って行動しましたので、これを「隊伍」と言います。日本の軍隊は四人一列でしたが、四人でも伍と言って、〃隊伍を整えて行進する〃と言いました。仲間から取り残されることを「落伍する」と言いますが、これは、行軍で隊伍から脱落するという意味の軍隊用語です。

吾は、自称のことばです。普通自分を指す時には〃ぼく〃と言って鼻をさします。自分の自、私のムは皆鼻の象形です。ところが、吾は、口に指（五）を加えて〃わたくし〃の意味を表わした会意字です。口を指さして〃ぼく〃と言う意味です。

語は、〃われ（吾）言う〃という意味の会意形声字です。〃ものがたる〃ことです。物語り。〃かたる〃が本義ですが、今は〃ことば〃の意味に多く使われます。国語、古語、語源、標準語。

悟は、〃われを認識する〃ことで、吾（われ）と心との会意形声字です。人間は他人のすることはよく見えて、そのよしあしはかなり公平に判断できますが、自分の姿は見ることができないように、自分の行為はとかく利己的に陥りがちです。そこで、心の鏡によくわれをうつしてみることが大切です。心の鏡に吾がよくうつった時に、これを悟（さとる）と言うのです。真の吾を、わが心に理解することです。

寤は、寝（ねる）の意味のと吾とで、〃ねむりからさめて吾にかえる〃という意味を表わした字です。〃さめる〃ことです。「寤寐にも忘れぬ」とは、〃寝（寐）てもさめても忘れない〃という意味のことばです。

及（𠬜）

及は、𠂇（𠂆）と又（𠂇）の合字です。𠂇は人の象形、又は手の象形です。前を行く人をうしろからつかまえとどめようとする形の字です。〝追いおよぶ〟のが本義で、〝手がとどく〟ことから〝ひきよせる〟の意味に使われます。追及、普及、及第。

汲は、〝ひきよせる〟意味の及と水とで、〝水をくむ〟意味を表わした会意形声字です。汲水ポンプ。井戸のつるべで水汲みをする時は、汲むのとあけるのと引き続いて次々と忙しく続くので、〝忙しい様〟を「汲々」と言います。

吸は、〝口で物をひきよせる〟という意味で〝すう〟ことを表わした字です。すえば、物が口にひきよせられるから、口と及とで、〝すう〟ことを表わしたのです。呼吸、吸収（すいとる）、吸入。

笈は、〝うしろからおう〟意味の及で〝背負（お）う〟意味を表わし、⺮は、竹製の箱（箱は元来竹製のはこ）を表わし、〝書物を入れる背負い箱〟のことを表わしました（木製の負い箱は板と書きます）。他郷に勉学に出ることを「笈を負う」というのは、他郷に遊学する者はこれに書籍を入れて旅立ったからです。

扱は、〝ひきよせる〟意味の及に、さらに手を加えて、〝物を手で取りあつかう〟意味を表わしたものです。

級は、〝品分けされた糸〟が本義ですが、今では、糸に関係なく、広く〝品分け〟〝順序だて〟という意味に使われます。はた（織機）を織るには、糸を品分けし、順序立てておいて、扱いやすいようにしておかなければなりません。そこで、〝とり扱う〟意味の及と糸とで、〝品分けされた糸〟という意味を表わしたのです。

急は、追及の意味の及と心とで、〝追及する時の心〟つまり〝いそがしい〟気持を表わしたものです。**刍**は及の変形したものです。

戈

戈は、**戈**でオ（サイ）と戈（ほこ）との形声字です。オは、〝断ち切る〟意味を表わした言葉です。従って**戈**も、〝断ち切る〟が本義の部首です。音はオ（サイ）（切）です。

裁は、衣類を作るべく、布を〝断ち切る〟のが本義の字です。「衣類の裁断」「裁縫」（布を断ち、縫（ぬ）う

こと）がこれです。デザインから裁断までは、変更がききますが、一旦裁断してしまえば、変更はできなくなります。そこで〝最終的な決着をつける〟ことを「裁断」と言うようになりました。裁断（さばく）、決裁（とりきめる）、裁定などは、この意味のことばです。

栽は、木をりっぱに育てるべく、むだな枝を〝断ち切る〟のが本義の字です。転じて、〝木を植える〟意味にも使います。栽培。

哉は、国語の「何と楽しいことか」とか「行こうか」のように、文末にあって、詠嘆や疑問の気持を表わす終助詞で、サイというその語の音を表わす部首に、表意の口を加えて作った形声字です。哉の字形がここで〝言葉（口）が断ち切れる〟という意味を表わしています。

戴は、〝別々になる〟意味の異と戈との会意形声字で、〝断ち切って別々にする〟ことから断ち切られたものが上へ上へと〝つみ上げられる〟意味を表わしています。また〝上にのせる〟ことから〝いただく〟「会長に○○氏を推戴する」というようにも使います。音はサイ↓タイ↓ダイ。（s）↓（t）

載は、〝上にのせる〟意味の戴の省略した形の戈に車を加えて〝車の上にのせる〟ことを表わしたものです。今では、車に限らず、舟または書物にのせる場合にも使います。「積載（量）」「満載」↓「記載」「掲載」。

截は、取った雀を焼き鳥にすべく、首を〝断ち切る〟ことを表わした字です。隹（鳥）と戈（切断）の会意字。音は、切る意味から「切（セツ）」です。截断、直截。

戠

戠は、音と弋（ヤで地上に立てた目じるしにする木の枝の象形で〝しるし〟の意味の部首）との会意形声字で、〝境界をはっきりと示すために設けられた、国境であることを明書した碑の類〟を言います。音は、ことばを意味し、また〝文字〟をも意味します。

部首としては、〝物事を明瞭に区別する〟意味に使われます。音は弋（ヨク）。

職は、〝耳で、物事をはっきりと聞き分ける〟ことが本義です。これは（民の声を聞くということ）役人として最も大切な〝仕事〟なので「役職」（しごと）というように使われるようになりました。今では、職は、〝職業〟というように、ほとんど〝しごと〟の意味に使われています。音は耳と戠（ヨク）（ジ）でシ

ョク。

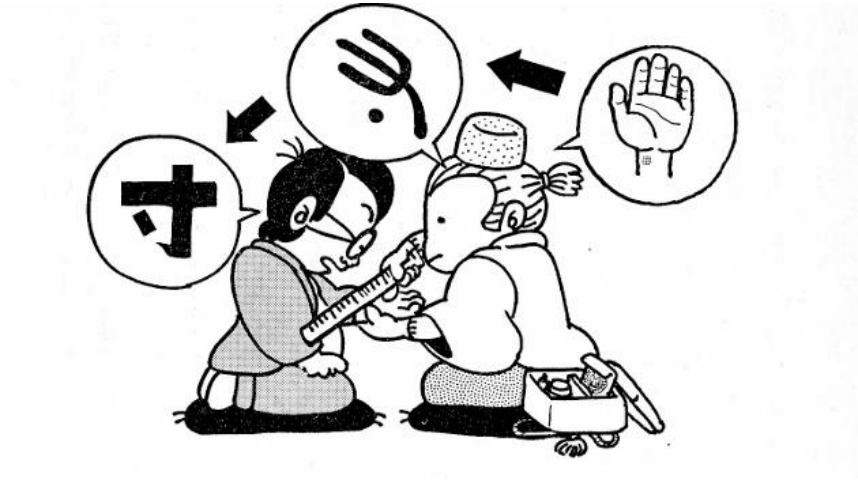
識は、〝言葉のもつ意味をはっきりとさせる〟ことが本義です。言（シン）と戠（ヨク）との会意形声字で、音はショク、転じてシキ。知識、博識。

〝物事を見分ける〟〝みとめる〟識見。認識。また、単に「戠」の意味〝しるし〟という意味に使うこともあります。標識。

織は、〝しるしのつけられた糸〟という意味の字で、〝布をおる〟という意味に使われます。はたをおるためには、糸にしるしをつけ、一本一本がはっきりと分けられて張ってなければなりません。〝しるし〟と〝分ける〟意味とをもつ戠（ヨク）と糸（シ）とで、〝はたをおる〟意味を表わしました。音は糸（シ）と戠（ヨク）でショク。総じて漢音で（syoku）の音は、呉音では（siki）です。織機（ショク）、紡織、組織（はたをおるための〝手順〟〝組み立て〟という意味）。

幟は、〝しるしの書いてある布（巾）〟という意味の字で、〝のぼり〟のことです。「旗幟」は、昔の戦争に武士が用いた〝はたじるし〟です。織の音はシです。

熾は、〝明瞭〟の意味の戠と火とで、〝火のあかあかと盛んに燃える〟ことを表わしています。熾烈。



寸

寸の古い形は、で、手の象形に、脈所の位置を示した・のしるしを加えた指事字です。手首から脈所までの距離を、短い長さをはかる時の単位とし、これを「寸（スン）」と言いました。

一寸法師というのは、この長さです。一寸の十倍を一尺と言い、十尺を一丈（ジョウ）と言います。また一間（ケン）（畳一畳（たたみ）のたての長さ（ジョウ））というのは六尺です。

寸は、部首としては、多くは〝基準〟〝きまり〟の意味で使われます。また、単に〝手〟（又）の意味に使われることもあります。

寺は、士（シ）と寸との会意形声字です。士は〝役人〟のことです

から、寺は、役人がきまりに従って、物をとりきめるところ、つまり〝役所〟が本義です。中国に初めて仏教が伝来した時、僧に役所を住居として与えたので、僧のいる所を「寺」と呼ぶ習慣が生まれました。そして、僧院がもっぱら「寺」と呼ばれるようになりますと、寺は役所の意味には次第に使われなくなりました。音は士（シ）または士（ジ）です。

侍は、寺、つまり役所に勤める人という意味の字です。今の官公吏に当たることばですが、日本の昔では〝武士〟（さむらい）に当たりますので〝さむらい〟と読んでいます。また、侍は君側に〝はべって〟奉仕するので〝はべる〟〝さぶらう〟意味にも使われます。侍従、侍臣、侍女。

討は、〝きまり（寸）に従って議論（言）する〟ことです。「討議」「討論」は、ルールに従って、相互に自己主張をし、また相手を攻撃します。この場合、相手の諭旨の欠点をすばやくとらえて、そこを攻撃することが大切です。そこで〝攻撃する〟〝攻める〟という意味にも使われます。討伐、征討。

導は、〝頼るべき基準（寸）に従って、人を道びく〟ことです。思いつきや、いい加減な考えで行なう「指導」は、導の本義にもとります。ガイドさんが、一定のコースを案内し、一定の解説をしています。これはりっぱな「導」です。誘導、先導、教導。

尊は、〝酒を入れた酒器を捧げ持って、神または貴人にそなえる〟ことを表わした字です。古い字形はで、両手で酒がめを捧げている形になっています。酒を供えるのは相手を〝たっとぶ〟心の表われであるところから〝たっとぶ〟という意味を表わしたものです。音は寸（スン）が変化してソン。尊敬。わが国では、神や貴人に対する敬称として「尊」の字を用い、これを「みこと」と読ませています。日本武尊。

樽は、酒を入れる木製の容器、つまり〝たる〟のことです。

尋は、ヨ（で手の象形）と工（左の省略した形）と口（右の省略した形）と寸（単位）との会意字。つまり、**𠦂**は、両手を広げて伸ばした時、左手の指先から右手の指先までの長さを、やや長い距離をはかる時の単位とし、これを尋としたのです。わが国では、これを、両手を広げるところから〝ひろ〟と言いました。「ちひろの海原」というのは、「千尋（ちひろ）」の意味で、大変に深いという意味ですし、「千尋（せんじん）の谷」というのも、大変に深い谷という意味のことばです。

射は、古い字形はで、弓に矢をつがえた形に手がそえられています〝まさに弓をいる〟ことを表

わした字です。後に、弓に矢をつがえた字形が、身に似ている所から、誤まって今の字形になったものです。「寸」という字体にでも改めたらどんなものでしょうか。

専は、古い字形はで、手に（糸まきの象形）を持った形を表わしています。〝子供が糸まきをひとりじめして手から離さない〟という意味の〝独占〟を表わしています。〝もっぱら〟。専門、専心、専属、専任、専用。

守は、きまりの意味の寸と家との会意字で〝家によくきまりが行なわれている〟という意味の字です。〝きまりをまもる〟ことです。

寺

寺については、前の寸のところでお話しました。〝役所〟が本義です。しかし、これが部首として使われると〝基準〟の意味に用いられることが多いようです。

時は、〝とき〟の意味を表わす日と、〝単位〟の意味を表わす寺との会意形声字で、〝ときの単位〟を表わしたものです。むかしは日の動きでときを計りました。今のように、一年を通じて長さの一定したときというものは考えられませんでした。日が地平線に見えた時を〝明け六つ〟と言い、地平線に沈んだ時を〝暮れ六つ〟と言って、その間を、今のほぼ二時間ほどの長さで六つに分け、それを〝ひととき〟としました。ですから、夏と冬とでは同じ〝ひととき〟でも長さにかなりの違いがあったのです。名称は今の十二時が九つ、二時が八つ、四時が七つ、六時が六つ、八時が五つ、十時が四つです。二時から四時までの八つ時に取る中食を〝お八つ〟と呼んで、これが今でも言葉として残っているわけです。

お寺で、日の出、日没に、六つの鐘をついて〝時〟を知らせたというのは偶然ですが、うまく合っていて、大変におもしろいことではありませんか。

持は、〝きまり（寺）を手にもつ〟という意味で、〝まもる〟ことを表わしています。護持。それは長く続けなければなりませんので〝たもつ〟意味にもなります。持続、保持、持久力。普通には、単に〝手に物を持つ〟の意味に多く使われます。

詩は、〝きまりのある言葉〟という意味の字で、文章の表現の上に、一定のきまりがあるものを言います。たとえば、漢詩のように、また和歌や俳句や新体詩のように、字数やその他表現上にそれぞ

れ一定の約束があるのが〝詩〟という字の持つ意味です。今では、字数などの上に形式的な約束を一切持たない、詩的内容だけを重んずる詩が盛んになっていますが、これでは、文字の上からは〝詩〟ではなくなっているわけです。

恃は、心に、一定の頼るべき基準が確立していて、心が安定していることを表わした字です。〝心に頼むところがある〟という意味で、〝たのむ〟という訓があります。同じ〝たのむ〟意味を持つ「怙」と合わせて「怙恃する」というように使います。また、「怙恃」を〝父母〟の意味に使うのは、「父無くば何をか怙(たの)まん、母なくば何をか恃まん」という詩経の句に由来するものです。矜恃(キョウジ)（自信と誇り）は、よくキンジと読み誤まられて使われることばです。

等は、〝竹簡（竹ふだ）をきまり良く整理する〟という意味で、〝順序だてる〟のが本義の字です。「一等」「二等」というように、順序だてることから、〝段階（等級）の使い方が生まれました。昔、紙のない時代は、竹か木の札にうるしで字を書き、このふだをなめし皮（韋）でつなぎ合わせ、巻き物にしました。今でも、書物に一巻二巻という名前のあるのはその名残りです。孔子が熱心に読書したため、「韋編三たび絶(た)つ」と言ったのは、この簡をとじた韋がたびたび巻いたり開いたりしたために切れたことを言うのです。それにしても、今の書物に比べて大変にかさばるので、整理には頭を悩ましたことでしょう。

特は、〝祭礼の犠牲のために、役所（寺）に飼われている牛〟という意味の字で、〝犠牲用にとくべつに飼育されている牛〟というのが本義です。とくべつの牛なので、今では〝とくべつ〟という意味に使われることの多い字です。特別、特定、特質、特権、独特。

待は、〝役所（寺）に行（彳）く〟という意味により、〝役所に願い出て、その処置をまつ〟ことを表わした字です。役所という所は、民の声や訴えを聴く所（廳→庁）ですが、昔から無能な者が多く役人になると見えて、人を待たせたらしいですね。

なぜなら「役所（寺）に行くとかければ、〝待たされる〟と解ける」からです。

方

方は、耕作に使う〝すき〟の象形字ですが、今は、〝方法〟（読み方、書き方の方）という使い方と、〝四方〟（四つの方角）という使い方と〝四角〟という使い方が多く、本義には全く使われませ

ん。方形（四角形）、正方形、長方形。

防は、阝と方との会意形声字です。阝は崖のしるしの部首ですから、〝四方を崖で囲む〟という意味になります。つまり、外敵から守るための土手を周囲に築いて〝ふせぐ〟という意味の字です。防壁、防禦、防衛。

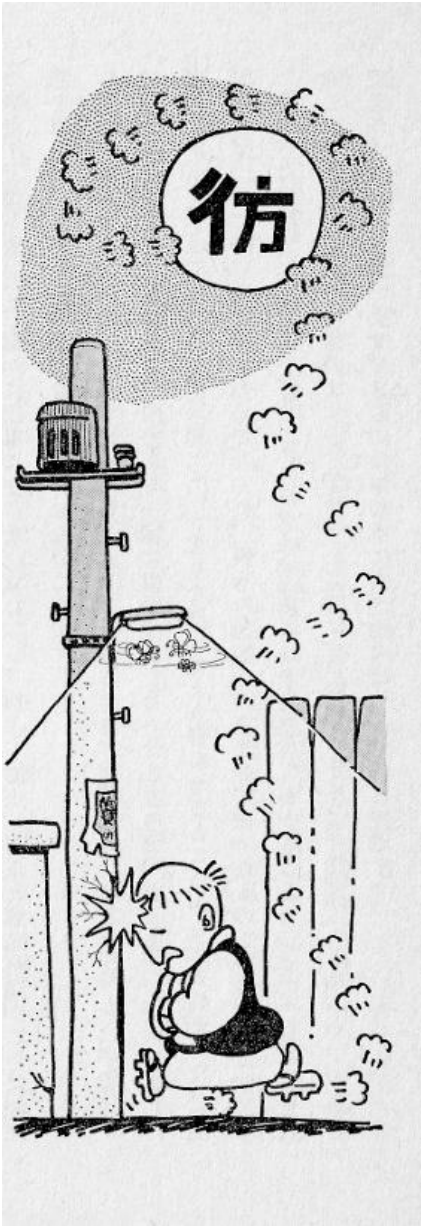
坊は、本来防と同じ意味の字で、外敵をふせぐための土の防壁や、水をふせぐために土を積み上げて作った堤防が本義の字です。転じて〝防壁で囲まれた建物〟を坊と言うようになりました。僧の居室を「僧坊」というのはこの意味とも取れますが、また「僧房」の意味とも取れます。僧坊の主あるじを「坊主（ボウズ）」と言うのですが、今は単に僧の意味に使います。「坊ちゃん」というのは、子供は髪の毛を僧のように短く刈っているために起こった呼び名です。

妨は、〝四方に女がいる〟ということで、女に囲まれては、仕事が〝さまたげられる〟という意味の字です。気が散って、確かに仕事にならないでしょう。妨害、妨止（防止と意味が違うことに御注意ください。人の仕事の邪魔をして、させないことです）。

紡は、まゆの糸を何本も合わせて一本の糸により上げること、〝つむぐ〟ことを表わした字です。細糸の糸まきを四すみに置き、四方から一緒に引いてより合わせますので、方と糸とで表わしました。〝つむぐ〟ということばは、つむ（錘）という重りを使ってより合わせるところから生まれました。「混紡」は、つむぐ時、同じ種類の糸でなくて、異った種類の糸をまぜて使ったものという意味です。

肪の方は、〝四方〟つまり〝まわり〟の意味。〝体のまわりの肉〟ということで、〝あぶら肉〟を意味しています。ついでに言いますと、「脂肪」の脂は〝旨（うま）い肉〟という意味の字で、あぶら分の多い肥えた肉のことを言います。旨の日は口（くち）の中に食べ物のはいっている形です。

彷は、あっち（彼方）へ行ったり、こっち（此方）へ行ったりして、行く方角がはっきりしていな



いという意味の字で〝さまよう〟ことです。彷徨。また〝はっきりしていない〟ことから〝ぼんやり〟の意味にも使われます。

芳は、〝あたり（四方）一面が草花におおわれている〟という意味の字で、〝美しい〟という意味に使われます。芳香、芳草。また「芳志」「芳名」というようにも使われます。

訪は、〝あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしてたずねる（言）〟という意味の字です。歴訪、訪問。

放は、古い字形は■で人と攵（ボク）との合字になっています。攵は、手に棒とか鞭とかを持った形で、従って、放は〝棒をふるって人を追いはらう〟という意味の字です。音は攵（ボク）が変化してホウになり、その音から〝攵〟が〝放〟と書かれるようになったものでしょう。追放、放伐。

「放浪」は、追い放たれて、あちこちさまよい歩くのが本義ですが、今は〝気ままに歩きまわる〟意味に使われます。そのため〝勝手〟〝気まま〟の意味に使われることが多くなりました。放歌、放言、放縦、放蕩。

畐

畐は、㚔で〝りっぱな酒どっくり〟の形を象った字です。部首としては〝りっぱな財産〟の意味に使われることが多いようです。音はフク。

富は、畐と家（宀）との合字です。りっぱな酒器のあるような家は裕福な家にきまっていますので、畐と宀とで〝とみ〟を表わしました。音は畐（フク）ですが、短かくフと発音します。

福は、畐と神（礻）との合字です。〝神様から授けられたとみ〟という意味の字です。目に見える物質的な財産に対して、目に見えない精神的な財産を言います。目に見えない神の授ける財産は、やはり、目に見えないわけです。幸福、福祉（祉は、神が止まるの意味で幸いが舞い下ることです）。

副は、財産（畐）を二つに分（刂）けるという意味を表わしています。刂は刀（かたな）の変化した形で、部首としては多く〝切る〟という意味に使われます。副の本字は「副」で、沢山ある財産を二つに分けて、半分しかないものとして使い、片方は万一に備えておく、副は、その〝ひかえ〟という意味を表わしている字なのです。だから、「副会長」というのは、会長のひかえであって、会長に万一があった場合に備えておくというのが本義です。後には「副弐」というように、〝次〟〝二番め〟という使

い方も生まれしたが、本来は、そういう意味の字ではなく、どこまでも万一に備える〝予備〟という意味です。ですから、副会長には副会長としての特別の職務はないのがほんとうです。「副本」は本来の用法ですが「副読本」はそうではありません。

幅は、巾（布）と畐とで〝たっぷりと豊かな布〟という意味を表わしています。つまり、〝ばば〟の広い布という意味です。タオルなども安いものは幅がありません。幅は、〝ばばがある布〟が本義で、今は単に〝ばば〟という意味に使います。幅員。

輻は、〝ぜいたくな車〟という意味の字で、車輪が木を輪切りにして作ったものではなくて、㊋のようになった車輪を備えつけた車を指しています。今はこの車輪の中心と輪の周囲とを結ぶ放射線状の沢山の棒を輻（和名はや）と言うのです。この輻のある車輪を〝輪〟というのであって、輻のない、つまり木の輪切りにしたような板の車輪は〝軽〟と言って正しくは〝輪〟とは言わないのです。「輻射」とは、車輻が一点から四方に放射する様子をたとえて言ったことばです。太陽の熱の伝わり方を輻射熱というのはこれです。輻はわが国では〝矢〟と言うので、それに関係のある〝射る〟を使って「輻射」と言ったのです。

复

复の古い字形はで、旨は、二つ重ねたような形をした酒器の象形です。夂は、止（足の裏の象形）をさかさにしたものの変形です。复は、復の本字で、〝同じ道を重ねて行く〟という意味の字です。旨が〝重ねる〟という意味、夂が〝歩く〟意味を表わしています。今では复はつまり〝重ねる〟という意味の部首として用いられています。

複は、〝布を重ねて作った着物（衤）〟という意味の字です。わが国では、〝合わせ〟と言います。夏の着物〝ひとえ〟は「一重」という意味のことばですが、複衣に対して「単衣」と書きます。今では、単を英語のシングル、複をダブルの意味に使うことがあります。また、衣類に関係なく、広く〝重なり合う〟〝こみあう〟という意味にも使います（〝合わせ〟のためには別に袷という字が作られました）。複雑、重複。

腹は、〝肉体のなかで、最も多くの器官が重なり合っているところ〟という意味で、月と复とでできています。〝はら〟には腸が重なり合っているからです。心の中に持っている考えを「腹案」というように〝心〟の意味にも使います。

復は、〝一度通った道を重ねて行く（彳）という意味の字で、〝かえる〟ことを表わしています。行きに通った道を通ってかえるのが復なので、別の道を通って帰ったのでは復とは言えません。今では道に関係なく、〝物事をくり返す〟〝もと通りになる〟という意味に使います。復習、回復、復旧、復活。

馥は、〝行ったり来たりする〟意味の复と香とで、〝良い香がただよう〟という意味を表わしています。馥郁たる香気。

覆は、包みおおう意味の冊に復を加えた会意形声字。冊は上からと下からとで物をおおい包む形を表わした部首です。おおいは取っても、必ずまた付けるので、復の意味と音とを加えて覆としたのです。

包

包は、勹と巳との合字です。勹は、うで人が物をだきかかえている形です。巳（み）はおなかの中の赤ちゃんの象形です。従って、包は〝子供が腹の中につつまれている〟形で、〝つつむ〟という意味を表わしています。包装、包容（〝包み入れる〟ことから〝度量〟の意味）、包含。

抱は、扌（手）と包とで、〝手で包む〟つまり〝だきかかえる〟意味を表わしたものです。抱擁。「抱負」は、抱いたり、背負ったりすることが本流ですが、〝心に抱く望み〟という意味に使われています。

飽は、〝赤ちゃんがおなかの中にいる〟意味の包と食との会意形声字です。〝食べ物を沢山食べて、おなかがふくらむ〟という意味で〝あきる〟ことを表わしたものです。「飽食暖衣」とは、飽きるほど食べ、着物は暖かいほど沢出身につけることで、ぜいたくな生活をすることを表わしたことばです。

砲は、石を包んで、それをはじきとばす武器のことです。わが国では、これを〝石ゆみ〟と言いました。その大じかけなものが〝大砲〟です。今では、火薬の力で鉄の弾丸を打ち出す武器の名前になりました。

鞄は、革（なめし皮）で作った、物を包むための物という意味で、〝かばん〟のことを表わした日本製の漢字です。

胞は、〝赤ちゃんがおなかの中にいる〟意味の包に月を加えて、〝胎児を包む肉膜〟という意味を

表わしたものです。人は胞から生まれますので、「同胞」というのは、同じおなかから生まれた。〝兄弟〟という意味になります。また、生殖の働きを持つものに、この胞を用いることがあります。胞子、細胞。

泡は、〝空気を水で包んでいる〟という意味で、〝あわ〟を表現したものです。あわは消えやすいので、降って消えやすい春の雪のことを「泡雪」と言います。

庖は、家の意味を表わす广と包とで、〝食物を包みおさめておくへや〟という意味を表わしています。〝台所〟〝調理場〟のことです。「庖丁」は、調理用の刃物という意味です。

疾は、泡つぶの意味の包と病気の意味の疒との会意形声字です。体じゅうに、水泡のようなはれもののできる病気、〝天然痘〟のことです。あとで、（きず）瘡が残るので、昔はこれを「疱瘡」と言いました。

袍は、〝中に綿を包んである着物〟という意味のことばで、俗に言う〝綿入れ〟のことです。

鉋は、〝中に金を包んである大工道具〟という意味の字です。かんなは、刃が木の台の中にはめこまれているので、鉋という字で〝かんな〟を表わしたものです。

者

者の古い形は、で、容器からはみ出るほど〝ものがひどくたくさんある〟ことを表わした字です。今は、〝もの〟という意味と、〝ひどくたくさん〟という意味と二つに分かれて使われています。つまり、単独に使われる時は〝もの〟で、部首として使われる時は〝たくさん〟という意味に使われるのです。音は部首としては、sha（シャ）→ sho（ショ）→ cho（チョ）→ to（ト）と変化して使われています。

煮は、火が燃える意味の灬と、〝ひどい〟という意味の者との会意形声字で、〝どんどんと火を燃やす〟という意味で〝にる〟ことを表わしたものです。「煮沸（フッ）」は煮て沸かすという意味のことばです。音は者（シャ）。

奢は、〝ひどい〟という意味の者と威張る意味の大との会意形声字です。大は、手足を広げてカんでいる形ですから、〝威張る〟という意味があります。それで、「あいつ、大きな顔をしていやがる」などというわけです。〝ひどく威張る〟〝度を越して見えを張る〟という意味の字です。音は者（シャ）です。

豪奢、奢侈（シ）。

暑は、日（太陽）と、〝ひどい〟という意味の者との会意形声字です。〝太陽がひどく照りつける〟

という意味で、〝あつい〟ことを表わしたものです。同じ〝あつい〟のでも、湯のあついのは、火のしるしのついた「熱」です。暑い⇔寒い。熱い⇔冷たい。音は者（ショ）です。酷暑（コクショ）、残暑（ザンショ）、避暑（ヒショ）。

諸は、〝ひどく言葉が多い〟という意味の字ですが、今では単に〝多い〟という意味に使われて〝もろもろ〟などと読まれています。「諸国」は〝もろもろの国〟〝多くの国〟ということです。諸君、諸侯、諸将。音は者（ショ）です。

著は、〝ひどく草がしげる〟という意味の字ですが、これも今は草に関係なく、物事の〝ひどい〟〝いちじるしい〟という意味に使われています。また〝目立つ〟〝表面にあらわれる〟ことから〝あらわす〟（本を書く）という意味にも使われます。顕著、著明、著名、著述。

署は、網の意味の罒と、〝たくさん〟の意味の者との会意形声字です。〝網の目のようにこまかく手分けする〟という意味の字です。〝手分けする〟〝配置する〟という意味に使います。部署、署置。また、〝役所〟の意味にも使います。警察署（仕事を細かく手分けして、しかも網の目をはったように緊密な連繋を取って犯人を捜査する役所）。

薯や**藷**は、いもがひと所にたくさん集まってできるところから、署（諸）と艹とで表わしたものでしょう。甘薯、甘藷（甘いいもという意味の字です。さつまいもというのは、わが国における原産地が薩摩の国、今の鹿児島県だったからです）。

緒は、同音の初の意味の者と糸との合字です。〝糸の初〟つまり。〝糸口（いとぐち）〟を表わした字です。音は初（ショ）ですが、誤って著（チョ）と読まれることが多いようです。端緒、緒言、緒論、由緒（血統（すじ）の意味）。情緒（喜怒哀楽の糸口という意味のことば。今ではほとんどジョウチョと読まれています）。

渚は、緒（初）（ショ）と同じ意味の者と水との合字で、〝水のいとぐち〟という意味の字です。陸地から水にかわる波うちぎわ、つまり〝なぎさ〟のことです。水ぎわ→みぎわ（水（みず））。

曙は、緒（初）（ショ）の意味の署（ショ）と日との合字で〝太陽の糸口〟という意味の字です。〝夜明け〟を表わしています。太陽が地平線に姿を現わしかけた状態が曙です。この字は〝あけぼの〟と訓じられています。これは〝ほのぼのとあけ初める〟という意味のことばです。

曙光は、〝あけぼのの日の光〟ということですが、今までの暗黒を破って、光明に満ちた世界になることを約束していますので、〝良いことの起りかかる兆（きざし）〟という意味によく使われます。

都は、〝ひどくたくさん〟という意味の者とβとの会意形声字です。βは〝へん〟の場合は崖（がけ）です

が、〝つくり〟の場合は、邑の意味になります。阝は邑の省略変形したものです。都は、〝たくさんの邑を含んだ大きな町〟という意味で〝その国の主権者の住むみやこ〟を表わしたものです。単に〝大きな町〟の意味にも使われます。音は者です。首都、国都、都市、都会、都邑。

箸は、者の本義に竹を加えた会意形声字で、〝容器に盛られた物をつまむ竹ばし〟という意味の字です。昔の箸は、一本の竹を湾曲させて、〝つ〟のようにし、今のピンセットのようにして物をつまみました。その様手が、鳥のえさをついばむ〝口ばし〟に似ているので〝はし〟と呼んだものです。昔は、口ばしのことも、単に、〝はし〟と呼んでいました。

辰

辰は、原形ははまぐりが貝殻から足を出している形を象った象形字ですが、今は貝の意味には全く用いられません。その代り、辰と虫との合字である蜃が、〝はまぐり〟という意味を表わしています。

辰は、十二支の第五位として用いられたため、方角や時刻、年月日を表わすのに使われて、「時」や「日」の意味によく使われています。「良辰」は〝良い日〟という意味、「辰刻」は〝時刻〟という意味です。「星辰」は星という意味ですが、「三辰」は、日と月と星との三つを含めた意味になります。部首としても、一定した意味に使われないので、ちょっとやっかいな手です。音はシンです。

晨は、〝日が辰の方角（子が北、午が南で、この間を六つに分けて、順に〝丑寅卯辰巳〟となりますので、東からわずかに南に片寄った方角です。ついでに言いますと〝子手線〟というのは、地球を南北に結ぶ線、という意味の字です）にあるころ〟という意味で、太陽が出てまだ間もないころ、つまり〝朝〟を表わした字です。

震は、雷と同義の字です。雷の訓の〝かみなり〟は〝神鳴り〟の意味ですが、漢字の「神」も本義は実は雷なのです。雷の古い字形はで、⊕は車輪の形です。雲の上で、天の神様が車を引き回している音が雷鳴（神鳴り）だと考えられていたのです。雷は雨を伴うので、後に雨が付いたものです。また、⊕も一つに省略されました。

電は、雷から出る〝いなずま〟を表わした字です。古い字形では、やはり雨はありません。神の申が、この電のと同じ〝いなずま〟を表わした字です。つまり、神は、いなずまによって、天にある〝かみ〟を表わした字なのです。ついでに言いますと、

神は、天の神で、地の神が社です。社は、〝土地の神（ネ）という意味の字です。「社会」は、この土地の神（社）を中心に人々が集合（会）して作られるので「社会」と言うのです。

震は、神（シン）の意味の辰と雨とで作られた、〝かみなり〟が本義の字なのです。雷鳴は大地をびりびりとふるわせますので、〝ふるわせる〟意味が生まれました。「地震」というのは、雷鳴によって生ずる震動のことを言うのです。中国にはないのですが、わが国では、今私たちが「地震」と呼んでいるものが多いので、用法が中国と変わってしまったのです。

振は、震の意味の辰に手を加えて、〝手をぶるぶるふるわせる〟意味を表わしたものです。〝手をふる〟が本義ですが、今では、手に関係なく使います。振動、振興（ふるいおこす）。

脣は、震の意味の辰に肉を加えて、〝ぶるぶるふるわせることのできる肉体の部分〟つまり〝口びる〟を表わしたものです。

唇は、よく脣の意味に使われますが、本義は〝驚いて口から大声を出す〟ことです。今は、脣の代りに使われています。

娠は、胎児がおなかのなかで動く意味を表わす辰と女とで、〝はらむ〟ことを表わした字です。妊娠。

賑は、財貨（お金）の意味を表わす貝と、動く意味を表わす辰との会意形声字で、〝お金が動いて景気が良い〟という意味を表わしています。〝にぎわう〟こと。殷賑（インシン）。また、貧困な人々に金品を与えることをも言います。賑恤（シンジュウ）（にぎわす）、賑給。

蜃は、辰の本義である〝はまぐり〟と虫との会意形声字です。やはり〝はまぐり〟の意味を表わしていますが、また、想像上の動物「竜」の一種〝みずち〟をも言います。「蜃気楼」とは、この蜃がはき出す気によってできる空中の楼閣であるとの考えで名付けられたものです。

果

果は、■で木の上にくだもののなっている形を表わした字です。〝くだもの〟が本義の字です。種が芽を出し、木になり、花を咲かせ、最後に実を結びます。だから、果は〝最後〟〝はて〟の意味に用います。また、〝はたす〟（仕とげる）という意味にも使います。「結果」は、〝実（み）（果実（ジツ））を結ぶ〟という意味の言葉ですが、〝原因に引き継いで起ること〟の意味に使われます。仏教では、この〝原



因結果〟を簡単に「因果」と言っています。「果報は寝て待て」の「果報」は、因果応報の意味で、〝よい因をなせば、求めなくてもひとりでによい果となって報いられる〟ということですが、今ではよい因をなすことが忘れられて、果報が、単なる〝幸運〟の意味に取られているのは残念なことです。

菓は、果が、〝はたす〟など別の意味に転用されるようになったため、〝くだもの〟を表わす字として、新しく作ったものです。「菓子」は、〝くだもの〟の意味のことばですが、今ではケーキ類の名称になってしまいました。今でも、「水菓子」という言い方は残っています。

課は、〝はたす〟の意味の果と言との会意形声字です。〝仕事を果たすように言いつける〟ことが本義です。「課題」は、果たすように言いつけられた問題ということです。〝仕事を割りあてる〟こと。また〝割り当てられた仕事〟。日課。音は果(カ)。

夥は、〝果実が多く木になっている〟という意味の字で、広く〝物の多い〟意味に使われています。おびただしい。音は果(カ)。

顆は、頭の意味の頁と果との会意形声字。〝頭のようにまるい果実〟という意味の字です。音は果(カ)。

踝は、足首の両側にある、果実のように丸くふくらんだところ〝くるぶし〟を表わした字です。音は果(カ)。

裸は、果実を着物（衣）の中に〝つつむ〟ことを表わした字です。裏という字に似ていますが、全然違います。〝つつむ〟こと。音は果(カ)。

裸は、つつまれていた果実（裏）が着物の外に出ている形ですから、〝むき出しにする〟という意味になります。転じて、今では、着物を脱いで〝はだか〟になる意味に使われているのは、ネのついた字だけに当然のことでしょう。音は果(カ)が変化して、ラになりました。裸体。「裸子植物」は、松、杉などのように、胚珠が子房で包まれずに、外に出ている植物のことです。「被子植物」に対するものです。

未

未は**木**、で、まだ**木**（果）のように大きくならない、つまり〝未熟〟な果物の形を表わした字です。〝未熟〟ということで〝まだ……ない〟という意味に使われます。音はミが呉音、漢音はビ。未完成、未来、未知、未納、未開。「未亡人」は、〝まだ亡(な)くならない人〟という意味で、夫を失った婦人が自分を謙遜して言うことばです。「〇〇未亡人」とよく言われていますが、本義からすれば、早く死ねと言っているようで、大変に失礼な言い方です。

味は、未熟な果実を、「もう食べられるかな」と待ち遠しく思って〝あじをみる〟意味の字です。未熟な果実を表わす「未」に口を加えてあじを表わすとは、なかなかあじのある表現ではありませんか。味覚、珍味。「味方」は「身方」の意味のあて字です。

妹は、未熟な意味の未に女を加えて、〝未熟な女〟ということで、〝いもうと〟という意味を表わしたものです。音は未の変化したマイです。i（イ）がよくアイに変化するのは、英語の場合と全く同じことで、興味あることです。

mi(ミ)→マイ　si(シ)→サイ　chi(チ)→タイ　ki(キ)→カイ

未→妹　思→細　治→胎　記→改

milk(ミルク)→mile(マイル)　signal(シグナル)→sign(サイン)

tick(チック)→tie(タイ)　king(キング)→kite(カイト)

昧は、日（太陽）が未熟である。つまり、〝まだ空に日が上がらない〟ことを表わした字です。〝くらい〟という意味に使われています。音はマイです。また、〝はっきりしない〟〝ぼんやり〟〝愚か〟の意味にも使われます。曖昧、蒙昧。

寐は、寝るという意味の寝と、未熟の意味の未との会意形声字で、〝未熟な睡眠〟という意味を表わしている字です。〝うたたね〟〝まどろむ〟という意味の字です。熟睡ではなくて〝浅い眠り〟のことです。寤寐（寤は吾の項参照）。

魅は、未熟という意味の未と鬼との会意形声字で、〝未熟〟な鬼つまり、人間とも鬼ともつかぬ〝ばけもの〟を表わしたものです。音は未(ミ)です。

人間のかっこうをして人に近づき、人をあやしげな力で惑わすということです。これが「魅惑する」ことであり、そのあやしげな力が「魅力」なのです。魑魅魍魎(ちみもうりょう)。

曼

曼は、冒（ボウ）と又（手）との会意形声字です。冒は、帽子の本字で、上の冃が帽子の象形です。下の目は、目の所まで〝目深（まぶか）くかぶる〟という意味で付けたものです。従って、冒は防寒用の帽子と思えばよろしいでしょう。寒い時には、少しでも多く顔を包みたいので、やっと目が見える所まで帽子を下げるものです。歩いているとだんだんずり下がってきて、目が見えなくなりますが、それでもつい、危険をおかしてそのまま進もうとするものです。そこで、冒は〝危険をおかす〟という意味に転じて、「冒険」という使い方が生まれました。そのため、帽子の意味を表わす字としては、冒に、材料の布を表わす部首の巾をつけて帽としたのです。

曼は、帽子を目深くかぶった人の手を取って〝手を引いてやる〟のが本義の字です。転じて、〝引っぱる〟ことから〝長く伸びる〟という意味に使われるようになりました。音は冒（ボウ）が変化してバン。普通は呉音のマンで読まれます。

蔓は、草と、長く伸びるという意味の曼とで、〝草の長く伸びるところ〟つまり〝つる〟を表わしたものです。「蔓延（マンエン）」は蔓（つる）が延びるという字義ですが、〝はびこる〟ということで、「病気が蔓延する」というようにも使われます。

鰻は、〝長く伸びた魚〟という意味の字ですから、言わずと知れた〝うなぎ〟です。

饅は、〝大きく引き伸ばされた食べ物〟という意味の字で、ふくらし粉を使って原形より大きくふくらませて作った「まんじゅう」（饅頭（ジュウ））のことを言います。頭のように〝まるい〟という意味で「饅頭（マントウ）」と言います。なまって、「まんじゅう」になりました。

幔は、〝長く引きめぐらされた布〟という意味の字で、〝長く引き渡す幕〟のことを言います。普通「幔幕（マク）」というように使います。

漫は、蔓延（ひろがる）という意味の曼に水のしるしを加えて、〝水が広々としている〟様子を表わした字です。「漫々」は、海の広々と果てもなく続く有様を表現したものです。〝果てもない〟という意味で、〝心の趣くままにする〟「漫遊」「漫歩」「漫筆」「漫談」などのことばが生まれました。「漫画」も、その意味のことばです。

慢は、〝心が果てもなく大きく広がる〟ことを表わした字です。「慢心」「驕慢」など、〝おごりたかぶる〟意味と、「放慢」「怠慢」など〝しまりがない〟意味とがあります。また、〝長びく〟意味に

「慢性病」という使い方もあります。これはむしろ、「曼性」と書くべきものでしょう。「自慢」と同じ意味であるべき「我慢」が、遂に〝放慢をおさえる〟意味に使われているのはどういうわけでしょうか。仏語では「我慢」とは、〝自分を偉く思い、他人を軽蔑する〟という意味に使い、また、わが国でも古くは、「我慢」は〝わがまま〟の意味に使っていたのです。

非

非は、で、鳥が両翼を開いた形を表わしたものです。翼が左右反対に向いているというので、〝反対〟または〝否定〟する意味を表わしたものです。音は〝背く〟（そむ）意味の背（ハイ）です。つまってヒとも読みます。また、〝いけない〟〝悪い〟という意味にも使われます。

扉は、〝左右反対に開く戸〟という意味の字で、〝観音開きの戸〟が本義の字です。片開きの戸なのに、「扉」の字を使っているのをよく見かけますが、それは、扉を単なる〝とびら〟の意味に誤解しているためです。音は非（ヒ）です。開扉、自動扉。

排は、〝反対〟の意味の非に手を加えて、〝反対側に押しのける〟という意味を表わしたものです。音は非（ハイ）です。「排斥」「排除」「排撃」などと使います。また、「排気」「排水」のように〝外に出す〟意味に使います。バレーボールを「排球」というのはうまい訳語ではありませんか。

誹は、〝非難して言う〟という意味の字です。〝そしる〟ことです。「誹謗（ボウ）」などと使います。この非は、〝悪い〟という意味の非です。

俳は、〝非人〟（人でない）という意味の字です。昔、乞食（こじき）（食べ物を乞い歩く人という意味のことば）のことを〝人でない〟という意味で〝非人〟と言いました。また、昔は舞台役者を軽蔑して〝川原乞食〟と言いました。つまり、「俳優」というのは〝非人〟という意味のことばだったのです。音は非（ハイ）です。

「俳徊」というのは、乞食のように、〝うろつきまわる〟というのが本義ですが、今は〝そぞろ歩き〟というように、高尚な意味のことばに使われています。「徊」は、人が歩き回るという意味の字です。

俳は、わが国では「俳諧」に関係して、俳句、俳人、俳画などと使われています。

徘は、「俳徊」の意味のために、あとから作られた字です。つまり、彳の代りに、〝歩く〟意味の彳



を使ったもので、今では「俳徊」は、「徘徊」と書かれることが多いようです。

霏は、俳が人であって人でないように、〝雨であって雨でない〟ものを表わしています。つまり〝きり(霧)〟や〝もや(靄)〟のことです。また、非(ヒ)は飛と同音なので、〝雨中雪が風に吹かれて飛ぶ〟意味にも使われます。雨(雪)が霏々と降る。

匪は、箱(匚)であって、箱でない〝はこ〟という意味の字です。匚は、〝はこ〟の意味の部首です。〝はこがまえ〟と言います。普通、箱と言えば方形をしていますが、匪は、〝円形のはこ〟のことです。それで、箱でない箱という意味で非と匚とでこれを表わしたものでしょう。匪は、「匪賊」など、非の意味で使うことが多いので、はこの匪のために竹を付けて「篚」という字を作りました。

輩は、〝車が押しのけ合うようにぎっしりとならんでいること〟つまり〝多くの車〟というのが本義の字ですが、今は、全く車に関係なく、〝多くの人〟という意味で〝仲間〟の意味に使われています。音は非(ハイ)です。同輩、先輩、後輩。

斐は、模様の意味の文と非との会意形声字で、〝ぎっしりと並べられた模様〟という意味の字です。〝美しい〟〝あや〟(模様)という意味に使われ、人の名前にもよく用いられるものです。

悲は、心の中でこうありたいと願っていることと反対の結果になって悲しい、という意味で〝かなしい〟という気持を表わした字です。

悱は、悲と全く同じ部首で作られた字です。心に思っていることが、思うように言うことができないで〝いらだつ〟という気持を表わした字です。同じ「匕」(うしなう)と心とで、「忙」(いそがしい)と「忘」(わすれる)とを作ったのと全く同じ例で、同じ材料を使って作っても、味わいの違ったものができるものですね。悲も悱も、音は非(ヒ)です。

論語に「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」とあります。憤は、思うことが心に溢れるほどあって、おさえ切れないことで、悱と同じく、うまく心の中が言い表わせないでいらだつことです。孔

子は、弟子たちの学習状態がそういう状態にまで達しなければ教えなかったということです。これが「啓発」ということばの起りです。

菲は、かぶに似た「ヒ」と呼ぶ野菜のことです。非（ヒ）と草の形声字です。「菲食」は菜食の意味で、粗食であることを表わしたことばです。また、「浅学菲才」などと自分の才能を謙遜して言うのに使います。

緋は、色を表わす部首の糸と非（ヒ）との形声字で、ヒという色のことです。色には、エ（コウ）という色の紅、甘（コン）という色の紺、彔（ロク）という色の緑、此（シ）という色の紫など、糸の形声字が多くあります。

責

責は、𠦂（セキ）と貝の会意形声字です。𠦂は朿（セキ）の略字です。朿は、木にとげの形を表わした「を加えて、〝とげのある木〟という意味を表わした部首で、これに刂（刀）を加えると「刺（さす）」という字になります。朿＝𠦂は、部首としては言うことを聞かないと刺すぞと言って〝せめる〟意味を表わします。

責は、〝貸した金（貝）を返せと言ってせめる〟というのが本義の字です。これは、〝人としては当然なすべきことを人に求める〟ことなので、〝義務〟という意味にも使われます。音は𠦂（セキ）です。責任、責務、職責。

積は、〝責任として納入すべき稲（禾）〟という意味の字で、35頁の「租税」の本字です。「租」の項で説明したように、税として納入すべき米はもみのままで積まれますので、「つむ」という意味を表わしたのです。「つむ」ことを表わした「租」が「税」という意味を表わし、「税」という意味を表わした「積」が「つむ」という意味を表わしているのは、興味あることではありませんか。音は責（セキ）。積載、積雪。また〝積んだかさ〟をも意味します。容積、体積。また、「消極」に対して「積極」という使い方もあります。

績は、責（セキ）と糸との会意形声字で糸を〝つむぐ〟という意味を表わした字です。糸をつむぐ様は、実にせわしく責めはたっているようですので、「糸を責める」という字になりました。音は責（セキ）です。紡績。また、〝でき上った仕事〟〝できばえ〟の意味にも使われます。成績、功績。積と績とをよく混同する人があります。しかし部首の意味を土台に、しっかりと本義を理解すれば混同することはありませ

ん。

積は、石が積み重なってころがっている〝かわら〟（川原）のことです。音は責（セキ）です。

漬は、〝水責め〟という字で、〝水につける〟という意味を表わしました。沈漬（沈んで水に漬かる）。今は、多く「みそ漬」「かす漬」などの使い方をしています。

艮

艮は、古い字形が、目と人との会意字です。「見（）」と反対の形ですので、後ろをふりかえって見ている形です。〝ふりかえる〟のが本義で、〝立ち止まる〟という意味に使われます。音は見（ケン）の変化したコンです。

限は、崖（阝）に〝立ち止まる〟という意味の艮とで、それ以上進まない。つまり、〝ここまでとかぎる〟ことを表わした字です。「極限」「制限」「限界」というように使います。音は見（ケン）が濁ってゲンです。

根は、〝立ち止まる〟という意味の艮と木とで、木がしっかりと立っている〝もと〟である〝ね〟を表わしたものです。木は〝ね〟によってしっかりと立っていられるわけです。木の最も大切な部分というので、「根本」は、〝大切なもの〟ということを意味します。根気、根性。音は艮（コン）です。

眼は、根の意味の艮と目との会意形声字です。目は単に目という物体を表現した文字ですが、眼は、見るという働きを持った目の内部構造までを含めた意味の〝め〟です。だから、目に見えない部分を含むことを艮によって表わしたのです。「眼力」は、単に目でなく、見る働きとしての目の力という意味です。眼識、眼光、心眼。

恨は、心の中に根をはったように、いつまでも忘れられない深い〝うらみ〟のことです。よくいう「根（ね）に持つ」「根に思う」という〝うらみ〟方です。「憾」は、一時的な感情で、その場限りであとに引かない〝うらみ〟です。「怨」は、仕返しをしたく思う〝うらみ〟です。「懟」は、お互いに〝うらみ合っている〟うらみです。「慍」は、だれという特定の相手のない〝うらみ〟です。

痕は、疒と艮との会意形声字です。木は切ってもあとに根が残るように、病気がなおっても、あとに残る〝きず〟あとを「痕」と言うのです。今では、病気やきずに関係なく、〝あとに残ったもの〟を言います。「人の住んでいた痕跡もない」「墨痕（ボク）鮮やか」。

跟は、〝足の根〟という意味で、くびす（きびす＝かかと）を表わした字です。音は艮（コン）です。〝人のかかとに続く〟という意味で、〝随行〟の意味にも使います。跟随、跟従。

銀は、〝金に続く〟という意味で、金に続く価値を持つ金属を表わした字です。金はこがね（黄金）、銀はしろがね（白金）、銅はあかがね（赤金）、鉄はくろがね（黒金）と言います。

弋

弋は𣏌で、土地の境界線をはっきりさせるためにたてた〝木の杭〟の象形です。〝目じるし〟〝標識〟（しるし）という意味を持った部首です。音はヨク。

杙は、〝目じるしの木〟という意味の字で、〝くい〟のことです。棒杙。音は弋（ヨク）。

代は、〝かわりだというしるしを持った人〟という意味で、弋と人との会意字です。代理人は、代理人であることを証拠立てるしるしを持たなければ、信用できません。しるしは、代理人にとって重要なものですから、弋と人とで〝かわり〟の意味を表わしました。音は〝かわる〟意味の替（タイ）です。更代（更替）。「代表」は大勢の人の代りという意味。「代金」は、品物の代りという意味。「世代」は子が親に代るという意味です。「現代」「古代」「時代」の代は世の意味です。

貸は、〝次の世代へおくる財貨（貝）〟という意味の会意形声字で、「遺産」が本義の字です。つまり〝ただでゆずるお金〟ですから〝一時的にただでゆずる〟という意味に使われるようになりました。今は、専ら〝かす〟という意味に使われています。貸借（貸し借り）、賃貸（チン）。音は代（タイ）です。

黛は、〝まゆ毛をそって、代りにえがく黒いまゆずみ〟のことです。黒は「墨」（すみ）の意味です。墨は、粘土をまぜて固めますので、黒と土の会意字です。

袋は、〝着物（衣）の代りに、体をつつむ布〟というのが本義の字です。昔は、今のように裁縫道具が発達していませんでしたので、普段着などは、布をただ体に巻きつけるだけですませていたのです。この布が、〝衣の代用品〟という意味で、「袋」と呼ばれたのです。転じて、〝物を包む布〟さらに〝物を包む紙〟まで、袋と言うようになりました。「手袋」「足袋」（たび）などは、袋の本義に近い用法なのです。

式は、弋と工との会意字です。工は、Ｉで長さの単位を表わした指事字で、また、定規の象形字とも見られます。「工作」の意味の部首です。式は〝工作をする時の目じるし〟という意味で、〝ひな型〟

〝手本〟という意味を表わしたものです。「方式」「格式」は〝手本〟の意味を持つことばです。今では、一定の型によって行なわれるものすべてに使われています。入学式、礼式、公式、形式。音はシキです。

試は、〝式に従って言ってみる〟という意味の字です。〝ためしてみる〟〝こころみる〟ということです。試験。音は式（シキ）が短く発音されてシです。

尚

尚は、八（分ける、開く）と向（ショウ）との会意形声字です。向は、家の窓の象形で、尚は、〝窓をあけはなつ〟ことを表わした字です。〝日光や新鮮な空気が家にはいることを願う〟という意味で、〝希望する〟のが本義の字です。また音が上（ジョウ）と同じなので、〝うえ〟という意味、また転じて、〝尊ぶ〟意味にも使われます。尚武、尚古（古い物をたっとぶ）。

賞は、上（ジョウ）の意味の尚と貝とで、〝ほうびとして上の人からたまわる財貨〟という意味を表わした会意形声字です。今の〝賞与〟〝賞金〟にあたる字です。転じて〝ほめる〟という意味に使われます。音は尚（ショウ）です。賞賛、賞嘆、鑑賞。

償は、〝賞はその人の労苦に対する代価であり、つぐないである〟という意味で、賞と人とで、代価〝つぐない〟の意味を表わした字です。代償、弁償、償却。

裳は、上（ジョウ）の意味の尚と衣との会意形声字です。衣は今のブラウスで、それを着て、その上にはくのがスカートです。〝上にはく〟という意味で、スカートを表わしたのが裳です。衣と裳とで一組になりますので、衣類のことを「衣裳」と言うのです。古くわが国では、裳を〝も〟と呼びましたが、衣と裳と続いているワンピースの場合は〝すそ〟の意味に使いました。音は尚（ショウ）。

常は、布の意味の巾と尚との会意形声字で本義は、「裳」と同じ、スカートのことです。元来、スカートは、布を腰に巻きつけるだけで、簡単な衣類ですから、昔は婦人の普段着として〝つねに〟用いられたものです。それで、〝つね日ごろ〟の〝つね〟の意味が生まれ、裳と常と用法が違ってきたのです。〝いつも〟常時、常勝、常用、〝普通〟常識、平常。音は尚（ショウ）が濁ってジョウになりました。

掌は、手の上に物をのせる時に使う〝手のひら〟〝たなごころ〟のことです。手と、上の意味の尚（ショウ）とで表わした会意形声字です。「掌握」は、〝手のうちにある〟↓〝自分の物とする〟意味に使われま

す。〝手を使う〟ことから転じて〝仕事をする〟意味にも使います。分掌（分かれて仕事する）、職掌、車掌（車の仕事）。

堂は、上の意味の尚と土との会意形声字です。土を高く盛って、その上に建てた〝りっぱな建物〟という意味を表わした字です。尚の向は元来、建物の象形ですから、その方からも、盛り土の上の建物の意味に取れます。

寺院の本堂、講堂、殿堂、公会堂。また、〝りっぱな〟意味で「威風堂々」などとも使います。音は尚（ショウ）がなまってドウ。

瞠は、りっぱな建物に驚いて、〝目を見はる〟という意味の字です。瞠目、瞠若。音は堂（ドウ）です。

党は、人の意味の儿と尚との、会意形声字です。この字の本字は儻です。古書に、「五家を比、五比を閭、五閭を族、五族を党という」とありますので、かなり大きな聚落の称です。今は単に〝人の集まり〟〝仲間〟という意味に使われています。政党、徒党。

肖

肖は、肉体の意味の月と小（ショウ）との会意形声字です。親と子とは、肉体の大きさが違うだけで、顔形から話し方、癖までよく似ているものです。子は〝肉体が小さい〟だけで、あとは〝似ている〟という意味で、〝似る〟という意味を表わした字です。特に、子が親に似るという場合の〝にる〟に用います。だから「不肖」というのは、〝親に似ない愚かな者〟という意味の字です。肖像。音は小（ショウ）です。部首としては、ほとんど〝小さい〟の意味に使われます。

霄は、〝似る〟意味の肖と雨との会意形声字です。〝雨に似たもの〟雨まじりの雪、つまり、〝みぞれ〟のことです。音は肖（ショウ）です。

鞘は、〝似る〟意味の肖と革（なめし皮）との会意形声字です。〝刀のさや〟のことですが、刀身をぴったりとおさめるために、刀身によく似せて作るので肖と言うのです。古くはなめし皮で作りました。音は肖（ショウ）です。

消は、〝小さい〟意味の肖と水との会意形声字です。〝水が少なくなる〟という意味の字です。転じて、すべて物の減少する意味に使われ、今では〝きえる〟意味に多く使われます。消滅、消却、消

化。「消息」は、元来、消えることと生ずることの意味ですが、生滅、増減は物の変化することですから〝変化〟→〝様子〟の意味に使われます。「友人の消息を気づかう」。

硝は、〝水につけるととけて消える石〟という意味で名付けられた「硝石」のことです。初め、「消石」でしたが、これを一字につづめて「硝」としたものです。音は肖（ショウ）です。

梢は、〝木の小さい部分〟という意味で、〝木の先端〟〝こずえ〟（木末）を表わした字です。「本質的」でないことを「末梢的」と言います。音は肖（ショウ）です。

逍は、〝小道を歩く〟という意味の字です。「逍遥」という熟語で使われますが、遥は、ここでは、遠方まで行くという意味ではなく、近い範囲を行ったり来たりして長い距離を歩くという意味を表わしています。

宵は、〝家の中の人が皆似て見える〟という意味の字で、〝暗くなった〟ことを表わしています。訓は〝よい〟です。「夜」や「夕」が自然現象としての〝よる〟を表わしているのに対して、宵は、人間生活の感情が込められた〝よる〟のようです。熟語も「宵寝」「徹宵」など、そういうものに限られています。

韋

韋の𠦂は、𠂇で、止の反対の形です。（第3章足の項参照）。止は、𠃌で、足の裏の象形です。𠦂を下向きにしたのが𡈼です。つまり、𠦂と𡈼とは足の向きが反対で、韋は、〝ずれちがう〟が本義の字で違の本字です。部首としては〝ちがう〟〝反対〟という意味に使われます。音はイです。

違は、〝道を行く〟という意味の辶と韋との会意形声字で、〝行きちがう〟〝ずれちがう〟が本義の字です。今では、単に〝ちがう〟という意味に使われています。違反、違約、違算、違例。音は韋（イ）です。

偉は、〝ちがう〟という意味の韋と人とで、普通の人とはちがった人、つまり、〝えらい〟人という意味を表わした会意形声字です。偉人、偉大、偉業。音は韋（イ）。

緯は、〝行ったり来たりする〟意味の韋と糸との会意形声字で、はた（織機）を織る時〝行ったり来たりする糸〟つまり〝横糸〟のことです。たてに張られた「経」に対して「緯」が行ったり来たりして織られ、布になります。地球上の位置を示すのに、南北に両極を貫く線を引き、イギリスのグリニッチ天文台を通過する線を0度とし、三六〇度に分かって、これを経度と呼びます。この経度を示

す線が「経線」です。この経線に直交する線が「緯線」で、赤道を0度とし、両極まで九〇度に分かって、これを緯度と呼びます。地球上の位置は、この「経緯度」によってはっきりと示されるわけです。「経緯」は、〝縦糸と横糸〟という意味ですが、〝事の次第〟〝いきさつ〟という意味に使われます。

衛は、行と韋との会意形声字です。行の古い形は■で、道の象形です。道の象形により、〝歩行〟の意味を表わした指事字です。従って、衛は、〝道を行ったり来たりする〟のが本義の字で、つまり、英語のパトロールに当たります。これは、「警戒」することを意味していますので、〝まもる〟の訓があるのです。「警衛」は行ったり来たりして警戒することです。その任に当たる兵隊が「衛兵」です。音は、韋(イ)が強く発音されてエイとなりました。

葦は、〝韋(イ)〟と呼ばれる草で、韋と艹との単なる形声字です。和名は〝あし〟ですが、これは〝悪(あ)し〟に通ずるので〝よし（善し）〟とも呼ばれます。「葦(よし)のずいから天井のぞく」（いろはガルタ）。



奇

奇は、大と可との会意形声字です。〝大いによろしい〟ということで、〝珍しい〟という意味を表わしています。珍しいことは二つとはないので、〝一つ〟の意味にもなります。また、珍しいことは、〝不思議〟なことでもあり、変だなあと〝あやしむ〟ことにもなります。音は可(カ)の変化したキ。

珍しい……「珍奇」「奇計」
一つ……「奇数」
不思議……「奇術」「奇跡」
あやしむ……「奇怪」

崎は、〝珍しい山〟という意味の会意形声字です。音は奇(キ)です。普通の平地にある山形の山ではなく、海

の中に突き出たゴツゴツした岩 の多い珍しい形の山で、〝みさき〟のこと。〝崎〟の漢字は単独では使われず、「山崎」とか「長崎」とか使われるので、「さき」と読まれます。先(さき)の意味のことばです。

埼は、崎と同じ成立ちで〝珍しい土地〟つまり、変化に富んだ地形の土地の意味です。訓は崎と同じ「さき」です。

綺は、〝珍しい糸〟という意味の会意形声字で、音は奇(キ)です。〝あや模様のある絹糸〟のことを言います。「綺羅星の如く……」などと使われますが、羅は薄くすきとおった絹のことです。どちらも昔は貴重な物でした。「綺麗」は、綺のように美しいという意味の字です。わが国では、「きれいにすっかり忘れてしまった」などとも使います。

倚は、人は珍しい物に〝よりつく〟という意味で人と奇とで〝よりつく〟意味を表わしたものです。音は、奇(キ)。また、子音が取れてイとも発音します。この場合は、〝依〟と同音同義になります。倚託(依託)、倚頼(依頼)。

椅は、倚の意味の奇と木との会意形声字です。〝倚(よ)りかかるための木製の道具〟という意味の字です。「椅子」という言葉のために作られた字です。音は倚(イ)です。

寄は、〝家に身を倚(よ)せる〟という意味で、家の意味の宀と、倚の意味の奇との会意形声字です。音は倚(キ)です。寄宿、寄港(船が港による)。寄稿。また、〝与える〟意味にも使われます。寄贈、寄付、寄与。

亢

亢は、亠で、手を広げ足を大きくふんばり、通せんぼをしている形を象ったもの。抗の本字で〝ふせぐ〟〝こばむ〟〝さからう〟が本義の字です。転じて〝たかぶる〟の意になりました。亢奮、亢進(たかまり進む)。音は高(コウ)です。

抗は、〝こばむ〟という意味の亢と手との会意形声字で、音は亢(コウ)です。〝手をあげてふせぎこばむ〟という意味です。抵抗、反抗、抗議、抗戦。

忼は、〝たかぶる〟意味の亢と心との会意形声字で、〝心がたかぶる〟という意味の字です。悲憤忼慨。

航は、〝抵抗〟の意味の亢と舟との会意形声字で〝川の流れにさからって舟を進める〟という意味

の字。〝舟を目的地に向けて進める〟のが本義ですが、今では飛行機の場合にも使います。

「航海」→「航空」。「航路」→「航空路」。

坑は、「亢進」や「航行」の意味の亢と土との会意形声字です。土地にあなを掘り進めることは大変に抵抗の多い仕事ですが、その困難にさからって、掘り進めた〝あな〟が「坑」です。〝地中に掘りあけた深いあな〟のことを言います。今では石炭や鉱石を採掘するための〝あな〟を言います。炭坑、金坑、坑内、坑道。

杭は、高の意味の亢と木との会意形声字で、〝高く突き出た木〟つまり、〝棒くい〟のことです。

喿

喿は、品と木との会意字です。〝木の上にたくさんの鳥がいて、口をそろえてさえずっている〟ことを表わした字で、〝噪〟（さわがしい）の本字です。音は騒（ソウ）の意味でソウです。

噪は、口と喿（ソウ）との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。〝さわぐ〟〝さわがしい〟という意味の字です。喧噪（やかましい）、蛙鳴蟬噪（アメイゼン）（蛙も蟬（せみ）も共に鳴き声がうるさいものです。役にも立たぬだけでうるさい文章や言論を軽蔑して言う時に使うことばです）。

譟は、言と喿との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。〝大勢の人が集まってがやがやさわぐ〟ことを言います。狂譟（狂ったようにさわぐ）。

躁は、足と喿との会意形声字です。〝わいわい言いながらさわがしく歩き回る〟ことを表わした字です。若い人たちの間にはやりのダンスなどは正にこの躁に当たります。狂躁（狂ったように騒ぎおどり回る）。

澡は、水と喿との会意形声字です。躁が若者のダンスなら、澡は奥様の井戸端会議です。昔は川端で奥様たちがペチャヘチャ世間話をしながら洗濯をしたものですが、その様を〝澡〟と言ったのです。〝あらう〟が本義です。澡洗。「澡室」は風呂場のことです。

藻は、喿と水と草の会意形声字です。〝絶えず水の中でゆらゆらと動いている草〟という意味がすぐ推察できるでしょう。〝水草〟である〝も〟のことです。海藻。転じて、〝詩文の美しい表現〟→〝美しい文章や詩〟のことを言います。文藻、詞藻。

繰は、糸と喿との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。糸を繭からとる時は、糸車ががらがらと勢いよく音

を立てて回るのでやかましいものです。そこで〝糸をとる〟ことを、繰で表わしたものです。このことを〝糸をくる〟と言うのは、糸を合わせるため、次から次へと新しい繭の糸口を拾って〝くりこむ〟ためです。訓は「くる」と読みます。「繰越金（くりこし）」「繰上げ」など、多くは訓読みとして使われます。

操は、手と桑との会意形声字で、〝手をせわしく動かす〟という意味の字です。それは〝手を巧みに使う〟ということですから、〝あやつる〟ことになります。操作、体操。また、手仕事の意味から、〝おこない〟の意味で「操行」などの使い方が生まれ、また「節操」「貞操」などの使い方が生まれました。

懆は、心と桑との会意形声字です。意味は言わなくてもお分かりでしょう。〝心がそわそわして落ちつきのない〟ことです。

令

令は、亼（シュウ）とPとの会意字です。亼は、集の本字で〝ひと所に集まる〟という意味を表わした指事字です。Pは〝しるし〟という意味の部首です。天子が諸侯を召集して、授ける〝書きつけ〟が令です。〝天子の授ける辞令〟が本義です。音はレイです。転じて、〝役所から出る書きつけ〟の意味になりました。令状、政令、法令。また〝りっぱ〟〝よい〟という意味に使われます。令名、令色。また敬称に使われます。令嬢、令夫人。

命は、口と令との会意形声字。〝口で直接に伝える令〟という意味です。音は令（レイ）の変化したメイです。今では、命も令も、文書、口答に関係なく使われます。命令。〝いのち〟（生命）という意味は、それが天の命令（天命）であって人力ではどうすることもできないものである、という考え方によるものです。つまり、早死にするのも天命、長生きできるのも天命、〝いのち〟は天命である、というので、命が〝いのち〟になったのです。

冷は、冫（凍の本字、こおり）と令との会意形声字で、音は令（レイ）です。君主の命令は〝つめたく厳しい〟ので、冫（こおり）の冷たいのと合わせて〝つめたい〟という意味を表わしました。冷凍、寒冷、冷蔵庫。

零は、冷たい意味の令と雨とで〝冷たく感ずる雨〟という意味を表わした会意形声字です。ぽたりと落ちる〝しずく〟はえり首などに当たると、ひやっと感じます。〝しずく〟が本義で、それは小さい水滴ですから、〝細かい〟〝小さい〟という意味にも使われます。零細企業、零点。また〝雨がふ

る〟こと。

鈴は、〝よい〟という意味の令と金との会意形声字で、よい音を立てる金属製の〝すず〟を表わした字です。音は令(レイ)ですが、令の中国音はリンで、鈴の音色を表わしています。風鈴(フウリン)、銀鈴(ギンレイ)、呼び鈴(リン)。

玲は、〝よい〟という意味の令と玉との会意形声字で、〝玉が美しい音をたてる〟という意味と、〝玉が美しい〟という意味とあります。音は令(レイ)です。「玲玲」は中国音では「リンリン」で、玉の触れあって生ずる美しい音色を表わしたものです。「玲瓏(ロウ)」は宝玉の美しいことを表わしたことばです。

怜は、〝心がよく働く〟という意味の心と令との会意形声字です。音は令レイ。〝賢い〟〝さとい〟ということです。怜悧レイリ。齢は、〝年〟の意味を表わす歯と令との会意形声字です。音は令レイ。令は、命と同じ意味ですから、〝いのち〟つまり〝年とし〟の意味をもっています。歯は「年ネン 歯シ」（わが国では。としはも行かぬ〟などと訓読みします）という熟語が示すように〝とし〟の意味に使われています。年齢、老齢、妙齢、適齢。

寮

寮は、古い形が[illegible]で、木と火と日の会意字です。〝焚(た)き火を焚いて、昼間のように明るくする〟という意味の字です。「燎」の本字です。音はリョウ。

燎は、火と寮との会意形声字です。〝火を赤々と燃やす〟という意味の字です。

「燎原の火」とは、野原を焼く火が見る見る広がって〝勢いのすさまじい〟ことですが、それを物事のたちまちに広まること、勢いの強いことのたとえに使われます。

寮は、宀と寮との会意形声字で、音は寮(リョウ)です。〝建物（宀）の中で、昼間のように火を焚く〟ことで、〝役所〟を表わしています。昔は、電燈がありませんでしたので、役所では夜、焚き火を焚いて仕事をしました。わが国でも、昔は役所の名前に「〇〇寮」という名が付けられていましたが、今では、学生の宿舎のことに使われています。学生寮、寮歌。

僚は、役所の意味の寮と人との会意形声字で〝役所の人〟という意味の字です。今でも「官僚」などの用法があります。「同僚」は、同じ役所の仲間という意味の字です。

瞭は、〝明るい〟という意味の寮と目との会意形声字で、〝目がはっきりとよく見える〟〝物事が

よくわかる〟という意味の字です。明瞭。一目瞭然（ちょっと見ただけではっきりとわかる）。

療は、〝明るい〟意味の寮と疒との会意形声字です。病気の原因を明瞭にして、その原因を取り除くことで、〝病気をなおす〟という意味を表わしています。治療、療養。

化

化は、人と匕との会意形声字です。匕には二つの形があります。一つは匕（匕）であり、一つは匕（カ）です。化の匕は匕で、人の倒れた形を表わしたもので、〝死ぬ〟意味の部首です。だから、化は、〝人が死ぬ〟という意味の字です。死は大変化ですから、〝かわる〟意味に使われ、死んで〝ばける〟という意味にも使われます。化合、消化。

化は変より大きい〝かわり方〟であることに注意して下さい。音はヒ（カ）です。

花は、変化の意味の化と草との会意形声字です。言わば〝草のお化け〟です。音は化（カ）。

靴は、革（なめし皮）と化との会意形声字です。〝革が化けて〟くつになったというわけです。音は化（カ）です。

訛は、〝人を化かす言葉〟という意味の会意形声字で、〝人をだます〟のが本義です。今は〝正しくない言葉〟ということから〝なまり〟という意味に多く使われています。音は化（カ）です。

囮は、囲んで捉える意味の口と化との会意形声字です。〝だまして捉える〟のに使う〝おとり〟のことです。生きている鳥を使って野鳥を油断させ、だまして捉えますが、その時に使う鳥を〝おとり〟と言うのです。音は化（カ）です。

貨は、お金を意味する貝と化との会意形声字です。〝お金に化けるもの〟という意味で〝値うちのある品物〟というのが本義です。財貨、貨物。転じて〝お金そのもの〟の意味にも使われます。金貨、硬貨、貨幣。音は化（カ）です。

商

商は、啇の変形で、〝ただ一つ〟という意味の字です。帝（皇帝）はただ一人しかいないからです。部首としては、同音の的（まと）の意味にも使われます。音は帝（テイ）がつまってテキになりました。

滴は、〝ただ一つの水〟という意味の字で〝しずく〟のことです。音の商（テキ）は、水滴のしたたる音を

も表わしています。

嫡は、〝ただ一人の女〟という意味の字で〝本妻〟のことを言います。「嫡子」は、家を継ぐべき〝ただ一人の子〟つまり正妻の長子のことです。「嫡流（チャクリュウ）」は〝本家すじ〟という意味です。音は商（テキ）、またはなまってチャク。

摘は、的の意味の商と扌との会意形声字です。目標とするものを手に入れるという意味の字で、取ろうとねらったものを正しくつまみとることです。摘出、摘発（隠された悪い事を見つけ出す）、摘要（多くの事がらの中から重要な点を抜き出すこと）。音は商（テキ）。

適は、的の意味の商と辶との会意形声字で目標に向かって進むという意味の字です。〝行く〟という意味と、〝目的地に行き着く〟という意味とあります。目的を果たすことから転じて、〝うまくいく〟という意味になります。適中（的中）、適当、適材適所、適者生存。音は商（テキ）。

敵は、的の意味の商と攵との会意形声字です。目標とする相手に向かって武器を取るという意味の字で〝目指す相手〟〝戦いの相手〟を表わした字です。自分と対等に戦える〝良い柏手〟の意味に使います。好敵手、天下無敵、衆寡敵せず。音は商（テキ）です。



翟

翟は、隹（鳥）と羽との会意字で、〝羽の美しい鳥〟が本義の字です。きじ（雉）の名に用いられるのは、きじの尾が長くて、羽の模様が美しいからです。部首としては、〝きらきらと美しく輝く〟〝羽をぱたぱたさせる〟という意味に用いられています。音はタク、またはテキ。羽ばたきの音を表わしたものです。

濯は、水洗いして、衣類を美しくすることを表わした氵と翟の会意形声字です。音は翟（タク）です。洗濯。

擢は、きじの羽の中から、とりわけ美しい羽を選び抜き取るという意味の字で、手と翟との会意形声字です。音は翟（テキ）。〝ぬきだす〟抜擢。

躍は、羽をぱたぱたさせる意味の翟と、足との会意形声字で

す。鳥の飛び立つように、〝足をおどらせる〟ことです。〝とびあがる〟音は翟（タク）が変化してヤクになりました。跳躍、飛躍、勇躍、躍進、躍動。

趯は、躍と同じ意味の字です。〝おどる〟こと。音は翟（テキ）。

曜は、美しい意味の翟と日との会意形声字で〝日の光がきらきらと美しく輝く〟という意味の字です。〝かがやく〟日の光の意味に使われます。今では、日曜、月曜などというように使われますが、この曜は、〝空に輝く天体〟という意味で、太陽、月、火星、水星……土星を指しています。音は翟（ヤク）が変化してヨウ。

燿は、火が赤々と燃えることで、〝火がかがやく〟という意味です。音は翟（ヨウ）（曜）。栄耀栄華。

耀は、きらきらと〝光り輝く〟という意味の字です。音は翟（ヨウ）。

己

己は、𠬜で、曲がりくねった糸の象形です。糸の先端を表わしているところから、〝はじめ〟という意味を表わした指事字で、「紀」の本字です。今は、「自己」というように使われていますが、これは仮借です。音はキ、またはコ。

紀は、己が〝おのれ〟の意味に使われるようにたったため、〝糸の先端〟を表わす字として、己に糸を加えて作られた会意形声字です。音は己（キ）です。〝はじめ〟が本義ですが、記（しるす）の意味にも使われます。紀元、紀行。

記は、糸すじの意味の己と言との会意形声字です。〝言葉を糸のように長く続ける〟という意味の字で、言葉を整理し、順序立てて〝書きしるす〟ことです。記録、記憶。記念は〝心にしるす〟意味のことばです。

忌は、〝おのれ〟の意味の己と心との会意形声字です。〝おれがおれがという心はいむべきである〟という意味の字で、〝いむ〟ことを表わしました。

〝心からきらう〟〝避ける〟という意味に使います。忌避、嫌忌。

起は、はじめの意味の己と走との会意形声字です。〝走ることのはじめ〟は〝立ち上がること〟であるという考えで、〝立つ〟または〝おきる〟という意味を表わしたものです。音は己（キ）です。起立、起床。また、已の本義の〝始める〟という意味にも使います。起工、起算、起原。

辟

辟は、𠂤（ヘキ）と口との形声字。口は丸い玉の象形で、璧の本字。辟は〝丸い玉〟が本義です。また、𠂤の意味にも使われます。辛は、■で、受刑者に施す黥（いれずみ）をするのに使う針の象形です。転じて〝つらい〟意味に使われる字です。辛苦。■は、人（尸）に黥を施すという意味の字で、〝罰する〟ことを表わした会意字です。

璧は、丸い玉のことです。辟が〝罰〟の意味に使われるために、玉を加えてこの字を作ったものです。双璧（ソウヘキ）（二人のすぐれた人物のたとえ）、完璧（カンペキ）（完全無欠）。

避は、罰の意味の辟と辶との会意形声字です。罰からはだれも遠ざかりたいというのが人情なので、〝さける〟という意味になります。音は辟（ヘキ）が変化したヒです。避難、避暑、逃避。

僻は、〝罰を受けた人〟という意味の辟と人との会意形声字です。こういう人は、とかくひがんだり、片寄った見方をしますので、〝ひがむ〟〝かたよる〟という意味を表わしました。音は辟（ヘキ）です。僻見、僻地。

壁は、避の意味の辟と土との会意形声字です。風や寒さを避けるために設けた土の障壁、つまり〝かべ〟のことです。音は辟（ヘキ）。壁画、城壁、絶壁。

癖は、僻の意味の辟と疒との会意形声字です。〝片寄った病気〟という意味で、好みなどの片寄りを言うようになりました。〝くせ〟。酒癖（シュヘキ）、盗癖（トウヘキ）、潔癖（ケッペキ）。

譬は、避の意味の辟と言との会意形声字です。物事を直接に言うことを避けて、類似の例によって説明すること。〝たとえ〟。譬喩（ヒユ）（引き比べて言うので、比喩とも書く）。

臂は、辟と肉との形声字で、〝ひじ〟のことです。婦人がいやな男を避けるために〝臂鉄砲〟を使うのは、漢字の構造から見ても誠によく適っています。

闢は、門の両扉が互に避け合うように〝ひらく〟ことを表わした字で、辟と門との会意形声字です。門の扉を左右に〝おし開く〟のが本義です。天地開闢（カイビャク）（宇宙の初め）などと使われます。音は辟（ヘキ）、呉音はヒャク。

劈は、〝刀で切り開く〟という意味の会意形声字です。つんざくこと。闢と同じように、〝はじめ〟の意味にも使われます。劈頭（ヘキトウ）（一番初め）。

霹は、雷鳴の〝つんざく〟ような音を言います。雷の意味の雨と、闢の意味の辟との会意形声字で

す。「青天の霹靂」（青空の雷鳴は突然の変事を譬えたもの）というように使われます。

周

周は、用と口との会意字です。用は、甫で、牧場に張りめぐらした柵の象形で、〝はりめぐらす〟のが本義の字だということは、「甫」の所でお話しました。

周は、〝口をめぐらす〟ということで、〝言葉を十分に尽して説明する〟のが本義の字です。転じて、広く〝物事のゆきとどく〟意味に使われます。用意周到。また、単に用の本義〝めぐる〟の意味にも使われます。周期、周囲、周遊、円周。音はシュウ。

週は、周と辶との会意形声字で、〝まわりをまわる〟のが本義の字です。今では、もっぱら七曜の一まわりする意味に使われています。週間、週刊誌、毎週。

稠は、ゆきとどく意味の周と禾との会意形声字で、〝稲の豊かにみのる〟ことを表わした字です。音は周（シュウ）がなまってチュウ。転じて広く〝物事の多い〟意味に使われます。人口稠密。

調は、ゆきとどく意味の周と言との会意形声字です。音は周（チュウ）が変化してチョウ。言葉がよくゆき届いて、そのため物事が〝よくととのう〟という意味の字です。調和、調節。

彫は、〝かざり〟〝美しい〟という意味の部首の彡と周との会意形声字です。音は調（チョウ）。玉を削り磨いてよく調えることを「琱」と言います。仕上がってこれに〝かざり〟をつけるのが彫です。今は「彫刻」など、〝ほる〟〝きざむ〟という意味に使われます。

凋は、あまねく行きわたる意味の周と氷の意味の冫との会意形声字です。音は周（チョウ）。寒さがあまねくいきわたり、どこも氷でとざされる頃になると、草木は〝しぼみ〟ます。凋落（草木の葉がしぼみ落ちること、転じて人の落ちぶれること）。

蜩は、鳴き声のよくいきわたる〝せみ〟のことです。

白

白は、㊀。親指の象形で、〝親指〟が本義の字。〝しろい〟は仮借とされています。しかし、太陽の象形による指事字とも見ることができます。太陽光線は〝しろ〟ですので、親指の白とは別に作られたことも考えられます。白日、白光。音はハク。

百は、一と白との会意形声字。昔は、〝親指一本〟で〝ひゃく〟の数を表わしたことによります。「百」は〝一白〟（一百）という字です。音は白（ハク）がなまってヒャク。

伯は、親指の意味の白（ハク）と人との会意形声字で、〝大人〟という意味の字。兄弟の順序を「伯・仲・叔・季」で表わしますが、伯は一番年上の兄の称です。「伯仲」は、長兄と次兄の意味で、両者の差が少ないところから、優劣のつけがたい意味に使われています。

舶は、〝大船〟という意味の会意形声字です。音は白（ハク）。海洋を航行する汽船のことです。「舶来」は、外国から汽船で運んで来るという意味の言葉です。

帛は、〝白い布〟という意味の会意形声字ですが、〝白い厚手の絹〟で、礼物として贈答用に用いられたものです。幣帛。昔、紙のない時代、竹簡と共にこの帛が紙の代りに用いられましたので、記録文書を「竹帛」と言いました。「功名を竹帛に垂る」とは、名を歴史に留めるという意味です。

粕は、酒を醸造して、清酒をとったあとに残る〝白い米〟つまり〝酒かす〟のことです。白（ハク）と米との会意形声字です。

泊は、海水が〝白く見える所〟という意味の字で、海の浅い所を表わした字です。「碇泊」は、浅い所で碇（いかり）を下して〝とまる〟こと。転じて、〝宿にとまる〟意味にも使われるようになりました。宿泊。

拍は、パンという音を表わす白と扌との形声字で、〝手を打つ〟という意味を表わしています。拍手。

半

半は、㸚で、〝物〟という意味の牛（うし）と八（はち）（分かつという意味の部首）との会意形声字です。〝物（牛と勿（ブツ）との形声字）を真二つに分ける〟という意味で、〝半分〟のことです。

判は、〝刂（かたな）で切って半分にする〟という意味の会意形声字です。音は半（ハン）。昔、証書の類は、二つに切って、その一つをそれぞれが保管し、二つがぴたりと合うのを証拠としました。〝真偽を判別する〟という意味の〝わかつ〟ことです。裁判、批判。転じて〝わり印〟の意味から〝印章〟のことを判と呼ぶようになりました。

伴は、英語の〝ベターハーフ〟の〝ハーフ〟に当たります。〝二人一組の半分〟という意味で、半と

人とでてきた形声字です。〝つれ〟〝とも〟と読みます。同伴、随伴、伴奏。

袢は、〝上半分だけの衣〟という意味の字で、上半身に着るシャツまたはブラウスのことです。半と衣との会意形声字です。汗を吸って漏れる意味の襦と合わせると、「襦袢（じゅばん）」になります。

畔は、〝田を分ける〟境界の〝あぜ〟が本義です。田と半との会意形声字です。転じて〝さかい〟の意味に用いられます。「湖畔」は、湖と陸地とのさかいの意味で、〝ほとり〟です。

拌は、異なった物を手で半分に分かち、それぞれ半分になったものを〝まぜ合わせる〟という意味です。交（こう）（混じる）の意味の攪（こう）と合わせた「攪拌（こうはん）」という言葉があります。普通「かくはん」と読まれています。

宛

宛は、人が膝を曲げた形𠔃を表わす𠂤と肉と家の会意形声字です。〝人が膝を曲げてやっと食べていられるだけの家〟という意味の字で、〝小さな家〟が本義です。〝自宅〟の意味に使います。転じて〝あて〟という使い方を生じました。部首としては、〝𠂤〟の〝屈曲〟の意味に多く使われます。

蜿は、屈曲の意味の宛（エン）と虫との会意形声字で、〝蛇のように屈曲する〟という意味の字です。蜿蜒長蛇の列。

豌は、屈曲した蔓になる豆、つまり、豌豆（えんどう）です。宛と豆との会意形声字。

婉は、婦人のしなやかに屈曲する様を表わした字です。「婉然（ぜん）」は婦人のしなやかで美しい様子。「婉曲（きょく）」は、直接に物事を言わずに遠まわしに言う意味の言葉です。

怨は、人の仕打ちに対して、腹を立てながらも、直接に怒りを表わすことができないで、遠まわしに〝うらみごと〟を言って、心にわだかまりを持つことです。宛の意味の㔾（エン）と心との会意形声字です。怨恨。

鴛は、婉然たる鳥という意味で〝おしどり〟を言います。おしどりは常に仲良くつがいで泳いでいますので、〝仲の良い夫婦〟のたとえに用いられます。「鴛鴦（おしどり）」。鴛は雄、鴦は雌を指しています。

苑は、草花の美しく咲き乱れたところという意味の、草と㔾（エン）との会意形声字です。〝はなぞの〟です。動物を飼う〝その〟は、囲いが有るので囿（ユウ）と言います。苑囿。「園」は、苑と囿とを兼ねた意味の字です。



毎

毎は、母で、屮（艸＝艹）と母との会意形声字です。母なる大地の恵みを受けて〝草が生いしげる〟という意味の字です。転じて物事の〝重なる〟または〝重ねる〟意味に使われます。音は母（ボ）が変化してパイ。呉音はマイです。「毎日」は、〝日を重ねる〟という意味の言葉です。

梅は、毎と木の形声字で、〝ばい〟という名の木のことです。わが国の〝うめ〟のことですが、この〝うめ〟は、梅の呉音〝マイ〟をそのように受け取ったものです。「ン」を「ウン」と発音するように、mei が ume となったものです。

誨は、〝重ねる〟意味の毎と言との会意形声字で、音は毎（バイ）が変化してカイ。言葉を重ねて、〝ねんごろに教える〟という意味の字です。教誨、誨告。

晦は、草の茂る意味の毎と日との会意形声字で、音は毎（カイ）です。日が草に隠れて〝くらい〟という意味の字です。晦冥（メイ）。転じて、〝月の見えない暗夜〟また〝つごもり〟。晦日（ジツ）（みそか）。

海は、晦冥の意味の毎と水との会意形声字です。〝海は深くて暗い〟ので「溟」とも言います。「南溟」は「南海」と同義です。

悔は、晦冥の意味の毎と心との会意形声字です。ああ残念なことをしたと、うらめしく思って、〝心がくらい〟という意味の字です。〝くやむ〟こと。悔悔、悔悟。

音

音の古い形は𠙵で否（ひ）と同じ形です。音は ㄧㄣ（ヒ、またはハイ）。〝反対〟〝そむく〟という意味で、「背」とは同音同義です。背の音は ㄅㄟˋ（ヒ、またはハイ）で、「違背」「背反」などと使われます。

倍は、〝そむく〟意味の音（ハイ）と人との会意形声字で、〝人にそむく〟という意味の字です。倍反（そむく）。対立が生ずることは、一が二になることで、〝一が二にふえる〟ことを倍というようになりました。XYという対立が生ずると、X′X′対Y′Y′、X′X′X′対Y′Y′Y′というように増加します。これが「倍

増（ゾウ）」です。

剖は、倍の意味の音と刀との会意形声字で、音は音（バイ）の変化したボウ。数が二倍、三倍となるように〝切り分ける〟ことです。解剖（生物の体を細かく切り分ける）。

培は、倍加（ふやす）の意味の音と土との会意形声字で、〝草木に肥えた土を加えてやって、草木を育てる〟ことです。〝つちかう〟こと。栽培。培養。

陪は、二倍の意味の音と阝との会意形声字で、〝二つ並んだ崖や山〟のことを言います。転じて、その小さい方が大きい方に〝つき従う〟という意味で陪と言うようになりました。陪従、陪席、陪食。

賠は、二倍の意味の音と貝との会意形声字で、お金（貝）を二倍にして〝つぐなう〟という意味の字です。相手に損害を与えた場合、そのつぐないとして、二倍に相当する金額を支払うのが普通です。これが「賠償」です。

第3章　漢字を構成するもの

部首の名前と役目

漢字のほとんどが二つ以上の文字の組み合わせによってできている、ということをお話しました。この場合、その組み合わせ方にいろいろありますので、それについてひと通りお話しておきたいと思います。



左と右とに分けることができる場合、左の部分を**扁**（へん）と言います。扁は、普通、その字が何に関係があるかを表わしています。

亻（人扁（にんべん））人の意味……仕・休・作

王（玉扁（たまへん））玉の意味……球・珠・理

阝（小里扁（こさとへん））崖の意味……防・防・院

ネ（示扁）神の意味……神・社・礼
ネ（衣扁）衣類の意味……初・複・補
忄（立心扁）心の意味……性・情・快
貝（貝扁）お金の意味……財・貯・購
金（金扁）金属の意味……銀・銅・鉄
月（月扁）月の意味……朧・朓・朏
月（肉月）肉体の意味……腹・腸・脳
禾（ノ木扁）稲の意味……稲・秋・種
犭（獣扁）獣類の意味……狩・犯・狂
巾（巾扁）布の意味……帆・帽・幅
彳（行人扁）道の意味……行・役・後
氵（三水）水の意味……海・湖・波

同じ月でも、月の意味の時は〝月扁〟と呼びますが、肉体のしるしの時は〝肉月〟と呼びます。これは、もと肉だったのが、省略されて、月になったものです。このほか、月には、舟が省略されて月になったものもあります。これは、〝舟月〟ということになります。朕、前、朝の月がこれです。

ネとネとは、大変よく似た扁ですので、注意しましょう。意味の上では大変な違いがあります。

• 阝は〝つくり〟に用いられる「大里」と同じ形なので、〝小里扁〟と呼ばれますが、意味は全く違いますので注意して下さい。崖という意味の部首なので、〝崖扁〟と呼んだ方が良いのですが、昔から、〝小里扁〟と呼ばれています。

なお、• 彳は〝道扁〟• 氵は〝水扁〟• 忄は〝心扁〟• 巾は〝布扁〟と改めた方がわかりやすいと私は思っています。

つくり

右の部分は**旁**と呼ばれています。言葉としての性格的、基本的な意味と発音とを表わすことの多い、重要な部首です。第一章で解説された「奐・且・青・主……」というような部首がこれです。しかし、左にあげる部首は、その字が何に関係あるかを表わす部首で、これらの部首が旁に使われる字は、逆に扁が言葉としての性格的基本的意味や発音を表わします。

頁（大貝）頭の意味……頭・顔・額
阝（大里）邑の意味……都・郡・郷
彡（三旁）飾の意味……形・彫・杉
隹（旧鳥）鳥の意味……雄・雑・難
刂（立刀）カの意味……判・別・創
力（力）努力する意味……勤・動・励
欠（欠）口を開く意味……歌・飲・吹
殳（ル又）武器を持つ意味……殺・役・殴
攵（ノ文）鞭を持つ意味……政・教・牧

- 頁は、貝に似た字形なので、〝大貝〟という名前がありますが、意味は全く貝に関係がありません。鼻（自）を中心にした顔、または頭の意味の部首です。
- 阝は、扁の所で話しましたように、〝小里扁〟と全く同じ形ですが、旁では〝大里〟の名の通り〝町〟という名の部首です。邑→阝の簡略化した形です。
- 隹は、鳥という今の字形に対して、古い字形という意味で〝ふる鳥〟と言います。
- 欠は、人で、〝あくび〟が本義の字ですから〝あくび〟という名が付けられました。
- 欠と攵は、字形がよく似ていますが、意味が全く違いますので注意しましょう。



上と下とに分けることができる場合、上の部分は**冠**と言います。また、**頭**と呼ぶものもあります。扁と同じく、その字が何に関係あるかを表わすことが多い部首です。

宀（ウ冠）家の意味……家・安・客
穴（穴 冠）穴の意味……空・究・窓
艹（草 冠）草の意味……草・花・英
竹（竹 冠）竹の意味……筆・管・等
雨（雨 冠）気象の意味……雲・電・震
癶（発頭）両足をそろえた形……発・登・癸
耂（老頭）老人の意味……老・考・孝



下の部分は**脚**（あし）と言います。**沓**（くつ）と呼ぶこともあります。次に挙げる脚は、その字が何に関係あるかを表わす部首です。

儿（人脚）人の意味……兄・光・先
皿（皿）容器の意味……盛・益・盟
灬（連火）火の意味……照・熱・然
小（下心）心の意味……恭・慕
氷（下水）水の意味……泰・求

連火は、火の変形で、点が連なっているので、〝連火〟と呼んだものです。〝四っ点〟と呼ぶこともあります。小は心の変形、氷は水の変形です。下心・下水の下は脚の意味です。



上から下に垂れ下がった形のものを、**垂**（たれ）と言います。扁と冠とを合わせたような形をしていて、その働きも、扁や冠に似ています。その字が何に関係あるかを表わす部首です。

厂（雁垂）崖の意味……原・厚・圧
广（麻垂）広い家の意味……店・庭・府
疒（病垂）病気の意味……病・疲・痛
戸（戸垂）戸の意味……肩・戻・扇
尸（屍）人の意味……居・屈・抵



扁と脚を合わせたように、左下の部分にわたるものを**遶**（にょう）と言います。その働きは垂と全く同じで、その字が何に関係あるかを表わしています。

辶（進遶）道を行く意味……進・送・近
廴（延遶）遠く行く意味……延・建・廷
走（走遶）走る意味……起・越・趣

辶と廴は、旁を書いてから、これを書きますが、走は先に書いて、旁をあとがら書きます。



外側を囲むような形を**構**（かまえ）と言います。「冂」や「匚」のように三方を囲んだ形、「勹」や「弋」のような垂に似た形のものもあります。働きは、その字が何に関係あるかを表わしています。

口（国構）物を囲む意味……国・団・図
匚（箱構）箱の意味……医・区・匿
門（門構）門の意味……問・聞・関
气（気構）蒸気の意味……気・氛
行（行構）道の意味……衛・術・街
戈（戈構）武具の意味……我・戒・或
弋（式構）標識の意味……式・弐
勹（包構）包む意味……包・匂・匁

仮借と転注

昔から、漢字の構成については、「六書」ということが言われています。第一章には、四つの方法があると言って、「象形」「指事」「会意」「形声」についてお話しました。六書というのは、この四つに、「仮借」と「転注」を加えたものです。

象形と指事が基礎になり、会意と形声で、すべての漢字ができ上がったのですが、漢字の使い方の上で、仮借と転注という二つの方法があって、本義とは異なった使い方が行なわれているのです。

仮借とは、仮に借りるという意味の言葉です。その漢字の意味とは無関係に、発音だけを借りて表わす方法のことです。たとえば、「拾」は〝ひろう〟という意味の字ですが、数字の十と同じ発音なので、数字として「拾円」と使うのが仮借です。この方法は、中国では、仏教が伝来した時にたくさん行なわれました。インドの言葉を、漢字の持つ意味に関係なく、表音的に使ったのです。たとえば「南無」という言葉がこれです。今でも、アメリカを「亜米利加」、ドイツを「独逸」、コーヒーを「珈琲」と書くのは仮借です。

転注とは、車が転々ところがって、元の位置から離れていくように、また、川の水が流れ流れて山から遂には海に注ぐように、漢字の本義が転々と変化することを言います。たとえば、「楽」という漢字は、で、楽器の象形です。〝楽器〟が本義ですが、同時に、楽器で演奏される〝音楽〟という意味にも使われます。ところが、音楽を聞けば、〝たのしい〟気持になるというので、この楽という漢字で、この気持を表わすことになりました。このように、〝楽器〟→〝音楽〟→〝快楽〟というように、漢字の意味が転々と変化するのが転注です。



このように、漢字は、文字としては、象形、指事、会意、形声のいずれかで、でき上がっているのですが、実際の用法としては、転注や仮借により本義とは異なった意味で使われている場合がかなりあるのです。

漢字の音訓

漢字には、音と訓とあるのが普通です。音とは、漢字が日本に取り入れられた時の中国読みのことであり、訓とは、その漢字にあたるわが国の言葉のことです。

たとえば、「花」という漢字は、中国では「カ」と読むので、「カ」が音です。「造花」「花瓶」という使い方がこれです。ところが、この字は、わが国では「はな」という言葉にあたりますので、「花」を「はな」と読む読み方が生まれました。これが訓です。「花見」「草花」という使い方がこれです。

中国は、広さから言えばヨーロッパ全体に匹敵する広さがありますから、同じ漢字でも、その地域によって随分違った発音をします。また長い年代にわたって日本に入って来ましたので、一つの漢字

にいくつもの音がある漢字があります。また、漢字によっては、わが国のいくつかの言葉にあたるものもありますので、一つの漢字でいくつもの訓を持った漢字もあります。

たとえば、「下」という漢字は、「地下（チカ）」「下水（ゲスイ）」「下町（したまち）」「川下（かわしも）」「下る（くだる）」「下げる（さげる）」「下（もと）」など二つの音と五つの訓とを持っています。

「チカ」という音は、**漢音**と言います。これは、わが国が、中国と正式に国交を結ぶようになって、唐の国都長安の標準的な発音を取り入れたものです。漢字の標準音という意味で「漢音」と呼んだものです。聖徳太子の時代から、平安朝初期にかけてでき上がりました。

「下水（ゲスイ）」という音は、**呉音**と言います。中国と正式な国交を結ぶ以前、仏教などの経典と共に取り入れた音で、仏教に関係ある言葉やその他特別の使い方が多く、漢音に比べると、数は少ししかありません。揚子江の下流地方を「呉」と呼びますが、この地方の発音なので、「呉音」という名称があります。

ずっと後になって中国の「明」「清」時代の発音で読まれるものも、極めて僅かですが、あります。これを**唐音**と呼びます。これは、中国人のことを、「唐人」と呼んでいたためかと思われます。「実行（ジッコウ）」「行進（コウシン）」は漢音、「行列（ギョウレツ）」「奉行（ブギョウ）」は呉音、「行宮（アングウ）」「行燈（アンドン）」は唐音です。

これは、同じ album が、英語ではアルバム、独語ではアルブム、仏語ではアルボムと発音されるようなものです。それよりも広大な中国のことですから、発音が複雑になるのは止むを得ないことです。

重箱読みと湯桶読み

多くの漢字は、二つ以上組み合わせられ、熟語として使われます。この場合、上を音読みすれば下も音読み、上を訓読みすれば下も訓読みするのが普通です。しかし、「重箱（ジュウばこ）」のように、古くからの習慣で、上を音読みして下を訓読みするものや、「湯桶（ゆトウ）」のように、上を訓読みして下を音読みするものもあります。前者のような読み方を、俗に、「重箱読み」、後者のような読み方を「湯桶読み」と言っております。

（重箱読みの例）カタカナは音、ひらがなは訓。
役場（ヤクば）・中古（チュウぶる）・肉屋（ニクや）・台所（ダイどころ）・雑木（ゾウき）・本場（ホンば）

（湯桶読みの例）
見本（みホン）・場所（ばショ）・組曲（くみキョク）・月別（つきベツ）・身分（みブン）・古本（ふるホン）

なお、次の例は、音読みと訓読みと二通りの読み方のある熟語です。
上下（ジョウゲ・うえした）・父母（フボ・ちちはは）・水車（スイシャ・みずぐるま）・草木（ソウボク・くさき）・年月（ネンゲツ・としつき）・山道（サンドウ・やまみち）
音色（オンショク・ねいろ）・昼間（チュウカン・ひるま）・春風（シュンプウ・はるかぜ）・雨水（ウスイ・あまみず）・白雲（ハクウン・しらくも）・荒野（コウヤ・あれの）

ただし、次の熟語は、音読みと訓読みとでは意味にやや違いがありますので、注意する必要があります。
小刀（ショウトウ・こがたな）・根元（コンゲン・ねもと）・市場（シジョウ・いちば）・頭数（トウスウ・あたまかず）・勝負（ショウブ・かちまけ）

また、音読みに二通りある熟語もあります。
兄弟（ケイテイ・キョウダイ）・金色（キンいろ・コンジキ）・白衣（ハクイ・ビャクエ）・強力（キョウリョク・ゴウリキ）・明星（メイセイ・ミョウジョウ）

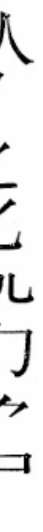
右の音は漢音で、左の音は呉音です。呉音は歴史が古くて長いので、特定の意味、使い方をするものが多いようです。これらは、漢字に関係なく、言葉として使用されている、という感じの特に強いものです。

以上で、漢字の見方、考え方について、おおよそおわかり頂けたと思います。そこで、今度は、部首を一つ一つ系統的に調べていくことにします。これから示す部首を全部理解して覚えておくならば、初めて見る漢字でも、きっと、何とか解くことができると思います。そのつもりで、一つ一つ、じっくりと字形を観察し、その意味内容を考えて頂きたいと思います。

部　首

人体に関する部首

おもな八つの部首をあげてみました。部首としてみれば、これが人体を表わしているのか、と思う



ような形のものもありますが、ちょっと手を加えてみますと、りっぱに人間の形を表わしたものであることがよくわかると思います。

人は、独立しても用いられる部首ですが、他の部首は独立して用いられることはありません。

从は、「従（旧字体は從）」の最も古い形です。今の中国では、この最も古い形を採用しています。人が前を行く人に〝したがう〟意味を表わした会意字です。後に彳がついたものです。辵は、辶の古い形です。日本通運という会社では通という古い形を使っています。

众は、衆の古い形で、中国の新字でもあります。これが変形して从となりました。〝人三人〟で、「大衆」という意味を表わした会意字です。血は、最初は皿で目でした。

仁は、〝人二人〟という意味の字です。人が人に対して抱く〝人情〟（ヒューマニティー）を表わした字です。孔子は、これを人間道徳の最高のものとしました。音は人（ジン）です。

亻は、人偏（ニンベン）と呼ばれて、最もありふれた形で、どなたも御存知の部首です。

位は、〝人の立つところ〟という意味の字です。位置、地位、官位。

依は、〝衣類が人体にまといつく〟ことから、〝よりつく〟意味を表わした会意形声字です。音は衣（イ）。

使は、〝官吏は人のために働く〟ものであるから、〝人のために働く〟ことを表わした会意形声字です。音は吏（リ）の本来の音で史（シ）。

匕は、匙（ヒ、またはハイ）という音を持っています。なまってシと読まれるものもあります。

比は、〝人がならぶ〟が本義ですが、二人並べば、すぐ比較が始まるところから〝くらべる〟という使い方が起こりました。「比翼」は並べる、「比較」はくらべる。

北は、人が背中合わせした形で、〝そむく〟が本義です。背中を人に見せることは、負けて逃げることですから、〝負ける〟という意味が生まれました。「敗北」の北がこれです。人は太陽の方角に向かいたがります。すると、背中は〝きた〟を向きます。そこで、〝きた〟の方角を表わす字になりました。（転注）そのため、本義の〝そむく〟を表わす字として、北に肉をつけて「背」という字を作っ

たのです。音はヒ（ㇶ）です。

匕は、第Ⅰ章の「化」の所でお話したように、〝死ぬ〟意味の部首で、音はカです。今では「匕」も「匕」も同じ字形になります。

元は、二（上の古い字体）と儿との会意字です。〝人の上の部分〟という意味で、〝あたま〟が本義です。「元首」は「頭首」と同じ意味の言葉です。一年の初頭を「元日」と言うのです。

児の旧は臼（⿱）で、頭の形です。体に比較して頭の大きい人、つまり〝子ども〟を表わした字です。幼児、児童。

克の古は𠦂で、かぶとの形です。人が甲冑を着けて戦闘に〝よく耐え抜く〟という意味の字です。単に〝勝つ〟というだけの意味ではなくて、〝苦難に耐えてやり抜く〟ことです。克服、克己。

充の亢は、育の略形です。人を育てて〝体格をりっぱにする〟ことです。充実。亢は𠫓で、子を逆さにした形です。育は、子供に肉を与えて、〝そだてる〟という意味の字です。

包は、己（⿰）を〝だきかかえる〟のが本義の字です。今は、〝つつむ〟という意味に使われていて、そのため、本義を表わすのには、𠂤を加えて「抱」という字を作りました。

胞は、〝腹の中の子供〟という意味の字です。胞子（音は包）。

泡は、〝空気を包んだ水〟という意味の字です。「あわ」のことです。

尸は、腰かけて、体を伸ばしている形を表わしたものです。〝人〟〝体を伸ばす〟〝腰〟などの意味に使われます。音はシです。

居は、尸に発音を表わす古を付けた形声字です。居士。コは呉音、漢音はキョです。

展は、尸に発音を表わす𠂤を付けた形声字です。尸の〝体を伸ばし広げる〟が本義で、今では、体に関係なく、〝広げる〟意味に使われています。展開、展覧会。

尾は、〝尻の毛〟という意味の字です。

屎は、〝尻から兔る米〟つまり〝くそ〟ということになります。

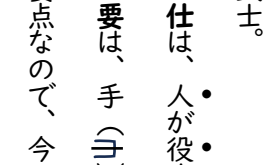
尿は、〝尻から出る水〟つまり〝にょう〟ということです。

屈は、〝腰をかがめて出る〟という意味の字です。昔は、家の出口は小さく作られていましたので、腰をかがめないと出ることができなかったのです。屈折、屈曲。

屋は、人の至り止まる所、という意味で〝いえ〟を表わした字です。家屋、屋室。

室という字も、同じ意味で作られた字です。

人体を基にした指事字



大は、手足を〝おおきく〟広げた形で、〝おおきい〟という意味を表わしています。

夫は、人の頭に冠を加えて、〝成人〟の意味を表わした字です。昔は、成人式に初めて冠をかぶったからです。丈夫、夫婦。

立は、大の下に大地を加えて、〝たつ〟ことを表わした字です。

並は、竝の略字で、人が二人〝ならんで〟立っていることを表わした会意字です。

天は、大の頭のてっぺんに一を加えて、〝頭の顚（いただき）〟を表わした指事字です。顚と天とは同音同義の字ですが、天は、転じて、頭の上に広がる空の意味に用いられるようになり、天の本義は顚が表わすようになりました。

士は、端然と坐っている人の形で、〝成人〟または〝役人〟であることを表わしています。紳士、武士。

仕は、人が役人として〝つかえる〟ことを表わした会意形声字です。仕官。

要は、手（⺕）を腰にあてている形で、〝こし〟という意味を表わした指事字です。腰は、人体の要点なので、今の「重要」という用法が生まれました。

腰は、要が「重要」の意味に用いられるようになったため肉を加えて〝こし〟の意味を表わしたものです。

母は、女に乳房を表わすしるしを加えて作られた指事字です。

身は、妊婦を横から見た形で、「娠」の本字です。今は「体」（身体）の意味に使われるようになったために、娠が作られました。娠は**妊**の意味です。

顔に関する部首



口 目 耳 鼻
面 頁 首 県

古は、十と口の会意字で、〝十代にわたって口から口へと伝えられた〟ことを表わした字です。〝ふるい〟〝むかし〟という意味に使われます。古色。古人。

否は、〝違う（不）と言う〟〝いなむ〟ことを表わした不と口の会意形声字。音は不（フ）が変化して、ヒ。否認、可否。

咲は、口と关（ショウ）の会意形声字。〝口を開いてわらう〟のが本義。「花咲」は花が笑っているのが本義で、わが国では、これを「花咲く」と読んだために、〝さく〟の訓が生まれました。

看は、手（手の変形）と目の会意字で、〝目の上に手をかざしてみる〟ことです。「見」が目の働きとしての〝みる〟ことを表わすのに対して、「看」は、見ようという意志を以て〝みる〟ことを表わしています。従って、「見」は、「見える」という使い方はできますが、「看」は「看える」という使い方はできません。また、〝面倒をみる〟意味に使います。看護。

相は、〝木の上にのぼって見る〟という意味の字です。広く、遠くまで見ようとしてみることで、見よりも深い意味を持っています。〝さぐる〟こと。人の容貌をさぐることを「観相」と言います。政治をみることから、〝君主を補佐する〟意味にも用いられるようになりました。首相。

盲は、〝目の力を亡（うしな）う〟という意味の字で、めくらを表わした会意字です。音は亡。

取は、〝耳を取る〟という意味の会意字です。中国では、敵をたおした場合、重い首の代りに耳を取って証拠としました。音は手（シュ）。

聞は、〝門に口を寄せてと（問）う〟のに対して、〝耳を門に寄せてきく〟こと。音は門（モン）、漢音はブン。

聳は、物音のする方向に〝耳を従わせる〟という意味の会意形声字で、音は従（ジュウ）。〝耳をそばだてる〟ことから転じて、〝山のそばだつ〟意味に用いられます。

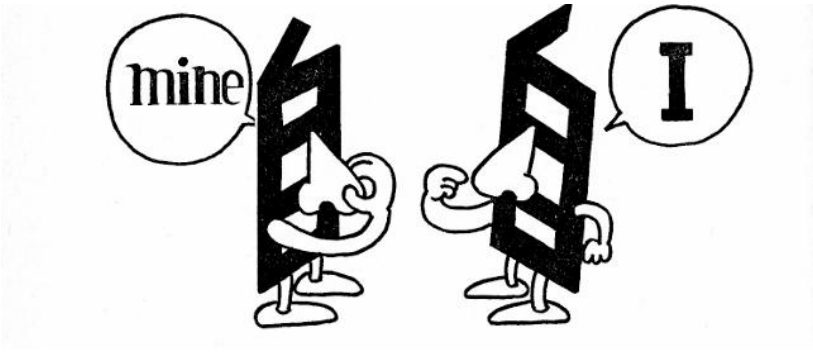
自は、鼻の象形で、〝はな〟が本義ですが、自分を指さす時に、鼻をさしますので、〝わたくし〟の用法が生まれました。「自分」というのは、〝私の分け前〟〝私のもの〟（英語の mine にあたる）

という意味の言葉です。

ついでに言いますと、「私」は、〝ムの禾(いね)〟という意味の字で、「自分」に当たる言葉です。「ム(ム)」は乙で鼻の象形で、自(ジ)と同音同義の字です。「公」は、「私を分(八)割する」意味の字です。

臭(旧字は**臭**)は、〝犬の鼻〟で、〝におい〟または〝かぐ〟意味を表わしたものです。

鼻は自が私の意味に転用されたために、畀(畀)を加えて作った形声字です。



面は、自の周囲に、顔の輪郭を加えて、〝かお〟の意味を表わした字です。「洗面」転じて、「表面」「地面」など〝おもて〟(顔を表わす古語ですが、今では表)の意味に使われます。

頁は、首(八)から上〝あたま〟を表わす部首です。旁(つくり)としてよく用いられます。昔から「大貝」の名で呼ばれますが、「顔旁(かおづくり)」と呼びたいものです。

顔は、顔が本字です。文(あや)と彡(かざり)と厂(がん)との会意形声字である彦(美しいが本義の字。男子の美称としてよく用いられます)と頁との合字。音は彦(ゲン)です。

頭は、豆粒のようにまるいという意味の豆と頁との会意形声字です。音は豆(トウ)です。

頂は、丁と頁、との会意形声字で、〝頭のいただき〟が本義です。目上の人から物を受け取る時は、頭の頂(いただき)の高さにまで手を上げますので「頂戴する」(いただく)と言うのです。「山頂」(山の頂)は転用です。

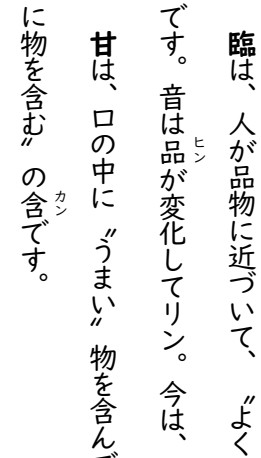
順は、低きについて決して高きには向かわない川と頁(あたま)との会意字です。〝頭を下げてすなおに従う〟ことです。音は川(セン)が変化した巛(ジュン)(巡馴)です。

項は、後の意味のエと頁(あたま)との会意形声字で、〝後頭部〟が本義の字です。急所ですから〝大切な所〟の意味に使われます。「項目」は、書物の大切な所の意味で、全体を小わけする場合、最初の大まかな方を「項」、それをさらに小わけしたものを「目」と言います。

首は、頁（あたま）の上に髪の毛を加えた字です。〝あたま〟が本義です。元首、頭首。戦場で、敵の首（あたま）を取る場合、切り落とす所が頸（くび）ですので、首が頸の意味になりました。

県は、首を逆さにした形です。〝さらし首〟の象形です。木にかけられるので、〝かける〟という意味を表わしたものです。県の旧字体は「縣」です。系は、首をかけてつるための糸を表わしています。秦の始皇帝の時、縣を行政上の区画の名称にしましたので、〝かける〟という意味の字は、〝心にかける〟という意味の「懸」で表わしています。「懸念」は、ケと短かく発音されます。〝心にかける〟〝気がかり〟という意味です。

懸命は、〝命いのちがけ〟という意味の言葉です。一つのことに命がけになるのが「一所懸命」です。今では、なまって、「一生懸命」という言葉になっていますが、これでは意味が通じません。



臣は、目を大きく見開いて、〝見張る〟意味を表わした字です。臣下たる者の任務を表わしたものです。

監は、𥫱で、人が皿に水を盛り、これを水鏡にして〝みる〟のが本義の字です。詳しくは第2章の監を御覧ください。

臨は、人が品物に近づいて、〝よく品定めをする〟のが本義の字です。人と臣と品との会意形声字です。音は品（ヒン）が変化してリン。今は、〝その場に出向く〟意味に使います。臨席。

甘は、口の中に〝うまい〟物を含んでいることを表わした指事字です。〝あまい〟こと。音は、〝口に物を含む〟の含（カン）です。

柑は、〝甘い実のなる木〟という意味の会意形声字です。〝みかん〟のことですが、昔は、単に〝かん〟、または〝柑子（こうじ）〟と言いました。

疳は、甘い物を食べすぎて起こると考えられていた小児病〝かん〟のことです。癇と同じ病気のことにも使われます。

旨は、匕と甘の会意形声字で、人が甘い物を口にして〝うまい〟ということを表わした字です。音は匕がなまってシになりました。

指は、扌と旨との会意形声字で、〝うまい物をちょいとつまむ〟ゆびを表わしました。音は旨（シ）です。

脂は、〝旨い肉〟という意味の字で、旨と肉の会意形声字です。〝あぶらぎった肉〟の意味から転

じて〝あぶら〟の意味になりました。「油」が液状の〝あぶら〟であるのに対して、固型状のあぶらを言います。油脂、脂肪。

齦は、歯の根という意味の字で、〝はぐき〟のことです。音は根（コン）です。また銀（ギン）とも発音されます。歯齦炎。

齟は、重なる意味の且と歯との会意形声字で、歯が重なるという意味の字です。〝八重歯〟のこと。転じて、〝物事のうまくかみあわぬこと〟〝食い違うこと〟の意味に使われます。齟齬（計画に齟齬をきたす）。

舌は、口から〝した〟を出した形を表わした字です。音はゼツですが、テンとも発音されます。

甜は、舌と甘との会意字で、〝舌に甘く感ずる〟という意味の字です。音は舌（テン）。甜菜（てんさい）、甜瓜（てんか）（スイートメロン）。

舐は、舌と氏との形声字で、音は氏（シ）。〝舌でなめる〟ことです。

言は、口と辛（ケン）との形声字で、〝ものいう〟意味の字です。〝言葉〟の部首です。

計は、数の意味の十と言との会意字。〝数をかぞえる〟こと。計数、計算。転じて、計画、計略。

訓は、順の意味の川と言との会意字。〝順うべき言葉〟という意味の字です。教訓、家訓、訓話。

詠は、〝言葉を永くのばしてうたう〟ことで、言と永の会意形声字。詠歌、朗詠。

詐は、作の意味の乍と言との会意形声字で、〝作り言（ごと）〟という意味の字。実際にない事を作りあげて人をあざむくこと。詐欺、詐取。音は作（サ）。

評は、〝公平に言う〟という意味の、平と言との会意形声字。他人の良し悪しを、私情をさしはさまずに言うのが「批評」です。音は平（ヒョウ）という呉音です。漢音は平（ヘイ）。

誠は、〝成功する言葉〟という意味の成と言との会意形声字。虚偽の言葉は一時的には成功するかに見えても、決していつまでも続くものではない。〝真心から出る言葉〟こそ、成功に導く言葉である、という意味からできた字です。

誉は、與（与の旧字体）と言との会意形声字で、〝言葉を与える〟という意味の字。人の善美なる行為に対して贈る〝ほめ言葉〟のことです。毀誉褒貶（きよほうへん）、名誉。音は与（ヨ）。

訟は、役所の意味の公（おおやけ）と言との会意形声字で、〝官公庁にうったえる〟ことです。音は公（コウ）が変化して公（ショウ）（松、頌）。訴訟。

警は、慎しむ意味の敬と言との会意形声字で、〝慎しみなさいと注意の言葉を与える〟ことです。警告、警戒。音は敬（ケイ）。

記は、糸の象形の己（𠄌）と言との会意形声字。言葉を糸のように長く続けて書きとめることです。記述、記録。

語は、〝吾（われ）が人に言う〟という意味の字で、〝かたる〟こと。また〝かたる言葉〟。言語、語調。

調は、用意周到の周（よく行き届くこと）と言の会意形声字で、〝よく行き届いた言葉〟が本義です。〝ととのう〟こと。今は、ととのえるために〝調（しら）べる〟という意味に使うことが多いようです。調査。また、〝音楽の調（しら）べ〟とも使います。調子。

誕は、〝事実を引きのばし、誇張した言葉〟という意味の字で、延と言との会意字。虚誕、欺誕。実際にないことを作り出すことから「生む」意味になりました。誕生。

詞は、役人の意味の司と言との会意字で〝役人の言葉〟という意味の字です。〝りっぱな言葉〟という意味に使われます。祝詞。

誇は、夸（カ）と言との形声字で、〝大言〟という意味の字。事実より大げさに言うことです。誇張、誇大。

証は、その事が正しいという〝あかし〟を言いたてることです。音は正（ショウ）。証言、証人、証明、保証。

誌は、志（心の動き）を言葉にして書きとめることです。音は志（シ）。日誌、雑誌。

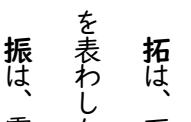
認は、心から〝みとめて〟よろしいと言うことです。音は刃（ジン）。認可、承認（ニン）。

誘は、秀言（秀れている言葉）で〝人の気を引く〟ことです。〝さそう〟こと。音は秀（シュウ）が変化してユウ。勧誘、誘惑。

詳は、善美の意味の羊と言との会意形声字で、〝くわしくてよくわかる言葉〟という意味の字です。音は羊（ヨウ）が変化してショウ。詳細、詳述。

談は、淡の意味の炎と言との会意形声字で、〝淡々と語る〟という意味の字です。音は淡（タン）。清談、閑談、談話。〝激せず、固くない話〟のことです。

手に関する部首



手に関する部首は、古い字形を見ると、皆、ほとんど同じ形をしています。それが、次第に変化してきて、今見るような、それぞれに違った形をするようになりました。

手は、独立して用いられる〝手〟そのものを表わした象形字です。音は取（シュ）です。部首としては、「挙・掣・撃」など、脚に用いられます。

扌は、扁です。

打は、釘の象形であり、釘の本字である丁（ちょう）と扌との会意形声字で、〝釘をうつ〟のが本義です。音は丁（チョウ）。普通は唐音ダ。打開。

拡は、〝手でおし広げる〟という意味の字で、扌と広との会意形声字です。音は広（コウ）が変化してカク。拡大、拡張。

抄は、多くの中から、〝少数を抜き取る〟という意味の字で、少と扌との会意形声字。〝抜き書き〟のこと。抄本、抄録。

拓は、石器（昔の農具）の意味の石と扌との会意字で、〝農具を手にして〟農地を〝ひらく〟ことを表わした字です。音は、石（セキ）（シャク）が変化したタク。開拓、干拓。

振は、震の意味の辰と扌との会意形声字で、〝手を震わせる〟こと。振動。

捉は、〝逃げる人の足をつかまえる〟という意味で〝とらえる〟ことを表わした字です。音は足（ソク）。捕捉。

双は、二つの手の並んだ形で、〝ふたつ〟〝ならぶ〟〝対（つい）〟などの意味を持った字です。双生児、強力無双、一双。

友は、で、二人の手の重ねられた形。〝助け合う〟〝とも〟などの意味を表わしています。音は又（ユウ）です。友情、友愛。

反は、厂（かん）と又との会意形声字です。厂は崖の象形で、〝ひっくり返りやすい〟所です。反は、〝手

のひらをかえす〟ことです。

収は、𠃌（きゅう）と又との形声字で、〝手に入れる〟こと。音は𠃌が変化してシュウ。収入。旧字は收で〝罪人をとらえて責める〟のが本義。

右は、食事の時、食べ物を口に運ぶ手という意味の字です。たすける（佑）という意味にも使われます。音は又（ユウ）、呉音はウ。

左は、定規（工）を持つ手という意味の字です。やはり、たすける（佐）という意味があります。中国では、右を上位としているので「左遷（させん）」は、官位を下げられるという意味を表わします。「右顧左眄（うこさべん）」は、左を見、右を見ることで、迷って人の様子をうかがい、〝ためらう〟という意味です。

右の原形は、で、左の原形はです。これが筆順にも影響して、「ノ一口」「一ノ工」となっています。

雪は、手の上に載る雨という意味の字です。雨は手に載りませんが、〝ゆき〟なら手に載ります。

筆は、竹と聿との会意形声字です。聿は（ふで）の象形に（て）を加えた形で、筆を手に持つ意味の字です。〝ふで〟と〝書く〟との本字です。後に〝ふで〟は柄が竹ですので、竹が加えられて〝筆〟になり、〝かく〟には〝日〟が加えられました。

建は、廴と聿（ふで）との会意字で、〝筆を動かし進める〟つまり〝計画をたてる〟ことを表わした字です。音は廴（エン）が変化してケン。「建立（コンリュウ）」は呉音で読まれ、寺院をたてる意味に使われます。

律は、〝建てられた法文を行わせる〟という意味の字で、彳と聿との会意字です。音は聿（イツ）が変化してリツ。〝法を守らない者を罰するきまり〟という意味に使われています。律令、法律。

受はで、上から渡す手と、下からこれを受け取る手との会意字です。音は手（シュ）です。（現代中国語では、受と手とは同音です）

授は、受が〝うける〟ことを表わしているので、これに扌を加

えて〝さずける〟ことを表わした会意形声字です。音は手（シュ）です。つまり「手」「受」「授」は、言葉としては一つなのですが、用法を明確にするために、三つに書き分けたのです。

• 爭は、爭が旧字体です。爭は、𠂤（て）に亅（かぎ）を持った形です。それを奪い取ろうと手をかけた形が「爭」です。〝あらそう〟こと。音は爪（ソウ）です。



臼は、左右の手の象形です。

申は、𠃌で、棒を両手で〝引きのばす〟意味を表わした字です。〝のびる〟ことから転じて〝のべる（述）〟意味に使われ、今では、専ら〝もうす〟意味に使われています。上申、申告、申請、内申。

伸は、申が〝もうす〟意味に転用されたため、本義の〝のばす〟意味を表わすために作られた字です。人と申との会意形声字。伸縮。

共は𠬜で、二つの手が一つの物を一緒に差し上げている形です。〝一緒〟という意味の字です。共同、共通。音は六（キョウ）です。

供は、〝一緒に仕事をする人〟という意味で、〝手助け〟〝おとも〟という意味を表わした字です。

• 人と共（きょう）との会意形声字。呉音はク。「供出（きょうしゅつ）」「供養（くよう）」は、共の本義である〝ささげる〟という意味で使われています。

兵は、斤と六との会意字で、〝武器（斤）を手にする人〟という意味の字です。雑兵。

具は、貝の意味の目と六との会意字で、両手に溢れるほど財貨のあること、つまり、物の豊かに〝そなわる〟という意味を表わした字です。具備。転じて、〝うつわ（道具）〟の意味にも使われます。音は六（ク）。

算は、竹と具の会意字で、〝かずとりの竹〟が本義の字です。数取りの〝算具〟です。数をかぞえるのに使うので〝かぞえる（計算）〟の意味になりました。

戒は、武器の意味の戈と廾との会意字で、〝手に手に武器を取って、敵の攻撃に備える〟という意味の字です。〝いましめる〟こと。警戒、破戒。

興は、𦥑と同の会意形声字です。〝四つの手が共同して、一つの仕事にあたること〟を表わした字

で、そうすれば必ず盛んになるので、〝おこる〟という意味を表わしました。音は六（キョウ）が変化してコウ。興隆、興亡。

與は、与の旧字体です。𦥑が〝共にする〟という意味を表わしています。〝力を合わせる〟ことだから、〝くみする〟、また〝あたえる〟意味にもなります。与党（よとう）、給与（きゅうよ）。

擧は、挙の旧字体で、与と手との会意形声字です、〝共に手をあげる〟という意味の字で、構造的には、興や與とほとんど同じで、同じ意味に使われています。音はキョウがつまってキョ。挙国一致、選挙。

功は、仕事の意味のエ（コウ）と努力の意味の力との会意形声字。〝努力して仕事をする〟のが本義で、〝てがら〟の意味に使われます。

動は、重い物でも力を加えれば〝うごく〟という意味の字です。音は重（チョウ）がなまってドウ。

勉は、免と力との会意形声字。免は、娩の本字です。㒸は𠂤と𠙵（お尻の象形）の合字。人のお尻（㒸）にさらに人を加えて〝子を生む〟意味を表わしたのが免です。勉は〝分娩の時に力む〟のが本義です。免は単独の時は、呉音でメンと読むのが普通です。勉強、勤勉。

努は、奴隷（どれい）のように〝つとめる〟という意味の字です。〝休みなくがんばる〟ことです。音は奴（ド）。努力。



攵は、手に棒や鞭などを持った形を表わした字で、〝鞭、棒、武器などを揮（ふる）う〟という意味の部首です。音はボク。

牧は、牛に対して鞭を揮う意味の字で、〝牛を飼う〟ことを表わしています。音は攵（ボク）。

教は、子供に対して鞭を揮う意味の字です。音は孝（コウ）がなまってキョウです。

政は、世の不正を打ちこらしめて、正しきに導くという意味の字です。音は正（セイ）。

敗は、〝貝を打ちこわす〟という意味の字で、〝やぶれる〟ことを表わしています。音は貝（ハイ）です。

故は、古びた物を打ちこわすという意味の字ですが、〝古い〟という使い方と〝こわす〟という使い方と分かれています。音は古（コ）。故郷、故事。故障、事故。

救は、人の求めに応じて武器を揮い、〝人をすくう〟ことです。音は求（キュウ）。

改は、悪を犯した自己に自ら鞭を加えて再びしまいと、心を〝あらためる〟ことです。音は己（カイ）。

放は、鞭を揮って、四方へ、つまり外へ〝追いはらう〟ことです。音は方（ホウ）です。

支は、沢山（十）の物を一手に〝まとめる〟意味と、その反対に、一つの手から沢山〝分かれ出る〟意味とあります。前者は〝ささえる〟こと。支点、支柱。後者は〝分かれる〟こと。支店、支流。

枝は、一つの幹から沢山分かれ出る〝えだ〟のことです。音は支（シ）。

肢は、体から分かれ出た〝手足〟のことです。音は支（シ）。

翅は、鳥の手足にあたる〝つばさ〟のことです。音は支（シ）。

殳は、手に武器を持った形です。几は手裏剣のような、投げつける武器の象形だと見られています。音は手（シュ）です。

投は、〝手裏剣をなげる〟のが本義で、今では、広く〝なげる〟意味に使われます。

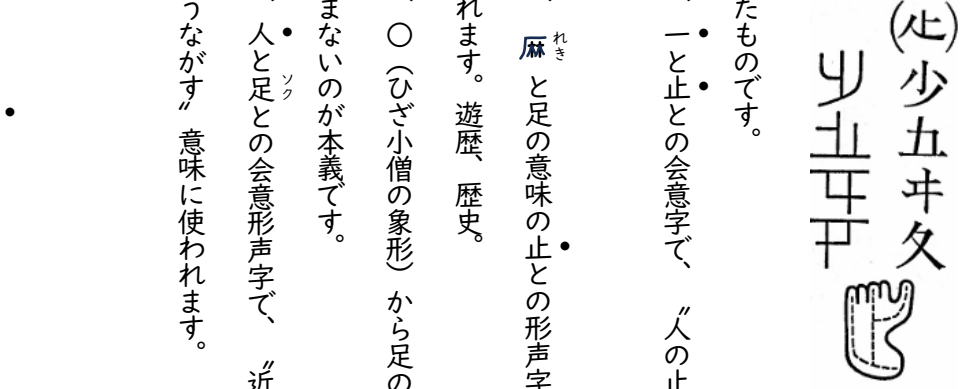
殴は、区と殳との形声字で、〝投げつける〟のが本義の字ですが、今は、〝手でなぐる〟意味に使われています。音は区（ク）が変化したオウ。殴打。

殺は、豕（いのしし）（㊀サイ・シ）の変形した𠂒と殳の会意形声字で、〝家畜を打ちころす〟のが本義の字です。今では、広く〝ころす〟意味に使います。音は豕、またはサツ。

殿は、展（てん）と殳との会意形声字で、〝お尻を打つ〟のが本義の字です。「臀」（しり）の本字です。軍隊が退却する時、一番後ろになることを「殿」（しんがり）と言います。今では「殿堂」など、高大な建物の意味に使われています。音は展（テン）です。

役は、〝武器を持って行く〟いう意味の字で、〝戦争〟または〝いくさ仕事〟の意味に使われています。戦役、兵役。昔から兵役は若い男子の義務として〝勤めなければならない仕事〟でした。大役、役人。音は漢音がエキ、呉音がヤク。

足に関する部首



上に挙げる五つの部首は、皆、足の裏の象形です。

止は、右足の裏を象ったもので、ここが地面にぴったりと着いて〝立ちどまる〟というので、〝とどまる〟意味を表わしたものです。

正は、一と止との会意字で、〝人の止まるべき線〟を表わしています。〝守るべき基準〟のことです。

歴は、麻（れき）と足の意味の止との形声字で、〝足のあゆみ〟が本義です。転じて〝時の歩み〟の意味に使われます。遊歴、歴史。

足は、〇（ひざ小僧の象形）から足の裏（止）までの部分を言います。〝あし〟ですが、ひざから上は含まないのが本義です。

促は、人と足との会意形声字で、〝近づく〟〝迫（せま）る〟という意味の字です。「催促」「督促」「促進」など〝うながす〟意味に使われます。

歩は、右足の止と、左足の少の変形した少との会意字で、〝あるく〟ことを表わしています。

走は、〝はしる〟形を表わした土（大）と止との会意字です。土だけでは〝つち〟と同じ字形なので、区別するために、足の部首を加えたものです。

癶は𤴔で、左右の両足をそろえて立つ形です。これから前進することを意味しています。前へ足を踏み出せば「発」となり、上へ足を踏み出せば「登」となります。

発の音は八（ハツ）で、八には、〝開く〟意味があります。開発、発展。旧字は發で〝弓を発射する〟のが本義です。

登の音は豆（トウ）ですが、「登山」「登城」の場合はトと発音します。

舛は𣐈で、両足を左右にやや開いてそろえた形です。舞いをまう時の基本の足の型です。部首としては「舞脚（まいあし）」と呼ばれていますが、正に意味もその通りです。

舞は、無（ぶ）と舛との形声字です。

無は、**舞**（ぶ）と灬（燃える火）との形声字。物が焼けて〝なくなる〟という意味の字です。

夆は、舛が左右なのに対して、上下に足が並んだ形です。また、歩と反対に、下向きの形ですので、〝下る〟意味を表わしています。

降は、崖の意味の阝と夆との会意字ですので、〝崖を下る〟のが本義です。今は、広く〝下る〟の意味に用いられ、〝雨の下る〟こと、つまり〝ふる〟意味にも使われます。音は夆（コウ）。降雨、降雪。

各は、足を下向きにして〝下る〟意味を表わす夂と口との形声字です。発音、本義共に夆（コウ）と同じですが、今は、カクと発音され、〝おのおの〟という意味に使われています。

落は、〝草の葉が下降する〟という意味で、艹と各との会意字です。音は各（カク）が変化して洛（ラク）になりました。落葉、落選。

絡は、〝下に落ちた糸がからまる〟という意味の字です。音は落（ラク）です。手から落ちてもつながってはいますので、〝続く〟〝つなぐ〟意味にもなります。連絡。

路は、下降の意味の各と足との会意形声字で、〝下り坂のみち〟のことです。「坂路」が本義に適った用法です。音は各（ラク）が口に変わりました。

踏は、鞜（くつ）の意味の沓と足との会意形声字で、〝靴をトントンとふみ鳴らす〟ことです。音は沓（トウ）。舞踏、雑踏（人混み）。

距は、巨大の意味の巨と足との会意形声字で、〝大足で歩けばたちまちにへだたる〟という意味で、〝へだたる〟ことを表わした字です。音は巨（キョ）。距離。

踊・躍・躁・踰・践は、第2章にあります。

趣は、〝物を取ろうと、急ぎ走る〟という意味の字で、取（しゅ）と走との会意形声字です。〝おもむく〟こと。転じて、〝味わい〟〝様子〟という意味の〝おもむき〟。趣味。

赴は、〝卜（うらない）の結果を知らせようと、急ぎ走る〟という意味の字で、卜と走との会意形声字です。趣と同じく〝おもむく〟が本義。赴任。

越は、武芸の意味の戉（まさかり）と走との会意形声字で、音は戉（エツ）です。武器を執（と）って敵に向かう時には、障

碍を乗りこえて進みます。それで、〝こえる〟という意味を表わしました。越境、超越。

行は、十字路の象形です。人の歩行するところですから、〝いく〟という意味を表わしました。指事字です。

術は、行と朮との形声字です。𠚕が術の本義です。道は、目的地に行くのによらなければならぬものです。だから、何事でも、行なうのに最も良い方法を道または術と言うのです。奇術、剣術（道）、柔術（道）。

街は、行と圭との形声字です。𠚕が街の本義です。〝大通り〟のことです。街道、街路樹、街燈、市街。

衝は、〝重要な街道〟という意味で、重と行との会意形声字です。音は重。転じて〝重要な場所〟という意味に使います。要衝。また衝（道路）は重要な場所を〝つらぬいて〟通っていますので、〝突きぬける〟〝突きあたる〟という使い方も生まれました。衝突。

彳は、行の右半分を省略した形で、形の上で人扁に似ているため、「行人扁」と呼ばれますが、意味用法は、行と同じです。

征は、〝行って不正を正す〟という意味の会意形声字です。音は正。征伐、遠征。

後は、彳と幺と夂の会意形声字です。反対向きの足の形である夂が、〝うしろ〟へ行くことを表わしています。

徒は、辻の変形したもので、土と辶との会意形声字です。〝土の上を歩いて行く〟のが本義です。転じて、馬や駕に乗らない〝身分の低い士〟を言います。徒歩、徒行、徒卒。

従は、従の略。従は辵の変形で、从と辶との会意字です。从は、人が人に〝付きしたがう〟ことを表わした会意字で、従の本字です。従は新しく作られたものです。

循は、巡や順の意味の盾と、彳との会意形声字です。「循守」は〝従順〟の意味、「循環」は〝巡回〟の意味です。

得は、得の略です。〝道路（彳）で、お金（貝）を手（寸）に入れる〟という意味の字です。拾得。得をする。

待は、役所の意味の寺と彳との会意字で、〝役所に行きまたされる〟ことを表わした字です。音は寺のなまった㞢（チ）が変化したタイ。

辺は、邊の略字。〝国の果て〟〝地の果て〟という意味の字です。それは、〝刀を持って行かなければ危険な「辺鄙」な土地〟という意味で、力と辶とで表わしています。辺境。

迷は、八方に分かれる道路の象形である■と辶との会意字。どの道を行ったらよいか、〝まよう〟という意味の字です。音は米（メイ）。迷路、迷惑、迷信。

速は、木を一本一本運ぶよりも、束にして運んだ方が〝はやい〟という意味の字で、束と辶との会意形声字。敏速、速達。

連は、車があとからあとからと続いて行くという意味の会意字。今の東京の道路の様子にぴったりの字です。連続、連想。

逸は、兎（うさぎ）と辶との会意字。兎は逃げ隠れのすばやい動物なので、〝すばやい〟〝逃げる〟〝隠れる〟などの意味に使われます。逸足、逸品。

運は、軍用車の意味の軍と辶との会意形声字で、音は軍の変化したウン（グン）。武器糧食を〝はこぶ〟のが本義です。運送。

「軍」は、軍用車を取り巻く形の字で、〝軍隊〟を表わしたものです。

道は、首と辶との会意字で、〝大切な道〟〝本道〟という意味の字です。

逆は、人の逆さになった形の屰と辶との会意字で、〝反対の方向に行く〟のが本義です。逆行、逆流、逆算。転じて、〝そむく〟こと。反逆、逆賊。

辻は、わが国で作った漢字です。平坦の意味の一と辶とで、〝すべる〟意味を表わした会意字です。

辻は、〝十字路〟のことで、〝つじ〟と読みます。

込は、〝入（はい）りこむ〟という意味の字です。「辻・辻・込」など、わが国で作られた漢字には音がありません。

延は、延とノとの会意形声字です。延は足の意味の止と廴とで〝道を行く〟意味。ノは曳（えい）（引きずる）のノです。延は、〝道のりが引きのばされる〟という意味です。それは〝遠くまで行く〟意味に

もなりますので、「遠」と同音同義になります。音はノ(エイ)が変化してエン。延長、延期。

曳は、申(えい)とノとの会意形声字です。申は伸の本字で、〝物を両手で引きのばす〟意味の臼と乙との会意字です（）。曳は、その引き伸ばしている手をわきから〝引っぱる〟ことです。曳航（船を引っぱる）。

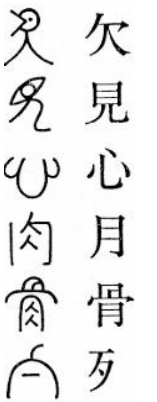
廻は、まわる意味の◎に𠙵を加えて、〝まわり道をする〟意味を表わした字。今では回が廻の意味も兼ねています。巡廻（回）。

建は、筆の本字の聿と廴との会意形声字で、〝筆を動かし進める〟〝文章を書く〟のが本義の字です。「建策」「建議」は、文書をもって意見を進言することです。転じて、〝計画を立てる〟意味から、〝家をたてる〟ことにまで使われます。建国、建築。音は、廴(エン)が変化してケン。

廷は、壬(てい)と廴との会意形声字です。壬は𠂆と土との会意字で、人が直立するという意味の字で、〝役人〟を表わした字です。廷は、〝役人〟の働きまわる役所という意味の字です。

庭は、役人の集合する〝役所のホール〟が本義の字で、广（建物）と廷との会意字です。転じて、〝広場〟の意味になりましたが、「日本庭園」の庭とは、内容が大変に異なっています。

人体に関係のある部首



欠は、口を大きく開いた人の形を表わしたものです。だから、〝あくび〟という名があります。部首としては、〝口を開く〟〝あくびする〟という意味に使われます。

次は、二(ジ)と欠との会意形声字で、音は二です。二番めで結構、とだらけた気持であくびしている状態を表わした字です。〝つぎ〟という意味になります。次官、次男。

欧は、区(おう)（嘔）と欠との形声字。〝おうおうと言って、食べた物を口から吐き出す〟のが本義。「欧州」「欧米」は仮借による用法です。「嘔」と同音同義。

吹は、〝口を開いて、口から息をふき出す〟という意味の会意字。音は炊(スイ)。吹奏。

飲は、〝口を開いて、食べ物をのみこむ〟という意味の会意字。音は引(イン)。飲酒。

歌は、〝口を開いて、よい声（可）を出す〟という意味の会意形声字。歌唱。

見は、目と人との会意字で、人が目で〝みる〟という意味の字です。見学。

視は、祭祀の意味のネ(し)と見との会意形声字で、音は示(シ)。儀式に手落ちのないように、〝注意深くみ

る〟という意味の字です。視察、注視、看視。

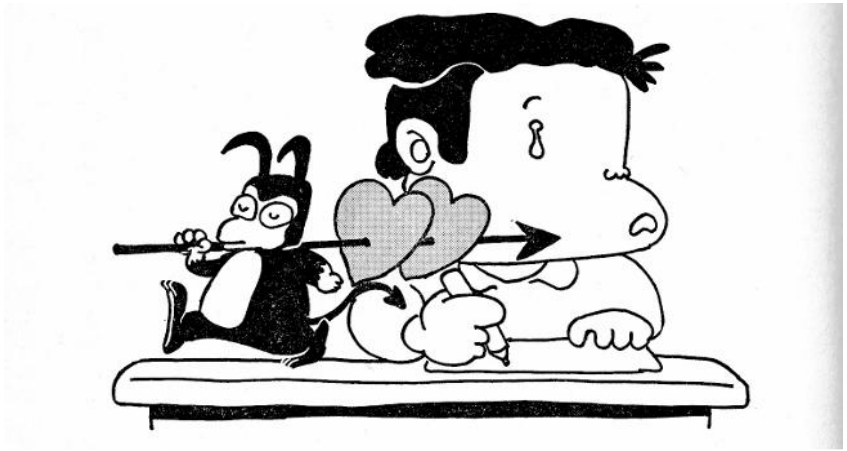
覚は、学の意味の𦥑（かく）と見との会意形声字で音は𦥑（かく）。見てよく学べば〝わかる〟し、また〝おぼえる〟こともできます。「自覚」は〝わかる〟〝さとる〟の意味です。

親は、辛（シン）と木と見との会意形声字で、**親**が本字。木は人の住む所なら、どこでも見ることのできるものです。〝見なれたもの〟という意味の字で、〝したしい〟が本義です。人間関係で、最も見慣れており、最も親しいのは、〝おや〟です。〝おや〟は転注。親愛、親族。

覧は、監の意味の𦥑と見との会意形声字です。〝高い所から見おろす〟〝身分の高い人がごらんになる〟という意味の字です。天覧、御覧、遊覧。

規は、コンパスの象形の夫（𡈼）と見（けん）との形声字で、〝円をえがく器具〟のことです。見の音は〝き〟と〝えん〟とに分けることができます。見＝規＋円。

心は、心臓の象形で、〝心臓〟が本義。転じて〝精神作用をつかさどるこころ〟という意味に使われます。心配、心理。



念は、今の心という意味の会意字です。現在、ああしたい、こうしたいと考えている心ということです。念願、専念、雑念。

志は、𢍏が古体です。𠂇はえ（行く）の古体で、〝活動状態にはいった心〟を志と言うのです。〝こころざし〟。闘志、大志。

忠は、〝真心〟という意味の字で、中と心の会意形声字です。忠実、忠誠。

思は、⊗𢍏で、⊗と心との会意形声字です。■は脳の本字です。脳と心臓とが、人間の思考活動をつかさどるということで、組み立てられたものです。思想、意思。

忍は、心を刃物で突き刺されるような思いにも〝たえしのぶ〟という意味の字で、刃（ニン）（呉音。漢音はジン）と心との会意形声字。

忘は、〝心をうしなう〟という意味の字で〝わすれる〟ことを表わしています。亡（ぼう）（失う）と心との会意形声字。忘恩、忘年。

忙は、〝忘れるほどいそがしい〟という意味の字です。忘と同じく、亡（失）と心との会意形声字です。多忙、忙殺。

性は、〝生まれつきの心〟という意味の字で、「天性」「本性」「性格」などと使われる字です。生と心との会意形声字。

恥は、耳から入って心に痛く感ずるという意味で、〝はずかしい〟ことを表わしました。音は耳。
恥辱、無恥厚顔。

悟は、吾と心との会意形声字。〝吾を正しく心に写し出す〟ことです。肉眼が自己の肉体を見ることができにくいように、自己の心はわかりにくいもの。その心をはっきりと明らかにするのが〝さとり〟です。悟得、覚悟。

患は、串（くしで貫く象形）と心との会意形声字で、〝心を突き刺されるような思い〟という意味の字です。〝うれい〟。転じて〝病気にかかる〟ことに使われます。内憂外患、患者。串は、食べ物にくしをとおすこと、貫はお金（貝）の穴にひもをとおすこと。言葉としてはどちらも同じカンです。

惜は、〝昔を思う心〟という意味の、昔と心との会意形声字です。過ぎし昔のことはなつかしく、美しいもの〝なつかしむ〟〝いとおしい〟ことです。愛惜。

想は、〝よく見る〟意味の相と心との会意形声字です。実際の様子を眼前に見るように、心にありありと〝思いえがく〟ことです。想像、回想、思想、感想。

愁は、〝秋の心〟という意味の、秋と心との会意形声字です。「枯れ枝に鳥のとまりけり秋の暮」何とはなしに、物のあわれを感ずるのが〝秋の心〟です。〝うれい〟。哀愁、旅愁。

意は、声音の意味の音と心との会意形声字で、音は、音がつまってイ。心に思っていることが「よしやろう」という声になって出る状態になった心を意と言います。意志、決意、意見。精神活動の本体が「心」であり、刺戟に対して心が活動し始める状態が「志」であり、判断がついて行動に移ろうとする状態まで高められたのが「意」です。

慎は、〝心に悪や油断が生じないようにつつしむ〟という意味の、真と心との会意形声字です。言葉をつつしむのが謹、心をつつしむのが慎です。謹慎、慎重。

慈は、草の滋る意味の茲と心との会意形声字で、草に水をやり、育て〝いつくしむ〟心を言います。

「慈愛の心が草本にまで及ぶ」というのが慈の本義です。慈悲、慈善。

慣は、物事をやり抜きとおす意味の貫（かん）と心との会意形声字で、〝一貫した行為によって生ずるなれ〟を表わした字です。慣習、慣例、慣性、慣用。

憶は、おもう意味の意にさらに心を加えて、〝長く思う〟意味を表わした会意形声字です。記憶、追憶。音のオクは、oku ではなくて、ok、つまり、今の表記で言えば、オッであって、熟語の組み合わせ方によっては ong になり、on に近いのです。音は漢音がイン、呉音がオンですが、「イ↑イン↓イク」、「オ↑オン↓オク」で、これらは発音の現実では、ほとんど同じに聞こえるのです。「意（イ）」と「憶（オク）」とではまるで、縁がないように見えますが、現実で通じ合う音なのです。

憧は、いつも心が外に向かっていて、他を〝あこがれ〟ている児童の心を表わした、童（どう）と心との会意形声字です。憧憬。

惑は、〝もしかしたら〟という意味の或（わく）と心との会意形声字です。〝疑いを抱く〟という意味の字で〝まどう〟こと。惑乱、迷惑、誘惑。

惰は、堕（地に落ちる）の意味の旁（だ）と心との会意形声字で、〝堕落した心〟という意味の字です。〝怠ける〟〝おこたる〟こと。怠惰、惰性（現状を打開して向上しようという気持に対して、現状維持の気持のこと）。

悩は、脳（のう）と心との会意形声字です。は頭脳の象形のに髪の毛を加えた形です。心や頭を使うということで、〝なやむ〟意味を表わしています。苦悩、煩悩。

肉は、獣肉のきれの象形です。〝食肉〟が本義ですが、部首としては、多く、肉体の名称に使われています。

胃は、で、は、胃に食べ物が入っている象形です。

肩は、肩の象形であると肉の会意字。肩を軸として腕が戸のように動く意味にも取れます。

腕は、宛曲の意味の宛（わん）と肉との会意形声字で、曲げたり伸ばしたりできる〝うで〟を表わしました。音は宛の変化したワン。

肝は、幹（かん）の意味の干と肉との会意形声字で、〝根幹にあたるような大事な臓器〟という意味の字です。「肝腎」は、肝臓と腎臓のことで、どちらも重要な臓器なので、〝重要〟という意味に使われます。

胸は、匈と肉との会意形声字。匈は、包む意味の勹（第2章の包参照）と凶の形声字で〝心臓や肺を包むところ〟のむねを表わしたものです。

脈は、川の分派する形を表わした𠂢（𠂢で派の本字）と肉の会意形声字で、〝血液が分派して流れる血管〟のことです。動脈。静脈。𠂢の音は、漢音がハ、呉音がマ。これがつまって発音される場合、昔はこれをハク、マクと表記したもので、haku、maku と読んだものではありません。ミャクはマクのなまりです。

胴は、筒の意味の同と肉との会意形声字で、〝肉体の筒状をしたところ〟という意味の字です。胴体。

胎は、〝始まる〟の意味の台と肉との会意形声字で、〝母体の中に新しい生命が始まる〟ことを表わした字です。「妊娠」と同義です。転じて「子宮」の意味に使われます。母胎、胎内。ﾆ:はﾆ:に最も変化しやすい音です。ﾀｲとも発音されます。始と胎とはもとは同音なのです。詩と待との関係と同じです。

肺は、音の意味の市（市とは異字、沛然の旁と同字）と肉との会意形声字です。音（第2章の音を参照）の〝二つに分ける〟という意味によって〝左右二つに分かれている臓器〟を表わしたものです。

骨は、ほねの象形𠙵と肉との会意形声字で、〝筋肉の付いたほね〟が本義の字。音は冎の変化したコツ。「骨格」、「骨子」は〝ほね〟ぐみの意味で〝輪郭〟〝要点〟という意味に使われます。

髄は、付随の意味の遀と骨との会意形声字で、〝骨に付随している、骨の中に充満している脂肪状の物質〟のこと。〝骨の内部〟。脊髄。転じて、〝物事の中心となる大切な所〟という意味に使われます。心（神）髄、精髄。

歹は、𠙵がくずれた𠂤です。肉体が死んで骨がばらばらになった状態を表わした字です。「一夕扁」と言います。〝死〟に関する意味を持った部首です。

死は、人の倒れて死んだ形のヒと歹との会意字で、〝人が死んで骨となる〟意味の字です。

歿は、水中に隠れる意味の没と歹との会意形声字で、〝死ぬ〟ことを表わしています。死歿。

殊は、血を意味する朱（あけ＝赤）と歹との会意形声字で、〝朱に染まって死ぬ〟という意味の字

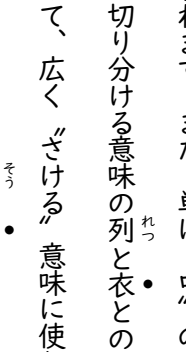
で、〝斬刑〟が本義です。首と胴体とが〝切り離される〟刑なので、〝ことにする〟という意味から転じて〝ことなる〟〝ことに〟（特別に）という用法が生まれました。特殊、殊勲。

殉は、順の意味の旬（じゅん）と歹との会意形声字で、〝人の死に順って死ぬ〟ことです。殉国、殉死。

殖は、木をふやす意味の〝植〟にならって〝人をふやす〟意味の字として作られたもの。歹と植（しょく）との会意形声字。殖民。生殖。転じて、動物や財貨をふやすのにも用います。繁殖、貨殖、殖産。

列は、骨から肉を〝切り離す〟意味の会意字です。〝わける〟が本義で、転じて〝ならべる〟という意味に使われます。行列、整列。

衣食住に関する部首



衣は、上衣の象形で、〝着物〟を表わした字です。音は漢音がイ、呉音がエ。部首としては衤（衣扁）が多く、亠と仌と上下に分けて使われるものもあります。

表は袁で、毛と衣との会意字です。毛皮の着物で、毛のある方が〝おもて〟です。〝おもて〟が本義で、〝おもてに出す〟つまり〝あらわす〟という意味にも使います。表面、表記、表現。

裏は、内側の意味の里（城郭の内）と衣との会意形声字で、〝着物のうら〟が本義の字です。転じて、広く〝うら〟の意味に使われます。裏面、暗々裏。

衷は、〝衣の中〟という意味の会意形声字で、音は中（チュウ）です。〝ふところ〟。転じて〝心〟の意味にも使われます。また、単に〝中〟の意味にも使われます。衷心、衷情、折衷。

裂は、切り分ける意味の列（れつ）と衣との会意形声字で、衣類を仕立てるに当たって〝布を切りさく〟こと。転じて、広く〝さける〟意味に使われます。分裂、破裂。

装は、壮大の意味の壮（そう）と衣との会意形声字で、〝りっぱな着物〟という意味の字。〝よそおい〟。盛装、服装、装備。

被は、体の外側を包む意味の皮（ひ）と衣との会意形声字で、〝体を包む衣類〟の総称。被服、外被、転じて、〝おおう〟〝こうむる〟。被害、被告。

製は、刀で断ち切る意味の制（せい）と衣との会意形声字で、〝衣服を裁断する〟意味の字。転じて、広く〝物を作る〟意味に使います。製本、製鉄、製紙、作製。

巾は、布で物を覆う形の冂と糸すじ一との会意字で、〝ぬのぎれ〟を表わした部首です。音は僅(キン)です。布巾、頭巾。

布は、父の省略した形の乂と巾との会意形声字で、〝父用の巾(ぬの)〟という意味の字です。昔は、〝上質の麻ぬの〟を布と言ったのですが、今は広く〝ぬの〟の意味に使います。転じて、〝敷く〟意味に使います。綿布。布設

帛は、〝白い布〟という意味の、白(はく)と巾との会意形声字です。白い厚手の絹で、昔は礼物の贈答によく使われました。布帛。

希は、爻(こう)と巾との会意形声字です。爻は糸の交差した象形で、〝刺繍を施した、飾りのある巾(ぬの)〟という意味の字です。こういう美しい布は僅かしか作れませんので、〝少ない〟という意味に使われます。「希少」「希有(けう)」。また、だれもがほしがるので〝のぞむ〟という意味にも使われます。希望。

帳は、長(ちょう)と巾との会意形声字で、〝長い布〟が本義の字です。商店で、お金を勘定する所に、外から見えないように長い布を垂らしました。これを帳場と言います。帳場で使う書きつけが「帳簿」です。帳簿の数字を〝帳づら〟と言います。漢字で表わすと「帳面」です。帳面は帳場で使うものですが、今ではノートの意味に使われています。

席は、と巾との形声字です。昔は、床の上に布を敷き、そこに坐りました。これが席です。座席、出席。

帯は、と腰に結ぶ紐を表わすと巾との会意字です。昔の人は、七つ道具を腰のまわりにぶら下げました。これが帯です。帯は、七つ道具や手拭を〝身につける〟という意味の字です。〝身におびる〟ことから転じて〝おび〟の意味になりました。携帯、帯剣、帯革。

帝は、天帝を祭る時に、捧げ物を載せる机の象形で、これによって〝天帝〟そのものを表わしたものです。後、天子の称号になりました。

帥は、小高い丘の象形である()と巾との会意形声字。軍隊は、丘の周囲に集合するので、は「軍隊」の意味に転用されます。巾は軍を指揮するための小旗。帥は、〝軍隊の指揮者〟のことです。統帥、元帥。音は、(たい)が変化してスイ。

師は、軍隊の意味のと、止まる意味の帀(し)との会意形声字で、〝軍隊が駐留する〟のが本義。転じて「軍団」「軍の指揮官」「教師」の意味になりました。王師(王の軍隊)。



帆は、風をあらわす凡（はん）と巾との会意形声字で、〝風を受けて進むための舟のほ〟を表わしています。

糸は、繭から取った糸をより合わせた象形字です。音はシです。製糸工揚。

細は、糸と田（思の田で⊗、音は𠂤）との形声字です。〝いと〟という意味が、〝はそい〟という意味を表わしているのです。糸𠂤も細𠂤も元来は同じ意味であり、同じ発音なのです。細小。転じて〝こまかい〟。細字、細胞。

系は、𢆶で、〝二本の糸をつなぐ〟という意味の会意字。音は繋（ケイ）。転じて〝家のつながり〟〝血のつながり〟の意味。家系。

糾は、糸をより合わせた象形糾の丩（きゅう）と糸との会意形声字で、〝糸をより合わせる〟こと。糾合。また〝糸がからみつく〟。紛糾。転じて紛糾したものを解くために〝ただし調べる〟。糾明。

約は、物を包んだ形の勺（しゃく）と糸との会意形声字、〝包んだものを糸でくくる〟こと。〝ひきしめる〟ことから「倹約」「節約」という使い方が生まれました。

納は、〝外で乾かした糸を内にしまう〟という意味の会意形声字で、音は内（漢音はダイ、呉音はナイ）が変化して、漢音はトウ、呉音はノウ。納入、出納（すいとう）。

純は、屯（じゅん）と糸の形声字で、他の糸を交じえない「純粋の生糸」のこと。転じて、〝まじりけのない〟意味に用います。純毛、純良。

紋は、模様の意味の文（もん）と糸との会意形声字で、〝織物の模様〟が本義。わが国では、家系を表わす「紋章」の意味に使います。

紛は、糸が分かれて〝入り乱れる〟という意味の、分（ふん）と糸との会意形声字。緒（いとぐち）が〝まぎれ〟てわからないことです。紛糾、紛失。

素は、まだ彩色しない〝生糸〟のこと。転じて、〝もとのまま〟〝しろい〟〝飾りけない〟などの

意味に使われます。素質、平素、元素、素朴。

累は、纍が正字。畾は、雷の本字で、雷鳴の〝重なり続く〟意味の字。累は、〝糸を重ねる〟こと、転じて、広く〝物を重ねる〟意味に使います。累計、累代。「累卵」は卵を重ねることで、大変危険なことの譬えに使う言葉です。音は畾が変化してルイ。

塁は、壘が本字。〝土を高く積み重ねる〟ことで、〝とりで〟〝城壁〟のことです。今は野球で「一塁」「二塁」と使います。昔の言葉で言えば、「一の丸」「二の丸」「本丸」に当たります。

継は、繼が本字。〝切れ切れ（幺幺幺）になった糸を一本の糸にする〟という意味の字で、〝つなぐ〟ことを表わしました。継続。

断は、𢆶と斤で、〝糸をばらばらに切断する〟ということを表わした字です。転じて〝思い切りよく〟処置すること。決断、判断、英断。

続は、續が本字。賣は属の意味の部首。〝切れた糸をつなぐ〟こと。連続、続出。

読は、讀が本字。〝言葉をつなぐ〟という意味で、〝本をよむ〟ことを表わした字です。言葉を切れ切れに読んだのでは〝読〟とは言えません。

網は、罒と糸と亡の会意形声字です。罒は罔で、鳥を抽える〝かすみあみ〟の象形です。〝糸を材料にして作ったあみ〟という意味の字です。亡は音を表わしたものです。

綱は、岡（大きな鳥あみ）の糸という意味で、〝太いつな〟を表わした字です。「大綱」。「綱紀」は〝人をしめくくる〟意味で、〝物事のきまり〟〝規則〟のことです。

岡は、罒と山の会意字で、〝山の上に張った大きな鳥あみ〟が本義の字で、転じて、あみを仕かける〝おか〟の意味になりました。

繕は、〝糸で善くする〟という意味の字で、善と糸の会意形声字です。〝破れをつくろう〟こと。修繕。

結は、吉と糸との会意形声字で、〝切れた糸をつなぐ〟ことです。繕と同じように、〝糸で吉くする〟という意味の字です。音は吉が変化してケツ。連結。

縫は、合うという意味の逢と糸との会意形声字で、〝糸で布をぬい合わせる〟ことを表わしました。裁縫。

絹は、繭の意味の肙と糸との会意形声字で、〝繭から取ったきぬ糸〟という字です。

綿は、〝帛を糸でつなぎ合わせる〟という意味の字で〝連なり続く〟が本義。連綿。また繭を広げて引き伸ばし、これを何枚も重ね合わせて作った〝まわた〟をも言います。真綿。転じて、〝木綿(もめん)わた〟を言うようになりました。

緊は、堅(固)の意味の臤(きん)と糸との会意形声字で、〝糸でかたくしめる〟という意味を表わしています。緊密、緊張。

線は、流れのつきない泉(せん)と糸との会意形声字で、〝長く続いた糸〟という意味を表わしています。線路、電線、光線。

縮は、ひと所に集まる意味の宿(しゅく)と糸との会意形声字です。昼は散って広がっていた人が夜になるとひと所に集まります。その意味を取って、〝ちぢむ〟意味を表わしたのが縮です。糸がちぢむのが本義。縮図、圧縮。

紙は、氏(し)と糸との会意形声字。氏は𠂆で食事に使うナイフの象形です。氏は紙の〝うすい〟意味を表わしています。糸は、材料を表わしています。

絵は、色を表わす糸(紅(あか)、紫(むらさき)、紺(あお)、緑(みどり))と会(かい)との会意形声字です。〝いろいろな色を会わせる〟という意味の字です。漢音はカイ、呉音はエです。エを訓だと思いやすいのですが、この字には訓はありません。

紅、紫、紺、緑など、色の名に糸が用いられるのは、色彩が糸や布によって発達したためです。つまり、「紅」は、色そのものの名というよりも、〝赤く染められた糸〟に対する名称と考えるべきでしょう。これらはみな形声字になります。

終は、一年の終りを表わす冬(とう)と糸との会意形声字で、〝糸のおわり〟を表わした字です。〝糸どめ〟〝玉むすび〟が本義ですが、今は、糸に関係なく、〝物事のおわり〟という意味に使われています。音は冬の変化したシュウです。

練は、練が本字です。柬は束と八との会意字で、〝束の中から良い物を選び分ける〟という意味の字です。練は、〝束ねた沢山の糸の中から、選び出した品質の良い糸〟という意味の字です。糸を煮て〝ねる〟と糸がやわらかく光沢も出るので、〝ねり糸〟と言います。また、〝糸をねる〟ことから転じて、広く〝きたえる〟意味に使われます。訓練。

玉は、三つの玉をひもで連ねたものの象形です。点が右下に付いているのは、この字が王と同じ字形なので、区別するために、あとから加えたものです。扁の場合は、玉の意味がよくわかるので、点を付けませんが、王扁ではありません。音はギョク、またはキュウ。

球は、玉のキュウという音を表わす求を加えた形声字です。地球から始まって、野球、気球、電球、眼球など多く使われる字です。

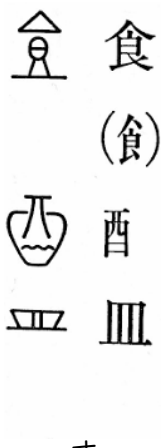
珠は、朱と玉との会意形声字で、〝赤い玉〟が本義です。今は、色に関係なく用いられています。真珠、金銀珠玉。

環は、まるく取り囲む意味の圜と玉との会意形声字です。まるい輪の形をした、中空の玉です。輪になっている所から、〝とりかこむ〟「環境」、〝まわる〟「循環」などとも使われます。

現は、見と玉との会意形声字で、暗い所でも玉が輝いて見えるという意味で、〝はっきり見える〟ことを表わした字。〝あらわれる〟こと。出現。転じて、〝今〟という意味に使われます。現在、現代。

理は、田んぼのあぜ道の意味の里と玉との会意形声字です。〝玉の表面に見えるすじ模様〟を表わした字です。転じてこのすじ模様をうまく生かして美しい玉をこしらえる意味になりました。〝玉をととのえる〟こと。さらに転じて、「料理」「理髪」などとも使います。また、〝すじ道〟の意味で、道理、理論。

班は、〝二つに切り分けられた玉〟という意味の、玉と刂（刀）との会意字。音は半分にする意味の判。今では、単に〝分ける〟意味に使われます。「班田収授」。また小分けしたものの称。新聞班、映画班。



食は、食器に食べ物を盛った形に、ふたをあわせて象った字です。亼はこの字の音を表わす部首でもあります。

飲は、口を開いた形を表わした欠と食との会意字で、〝食べ物をのみこむ〟意味を表わした字です。

飯は、毎日定時に反復して食べる物という意味で〝主食であるめし〟を表わしたもの。反と食との会意形声字です。

飼は、〝食事を司どる〟という意味の字で、〝食べ物の用意をする〟ことです。転じて動物にえさを与えること、〝動物をかう〟意味に使われます。飼育、飼料。

饑は、〝少ない〟または〝危い〟意味の幾と食との会意形声字で、〝食べ物が少ない〟〝うえる〟という意味の字です。饑饉。

飢は、幾の意味の几と食との会意形声字で、饑と同音同義の字です。飢饉。

饉は、僅かの意味の堇と食との会意形声字で、飢や饑と同義の字です。

館は、家の意味の官と食との会意形声字で、〝食事のできる家〟のこと。旅館。転じて〝大きな建物〟の意味に使われています。

養は、美の意味の羊と食との会意形声字で、〝りっぱな食事〟という意味の字。栄養。転じて、〝体をやしなう〟こと。養育、扶養。

余は、餘が本字。与える意味の余と食との会意形声字。人に与えるほど食べ物があるということは、〝あまる〟ほどあることを意味しています。

酉は、酒を入れる〝かめ〟の象形で、酒に関する字の部首に用いられます。旁の場合は「酒旁」と呼ばれていますが、扁の場合は「酉扁」と呼んでいます。酉の字が十二支の〝とり〟に当たるので、この名がありますが、意味の上では、〝とり〟に全く関係ありません。

酒は、〝酒がめに入れた液体〟という意味の字で、〝さけ〟を表わしています。

酔は、醉が本字。終わる意味の卒と酒との会意形声字で、〝酒を飲み終わる〟という意味になります。〝酒によう〟ことを表わしています。音は卒。「麻酔」「心酔」という使い方もあります。

醜は、〝酒を飲んで酔うとだれでもみにくくなるが、みにくい鬼が酒を飲んだら、どんなにみにくくなるだろう〟という意味で、〝みにくい〟ことを表わした字です。音は酒。



酷は、苦い意味の苦と同音の告と酉との会意形声字で、〝きつい酒〟を表わしています。転じて、広く〝ひどい〟〝きびしい〟という意味に使われます。酷暑、残酷。酷も苦も現代中国音は同じkuです。

酵は、孝と酒の形声字で、酒を醸造する時〝わき立つ〟ことを言います。発酵。発酵作用を起こす菌が「酵母菌」です。

酌は、水をくむ意味の勺と酒との会意形声字で、〝酒をくむ〟こと。晩酌。

配は、妃（つれあい）の意味の己と酒との会意形声字。〝さし向かいで酒を飲む〟という意味の字。転じて、〝酒を分ける〟〝くばる〟意味に使われるようになりました。配分、配達。また、妃の意味で「配偶」という言葉もあります。

酬は、めぐる意味の周の仮借の州と酒との会意形声字で、〝さかずきをまわす〟こと。転じて、〝返杯〟の意味から〝返礼〟の意味が生まれました。献酬、応酬。

皿は、食物をのせる平たい〝さら〟の象形字です。脚として用いられることの多い部首です。音はベイ。

益は、水という字を横にした氺と皿との会意字で、皿にもった水が盛りあがって見えるという意味の字です。〝あふれる〟が本義ですが、〝ふえる〟〝もうけ〟の意味に転用され、本義のためには「溢」が作られました。

盛は、りっぱな意味の成と皿との会意形声字で、〝皿にりっぱな食べ物をもる〟ことを表わした字です。〝りっぱ〟という意味と、〝もる〟という意味と〝さかん〟という意味とあります。盛装、山盛り、盛大。

盗は、盗が本字です。盛られた御馳走を見て口からよだれを出すのが〝次〟です。盗は、思わず〝ぬすみ食い〟をすることです。転じて、人の目をかすめて〝ぬすむ〟ことに使われます。

盟は、昔、諸侯が条約を結ぶ時、牛の耳から血を取り、これをすすって約束に背かないことを神に誓い合いました。これが盟で、「同盟」という言葉ができました。この時、盟主が牛の耳を取るので、一般に指導的立場に立つことを〝牛耳を取る〟というようになりました。血を皿に盛るので、血という字は皿の上に血のしるしを加えて作りました。盟は、明と皿との会意形声字です。

盤は、搬の意味の般と皿の会意形声字で〝運搬に便利なように両端に柄のついた、大きな皿〟のことです。「水盤」「基盤」「円盤」などとも便われるようになりました。

搬は、舟で運ぶ意味の般と手との会意形声字で、〝手で物を運ぶ〟意味を表わしました。

盆は、分と皿との会意形声字で、音は、分が変化してボン。〝銘々に分けて食べ物を盛る皿〟という意味の字です。銘々皿。わが国では、食器を載せる台のことを言います。

宀は、屋根のある家の象形字です。家の意味のほかに、〝上から覆う〟意味の部首として使われているものもあります。

家は、豕（ぶたの象形、豚の本字）と宀との会意字。中国では、どの家でも豚を飼っていたので、この字ができました。

宿は、ベッドの象形の百と人と宀との会意字で〝家の中のベッドに人が休む〟意味を表わしています。

室は、〝人の至り止まる家〟という意味で、至と宀との会意形声字です。音は至がつまってシツ。〝へや〟のことで、「居室」「浴室」「暗室」などと使います。

至は、で、鳥が飛んで、地上に舞い下りる形を表わしたもので、地上に〝いたる〟という意味を表わしています。今は、〝いたって〟という副詞に使われることが多く、動詞の〝いたる〟のためには〝到〟ができました。至急、至近、到着、到達。

宮は、躬（身体）の意味の呂と宀との会意形声字で、〝身体を休める家〟という意味の字です。〝りっぱな住居〟の意味に使われています。宮殿、宮城、神宮。訓の〝みや〟は〝御屋〟または〝御家〟の意味です。宮は、漢音がキュウ、呉音はグウ。

完は、元首の意味の元と宀との会意形声字で、〝元首の住む家〟という意味の字です。〝欠けた所のないりっぱな家〟ですから、「完全無欠」という使い方が生まれました。

宗は、神霊の意味の示と宀との会意字で〝先祖代々の霊を祭ってある家〟、つまり、〝本家〟を表わした字です。本家は頼りになる、尊敬すべき家なので、〝たっとぶ〟意味に使われます。宗家、宗祀。

察は、祭と宀との会意形声字で、音は祭がつまってサツとなりました。先祖の祭りは、昔は極めて

重要なものとされ、万事に手落ちのないように慎重に行なわれました。それで、祭に〝念入りに見る〟〝正しらべる〟という意味を託したものです。観察、視察。

安は、女と宀との会意字で、〝家に女がいれば安心していられる〟という意味で、心の〝やすらか〟なことを表わした字です。安息、平安。

定は、正の変形した**正**と宀との会意形声字で、〝家の中を正しく治める〟という意味の字です。論語に「席正しからざれば坐せず」とありますが、正しきにおることが、身心ともに安定（〝さだまる〟）するゆえんです。音は正がなまってテイ。

宝は、宝玉の意味の玉と宀との会意字で〝たから物〟を表わしたものです。玉は代表的な財宝で、家に大切に保存しておくべき物だというので、玉を宀で包みました。

実は、實が本字です。財宝の意味の貝が家にいっぱいあることを表わした字で、〝みちる〟という意味が本義です。充実。転じて、〝みのる〟〝み〟の意味に使われています。果実、事実。

宅は、托の意味の乇と宀との会意形声字で、わが身を〝托する家〟という意味の字です。自宅、住宅。

寡は、宀と頁と分の会意字です。**㝡**は頒で、〝分かつ〟こと。寡は、〝家を分かつ〟のが本義の字です。分家。分家すると財産が分割されて〝少なくなる〟ので〝少ない〟意味が生まれました。「衆寡敵せず」。寡婦は、夫に分かれてひとり家に住む婦人という意味です。

宣は、へやの外の廊下を表わした亘と宀との会意形声字です。今の言葉で言えばホールに当たります。昔、朝廷では、詔をこの大広間である宣で伝えました。それでこれを「宣旨」と言います。また、詔勅は国民に〝広く伝える〟ものであるから、「宣伝」という使い方が生まれました。

広は、一方が開放されていて、自由に出入りができる大きな家の象形です。個人の住宅ではない建物を表わすのに多く用いられる部首です。

店は、お客に問放されている家の形の广と占との形声字です。音は占がなまって点となりました。占は、品物の陳列棚の象形と見ることもできます。

庫は、車を入れておく〝車庫〟を表わした字です。今では、広く〝物を入れおく建物〟の意味に使います。書庫、金庫、倉庫。

広は、广が〝ひろい建物〟という意味を表わしています。ム(こう)と广の形声字。旧字体は黄(こう)との形声字で廣。今は公、弘、宏のムで表わしたものです。

府は、与える意味の付(ふ)と广との会意形声字です。租税として与えられた穀物を納めておく〝倉庫〟が本義の字ですが、今は広く〝役所〟という意味に使います。

付は、人と寸（手）の会意字で、手をつける〝与える〟という意味を表わした字です。

度は、手を何回も広げて、〝長さを計る〟意味を表わした、广（広げる）と又（手）と廿との会意字です。廿は、十を横に二つ並べた形で、二十のことです。数の多いことを表わしています。昔は、両手を広げた時の長さを〝ひろ〟と言い〝尋〟と言って、これが長さをはかる単位とされたことは第2章の尋で説明しました。

〝長さを計る〟ことから転じて、広く〝はかる〟意味、また、〝はかりの目もり〟をも表わすようになりました。温度、角度。

庶は、家の中で火（灬）を燃やして、上になべをかけて食べ物をこしらえている象形です。平凡な庶民の生活を表わしたものであり、またそれは庶民の希望を表わしたものでもあります。〝民衆〟の意味、〝希望〟の意味に使われます。衆庶(しゅうしょ)、庶幾（望む）。

座は、すわる意味の坐(ざ)と广との会意形声字で、〝家の中の人のすわる所〟という意味の字です。座席。転じて〝人の集まる所〟という意味に使われます。名画座、講座。

坐は、土の上に人がふたりいる形の字で〝すわる〟という意味を表わした会意字です。普通、坐は〝すわる〟、座は〝すわる所〟の意味に使い分けられていますが、字の本義はそれはどの違いはありません。

床は、牀(しょう)の意味の木と广との会意形声字で、〝座ったり、寝たりする牀（ゆか）〟を表わしたものです。

牀は、〝木材を使って作った家具〟を表わした字で爿(しょう)と木の会意形声字です。爿は木を半分にした形で丬をまん中から分けると、爿と片(へん)とになります。片は、独立して「片方」などと使われますが、爿は部首としてしか使われません。爿は、木を切って角材にしたり、板にしたりすることを表わしていますので、〝ゆか〟〝寝台〟〝椅子〟など、いろいろの意味に使われています。

底は、〝傾きかかった家〟の意味の底と一との会意形声字で、家を安定させるために、土台につっ

ぱりを入れることを表わしています。〝家の土台〟〝そこ〟という意味の字です。

氏は、傾きかかった柱につっかえ棒をした形を表わした字で、〝ささえる（支）〟という意味を表わした指事字です。支には、〝分かれる〟という意味がありますので、一つの家から分かれ出たもの（支）を表わすための名のりを〝氏〟というようになりました。

庚は、古体が𠂤で、両手できねを持つ形です。〝穀物をつく〟のが本義の字です。今の字体では、人をきねに見たてればよいでしょう。

庸は、庚（よう）と用との会意形声字で、〝きねを用いる〟という意味の字です。転じて、広く〝用いる〟という意味に使います。雇庸、登庸。また、穀物をきねでつくことは、日常生活の常の仕事ですから、〝常〟の意味にも使われます。凡庸、中庸。

康は、庚（こう）と米との会意形声字です。お米がつけるのは、幸福な状態ですから、〝やすらか〟の意味を表わしました。健康。

廃は、乱の意味の発（はつ）と广との会意形声字で、〝破れ果てて、とても住めなくなった家〟を表わした字です。廃墟、廃屋。音は発（ハツ）が変化してハイ。

癈は、〝治療しても、元通りにならない病気〟〝手当てのしようもない病状〟を表わした字です。癈疾、癈人。（原本では「廃」が使われている。）

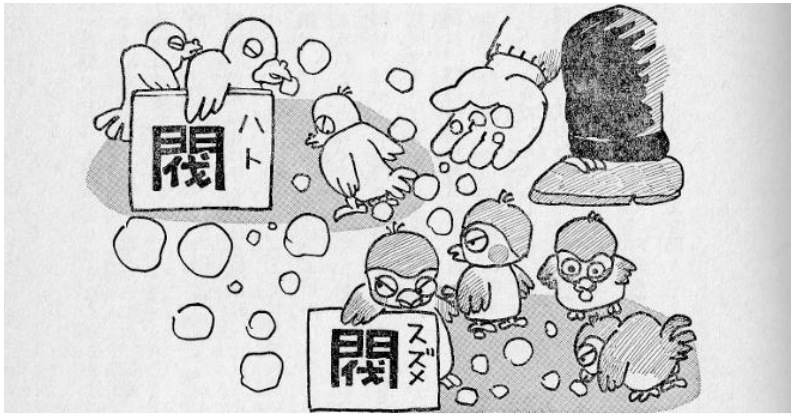
廊は、闌（手すり）の意味の郎（ろう）と广との会意形声字で、〝手すりのある建物〟という意味の字です。中国で、堂（表座敷）の東西にあるへやが、郎をめぐらしていて廊と言いました。また、へやを結ぶ「廊下」は郎があるので、この名前があります。

門は、両方に開く扉のついた門の象形字です。〝もん〟が本義ですが、〝家〟の意味にも用いられます。家門、名門。

関は、門をとじてかんぬきをした形です。旧字体では關でした。人が出入りできなくなりますので、〝せき止める〟意味を表わします。昔、通行人をせき止める所を「関所」と言いました。関東、関西は、箱根の関所を境にして〝関（せき）の東、西〟という意味の言葉です。

閂は、〝かんぬき〟をかけた門の象形で、〝かんぬき〟のことです。

開は、かんぬきに手をかけた形の开（幵）と門との会意字で、〝門をひらく〟という意味を表わし



ています。転じて、広く〝ひらく〟意味に使います。開発、開放。

閉は、門にかんぬきをかけ、そのかんぬきが動かないように縦木を入れ、さらにその木をも動かないようにとめた形です。〝門をとじる〟ことです。才は、才能の才（さい）ではありません。音は蔽（ヘイ）。

間は、間が本字。門の間から月光がさし込むという意味で、〝すきま〟〝あいだ〟の意味を表わした会意字です。〝すきま〟の意味から転じて〝ひま〟の意味が生まれました。音は閑（カン）です。間居（閑居）。

閑は、門の内側にある横木を表わした会意字です。「闌閑」とも言います。守衛が出入りする人をここで止め、調べました。怪しい者をここで干（ふせ）ぐので、「闌干」とも言います。このため門内はみだりに人が入らないので〝しずか〟という意味があります。閑静

閥は、門と伐（ばつ）の形声字で、左側の門柱の名称です。門と同じように〝家がら〟の意味に用いられます。門閥。転じて、同郷、同窓などの間で作る団結の意味に使います。派閥、財閥。

閲は、門と兌（えつ）の形声字で、右側の門柱の名称です。昔は、ここに車馬を並べたので、〝車馬を数えたり、調べたりする〟ことを閲というようになりました。閲兵、検閲。

戸は、家の出入口につけてある、片開きの〝と〟の象形字です。音はコ。これも、家の意味に使われる字です。

房は、傍（かたわら）の意味の方（ほう）と戸との会意形声字で、表座敷の傍に付随している部屋のことです。普通、東西にあって、「東房」「西房」と言います。〝わきべや〟が本義の字です。戸は、〝へや〟の意味を表わしています。「暖房」「冷房」などと使われます。へやは物を貯蔵しておく所であるというので、「子房」「乳房」などの使い方もあります。

肩は、開閉する意味を表わす戸と肉との会意字で、腕のつけ根の〝かた〟を表わしています。

扇は、開閉する意味を表わす戸と羽との会意字で、〝ひらひらさせて風をおこす羽〟、つまり〝お

うぎ〟を表わしたものです。昔は、鳥の羽で作りました。扇子、扇風機。

戻は、戻が本字です。〝犬が戸をくぐり抜けて出入する〟という意味の字で、〝乱暴〟または〝無理〟をすることを表わしています。暴戻、曲戻。〝道にもとる〟ことです。今では〝家にもどる〟という使い方をしています。この意味は、わが国だけのものです。

所は、斧の象形であり、本字である斤と戸との形声字で、〝斤で木を切る〟のが本義の字です。戸は、木を切る時のコンコンという音を表わしたものです。この字は古くから、〝処〟の仮借字として〝ところ〟の意味に使われています。名所、住所。

雇は、鳥の意味の隹と戸との会意形声字で、〝家に飼われている鳥〟が本義の字です。転じて、〝自分の家において養う〟という意味から、〝人をやとう〟という意味になりました。雇傭（用）、解雇。

道具に関する部首

弓は、弓の形を象った象形字です。音はキュウです。

引は、引き伸ばす意味の一と弓との会意字で、〝弓をひく〟のが本義です。また、弓と矢を並べたものと見てもよいと思います。転じて、広く〝ひく〟意味に用います。音はイン。引力、延引、引退。



弔は、古い形は弓と亻とでできており、弓と人の会意字です。昔は死体を葬ると、鳥や、獣が荒らしに来ました。そこで死者を弔う人は弓を持ってこれを追い払いました。人は弓を持って〝とむらう〟のです。

弦は、糸の意味の玄と弓との会意形声字で、〝弓に張る糸〟つまり〝つる〟のことです。楽器に張るのは「絃」ですが、今では、弦で兼用させています。弦月（半月）、管弦楽。

張は、脹れる意味の長と弓との会意形声字で、〝弓をいっぱいに引く〟のが本義の字です。転じて、弓や琴に弦をかけることを〝張る〟とも言います。拡張、誇張。

弾は、弦のはじく音を表わす単と弓の形声字で、〝弦をはじく〟ことを表わしています。また、単は丸と同じ韻なので、弓と丸との会意字と見ることもできます。この場合は、石弓に用いる〝たま〟が本義です。今では、前者の意味の「弾力」「弾琴」、後者の意味の「弾丸」「砲弾」、どちらもよく使

われています。昔の砲は石弓で、砲弾は石でした。

弧は、半月のように曲がった形の弓と瓜との会意形声字で、音は瓜の変化したコです。数学で、円周の一部を弧と言いますが、そのような形を表わす字です。「弧形」は、言葉としては「瓜形（うり形）」の意味で、文字として「弓形」の意味を加えたのです。

弘は、肱の象形のムと弓との会意形声字で、〝弓をカいっぱい引っ張る〟ことを表わした字です。弓の〝ひろくはる〟のが本義で、〝ひろまる〟〝ひろめる〟の意味に使われています。漢音はコウ、呉音はグです。弘道、弘布、弘通。

強は、弘と虫との形声字で、弘と呼ぶ虫の名が本義の字です。音は弘がなまって、キョウ。古くから同音の「彊」の仮借字として〝つよい〟という意味に用いられています。

彊は、〝つよい弓〟が本義の字で、広く〝つよい〟という意味に用いられ、転じて、〝労力〟の意味にも使われていましたが、同音の「強」が代用されるようになって、あまり使われなくなりました。自彊やまず。

矢は、弓に使う矢の象形字です。矢は、昔は最も速いものだったので、部首としては〝はやい〟という意味によく使われます。光陰矢のごとし。

知は、矢のように速く、言葉が口から出てくる、という意味で、矢と口の会意形声字です。音は矢がなまったチです。速く言えるということは、何でもよく知っているからである、というので、〝しる〟という意味を表わしました。

短は、小さい意味の豆と矢との会意形声字で、〝小さい矢〟、つまり〝みじかい〟という意味を表わしたものです。音は豆が変化してタンです。短気、短所。

矯は、先の曲がっている意味の喬と矢の会意形声字で、〝曲がった矢をためる〟という意味の字です。矯正。

医は、箱の意味の匸と矢との会意字で、〝矢を入れる器具（ゆぎ）〟が本義の字です。今では醫の意味に使われています。

醫は、医と殳と酉の会意字です。酉は薬用酒。薬を用いて病気を退治する、という意味の字です。医も殳も武器で、病気を退治するという意味を表わしています。

刀は、〝かたな〟の形を象った象形字です。片刃の彎曲したものです。音はトウ。

刃は、刀の切るところ、つまり〝は〟を示した指事字です。音は、漢音ジン、呉音ニン。白刃（はくじん）、刃傷（にんしょう）。

分は、刀で物を二つに切り離した形を表わした、刀と八との会意字です。〝わける〟こと。転じて、〝わかれる〟こと。分配、分裂。また、「身分」「気分」という使い方もあります。

切は、切り落とす時の音を表わす七と刀との形声字で、〝刀で物をきる〟ことを表わした字です。音は七（シツ）が変化してセツ、呉音はサイ。切断（せつだん）、一切（いっさい）。

刈は、草をかる意味の乂と刀との会意形声字です。苅は俗字です。

刊は、突き刺す意味の干（かん）と刀との会意形声字です。昔、版木に文字をほりきざんで印刷したので、〝書物を出版する〟ことを刊という字で表わしました。刊行、月刊。

刑は、开（けい）と刀との形声字で、〝斬刑〟の意味の字です。开という発音の言葉には、「形」「型」があり、〝きちんと整ったタイプ〟を意味しているようです。従って、刑は、〝法に照らして処断する〟という意味がその発音から汲み取れます。刑法、刑罰。

初は、衣と刀との会意字です。衣類は、布を刀で裁断することから始まるので、〝はじめ〟の意味を衣と刀とで表しました。最初、初期。

別は、冎の変形した另と刀との会意字で、〝骨から肉を切り離す〟という意味の字で、〝わける〟が本義の字です（160頁、列と同義）。今では、〝人とわかれる〟意味に使われます。区別、別離。また「別宅」「別状」などの使い方もあります。

刺は、〝とげ（𠂢）のある木〟の意味の朿（し）と刀との表意形声字です。〝とげでさすように刀でさす〟という意味で、〝さす〟ことを表わしました。セキという音もあります。

剛は、綱（こう）のもつ〝大きい〟〝太い〟などの意味の岡（こう）と刀との会意形声字で、〝大きくてがっしりとした刀〟という意味の字です。転じて〝つよい〟〝かたい〟などの意味に用いられます。剛勇、剛胆。

剤は、調える意味の斉と刀との会意形声字です。医者のことを「刀圭家」と言いますが、薬を調合するさじを〝刀圭〟というのです。つまり、〝さじで薬を調合する〟ことが剤の本義で、今は、〝調合された薬〟の意味に用いられています。調剤、薬剤、強心剤。

割は、傷つけそこなう意味の害（ガイ）と刀との公立形声字です。〝刀で傷つける〟という意味の字で、〝さく〟〝わかつ〟こと。割譲、分割。音は害がつまってカツ。

剰は、〝切っては上へ上へと乗せる〟意味の字で、物の豊富にあることを表わした、乗（じょう）と刀との会意形声字です。〝あまる〟という意味に使われます。余剰、過剰。

前は、古体はです。〝岸につないである舟のともづなを切る〟という意味の字で、〝舟の前進すること〟を表わした字です。舟月の月と、止める意味の⺌と刂との会意字です。

到は、いたる意味の至と刀（とう）との会意形声字で、〝刀が相手の体に至る〟という意味で、〝とどく〟ことを表わした字です。到着、到達、用意周到。

制は、朱と同じく木の象形であると刂との会意字で、〝木を切って物を作る〟という意味の字。音はセイ。〝たちきる〟〝つくる〟が本義です。制裁、制作。「制限」「制御」は「掣」の意味の仮借です。

掣は、〝制作しているのを手でおさえる〟ことを表わした字で、制と手との会意形声字です。掣肘、牽掣。

刷は、人の意味の尸と布と刀の会意字で、〝人が布と刀とを持って仕事をする〟ことを表わした字です。汚れた所をふき、落ちない所は削り、〝きれいにする〟ことが本義です。刷新。転じて〝こする〟意味。刷子（さっし）（ぶらし）、刷毛（はけ）。「印刷」も〝こする〟意味です。

券は、古体がで、二つに分けて、それぞれに所持する〝わりふ〟を表わした字です。相互の約束として取りかわすものの名称に使われます。証券、株券、乗車券。

刻は、草の根の象形である亥と刀との会意字で、薬草の根を〝きざむ〟ことを表わした字です。「彫刻」「時刻」の意味から転じて、「深刻」「苛刻（酷）」とも使われます。

戈は、いくさ道具の〝ほこ〟を象った象形字で、武器の総称として用いられ、また、〝戦争〟の意味にも使われます。「干戈」は、武器の総称であり、また戦争という意味でもあります。

武は、戈と止との会意字です。〝戦争を防止するもの〟という意味の字です。つまり、武とは、相手を倒すためのものではなくて、相手の侵略を未然に防ぐためのものだということです。核兵器も、使うためのものではないという、武の本義をぜひ銘記してもらいたいものです。

戦は、単（せん）と戈との形声字で、〝武器をもってたたかう〟という意味の字です。戦争は恐ろしいものですから、〝恐れおののく〟という意味にも使われます。戦々兢々。

戯は、猛獣を意味する虞の略字の虍と戈との会意字で、〝武器をもって猛獣をあやつる〟という意味の字です。〝猛獣つかいの芝居〟が本義で、〝たわむれる〟意味に使われます。戯曲、演戯、遊戯。

戌は、人と戈との会意字で、〝武器を持つ人〟が本義です。転じて、〝まもる〟意味になります。戌卒、衛戌。昔、陸軍病院のことを衛戌病院と言いました。

成は、戈と同じ意味の戊と丁との会意形声字です。丁は、釘の象形で、テイの音は、釘を打つ音を表わしたものです。成は、〝武器を揮って侵略者を平らげる〟こと。成功。転じて〝なしとげる〟という意味。音は丁（テイ）が変化してセイ。呉音はジョウ。成就（じょうじゅ）。

我は、古体は<s>𠦂</s>で、先が三つに分かれたほこの象形です。〝われ〟の用法は仮借。〝わが身を守るもの〟であるから、転じて〝われ〟を表わしたとする説もあります。

舟は、舟の形を象った象形字ですが、今の字形は、たてになっています。音はシュウ。

船は、沿の意味の㕣（えん）と舟（しゅう）との会意形声字です。〝流れに沿って下る舟〟という意味の字です。昔、函谷関以東では、流れがゆるやかで上り下りできたので、舟と呼び、函谷関以西では急流のため、下りにしか使えなかったので、船と呼んだと言います。音は舟 syu と㕣 en とで sen になりました。

艇は、梃（丸木）の意味の廷（てい）と舟との会意形声字で、〝丸木舟〟という意味の字です。転じて、〝細長い形の小舟〟を言います。短艇（ボート）、潜水艇。「艦」「舶」「航」「艙」は、それぞれ第2章の旁の項で説明しておきました。

車は、二輪車の形を象った象形字です。音はシャです。

輛は、二つの意味の両（りょう）と車との会意形声字です。車は車輪が二つあって一台だということで、〝車一台〟を表わした字です。また、車を数える時に「一輛、二輛」と言います。今では扁を省いて「両」で代用しています。

軒は、ふせぐ意味の干（かん）と車との会意形声字です。〝戦車〟が本義の字です。「戎軒」（戦車）。矢を防ぐように覆いが設けられていて、転じて〝覆い〟の意味になり、〝家ののき〟の意味に使われるようになりました。太夫以上の身分の者の乗る車を軒と言うのは、日光や雨風を防ぐ〝覆い〟のある車という意味です。



軟は、欠（かん）と車の形声字で、車の振動をやわらげるため、車輪に蒲をまきつけた車のことです。転じて、物の〝やわらかい〟ことを表わすのに使われます。軟骨。

軸は、車のじく（由）の象形である由と車との会意字です。〝車の心棒〟です。転じて「筆の軸」「マッチの軸」「掛軸」なども使われます。音は柚（ジク）。

由は、で、果物と木とを結ぶ部分を表わした字です。これによって木から栄養を受けて成熟するので、〝たよる〟〝よる〟という意味を表わしました。由来、理由。漢音はコウ、呉音はユ。

転は、轉が本字。回る意味の旋（せん）の仮借である專（せん）と車との形声字で、〝車の回る〟ことを表わした字です。転じて、〝場所が移る〟意味に使われます。回転、移転、転任。

較は、組み合わせる意味の交（こう）と車との会意形声字です。車の乗る所に、つかまえるために設けられた横木のことです。左右にあることから〝比べる〟という意味に使われるようになりました。音は交（コウ）、またはカク。較著（こうちょ）、比較（ひかく）。

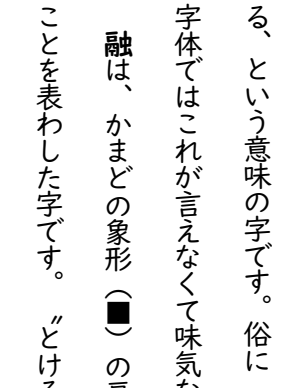
軍は、古体の車が示す通り、戦車を中心に兵が行動するのが、軍の常だったので、車を囲む形で、軍隊を表わしました。

軌は、車と九（く）との形声字で〝車輪の通ったあと〟〝わだち〟のことです。このわだちの間隔がいつもきちんと正しいところから、「軌範」という使い方が生よれました。音は九（ク）が変化してキとなります。

「軌」は、同音同義の字です。

轄は、車と害（かい）との形声字で、車輪が軸からはずれて災害を起こさないように、車軸にはめ込む〝くさび〟が本義の字です。転じて、広く、〝災害を起こさぬよう取り締まる〟ことに使います。統轄、管轄。

動物に関する部首



虫は、〝まむし〟（蛇）の象形字です。蟲は、三つの虫の会意字で、虫類の総称です。今の〝虫〟はこの蟲の 代用字です。音は 中（チュウ）。

蚊は、文文（ぶんぶん）という羽音を表わす文と虫との形声字です。蚊帳（ぶんちょう）（かや）。

蛔は、〝腹の中を回り歩く虫〟という意味の会意形声字です。蛔虫（かいちゅう）。

螢は、あかりの意味の𤇾と虫との会意形声字で、〝あかりをともす〟ほたるのことです。蛍光燈、蛍雪の功。

蟻は、正義の意味の義（ぎ）と虫との会意形声字で、〝秩序整然たる団体生活を営む虫〟〝あり〟を表わした字です。「蟻集」は、ありのように密集すること。

蚕は、蠶が本字。潜（ひそ）む意味の朁（せん）と虫との会意形声字で、〝繭の中に潜む虫〟〝かいこ〟を表わしたものです。蚕はその略字です。天（テン）は潜（セン）のなまりです。また、人間の生活に役立つ絹を与えてくれる〝天の虫〟の意味にとることもできます。

蛮は、蠻が本字。糸がもつれるように言葉が乱れる意味の絲（らん）と虫の会意形声字で、〝ががやがやとやかましく鳴く虫〟という意味の字です。南方の民族を蛮と言ったのは、彼らがおしゃべりでわからない言葉をやかましく話したところから名付けたものです。中国では、四方の異民族を「東夷西戎南蛮北狄」と言いました。わが国でもこれにならって、西欧人が南方からやって来ましたので、〝南蛮人〟と呼びました。また、〝未開人〟の意味に使います。野蛮。

恋は、戀が本字。糸がもつれたように、思慕の情が思うような言葉になって出ず、心が千々に乱れる、という意味の字です。俗に〝いと（糸）し、いとしと言う心〟と、しゃれて言いましたが、今の字体ではこれが言えなくて味気なくなりました。「変」も同じ構造の字です。

融は、かまどの象形（■）の鬲と虫との形声字で、音は 虫（チュウ）が変化したユウ。〝物を煮てとかす〟ことを表わした字です。〝とける〟。固形では通らないものも、液状になればするすると通るので、〝とおる〟意味にも使われます。融合、融通。

牛は、二本のつのを含む〝うし〟の頭部を象った象形字です。音はギュウ。

物は、牛と勿の形声字です。牛は家畜の中で最も大きく、庶民に取っては最も頼りになる財産なので、〝もの〟（万物）の代表になりました。植物、人物。「貨物（カモツ）」は呉音。

犇は、〝牛の群れ〟を表わした字です。わが国では、〝ひしめく〟という意味に使っています。

犠は、〝りっぱ〟という意味の義と牛との会意形字で、神に〝いけにえ〟として捧げる牛を表わした字です。犠牲。

牲は、〝りっぱ〟という意味の精（せい）の仮借である生（せい）と牛との形声字です。犠と合わせて用いられる字です。

特は、役所という意味の寺と牛との会意字で、〝役所に飼われている牛〟という意味の字で、〝いけにえの牛〟が本義です。特にりっぱな牛が選ばれるので、〝とくに〟という言い方が生まれました。犠牲という字ができてからは、特は本義には使われなくなりました。

犬は、いぬの全身を象った象形字です。音はケン。「犭」は、犬の変形で、「犬扁（いぬへん）」ですが、普通は「けもの扁」と呼ばれています。犬以外の動物をも表わしているからです。

狗は、せむしの象形の勹と犬と口との会意形声字で〝小さい犬〟を表わした字です。音はロ（漢音はコウ、呉音はク）。

「羊頭を掲げて狗肉（くにく）を売る」は、現代的に言うと、〝レッテルは牛だが中味は鯨の肉〟ということです。

狐は、コンコンという声を表わす瓜と犭との形声字で、〝きつね〟のことです。「狐媚」は、狐が人をだますように、上の人に巧みに取り入ることを言います。「虎の威を借る狐」。どうも狐は評判が良くありません。

狼は、良と犭との形声字で、〝おかかみ〟のことです。おおかみは恐ろしい動物なので、昔の人たちは「犬神様」と言ったり「大神（おおかみ）」と言って敬遠しました。良と呼ぶのも、これと同じで、敬遠して〝良い犬〟つまり狼と呼んだものと思われます。「狼藉（ろうぜき）」は、狼の寝たあとが乱雑なので、物事の取り乱した様を言います。

獄は、二匹の犬と言との会意字です。犬がたがいに吠え合うように、〝訴訟で、たがいに相手の非をそしりあう〟ことを表わした字です。〝訴え〟が本義で、転じて〝牢屋（ろうや）〟の意味に使われます。監

獄、地獄。

獣は、獣類の顔の象形である𠙵と、家畜の代表である犬との会意字で、〝けもの〟を表わした字です。音はジュウ。猛獣、怪獣、禽獣。

獲は、鳥を取る意味の蒦（かく）と犭の会意形声字で、〝猟犬を使って、えものを取る〟ことを表わした字です。捕獲、獲得。

献は、獻が本字。虎の飾りのある鬲（融の項参照）と犬との会意字で、〝犬を料理すること〟を表わした字。〝祖先のみたまやに物をそなえる〟ことが本義です。奉献、献納。また、「献金（けんきん）」「献立（こんだて）」という使い方が生まれました。

然は、肉の意味の夕と犬と火の会意字です。〝犬の肉を火でやく〟という意味の字です。「燃」（もやす）の本字ですが、後に、「偶然、漠然、索然、悠然」という使い方が生まれたため、本来の意味を表わすのに、さらに火を加えて燃としました。音は、漢音がゼン、呉音がネンです。

狩は、守る意味の守と犭との会意形声字です。冬の農閑期、草木の枯れた季節に、原野に火を放って行なう〝かり〟を狩と言います。国土を守るための仕事なので狩と言うのです。春のかりは蒐、夏は苗、秋は猟。

猟は、獵が本字です。獵（リョウ）と犭との形声字で、〝犬を使って鳥獣を追い捕える〟ことを表わした字です。狩猟、猟師。

猛は、孟（もう）と犭との形声字で、〝強い犬〟を表わした字です。転じて、〝強い〟〝たけだけしい〟という意味に使います。猛獣。

独は、本字が獨。蜀（しょく）と犭との形声字。犬は接触するとすぐけんかをするので、一匹ずつ離しておきます。それで〝ひとり〟の意味を表わしました。単独、独唱。

状は、本字が狀。爿（しょう）と犬との形声字。爿は像（しょう）の仮借で、〝犬のすがた〟が状の本義です。転じて、広く、〝姿〟〝形〟〝有様〟の意味になりました。

狂は、草が乱雑に茂る意味の王（おう）と犭の会意形声字で、〝狂犬〟が本義の字です。転じて、〝気ちがい〟の意味になりました。音は犬（ken）と王（o）でキョウ（kyo）。狂乱、狂暴。

犯は、氾濫の意味の㔾と犭との形声字で、〝犬があばれ回って人に害を与えること〟を表わしています。転じて、人が目上に背いたり、法を犯す意味に使います。侵犯、犯逆、犯罪。

豕は、いのししやぶたの形を象った象形字です。音はシ。

家は、家(いえ)の意味の宀と豕との会意字です。豚は早くから、家畜として、多くの家で飼育されていたことが、この字の成り立ちから知ることができます。

豚は、いのししの意味の豕と肉との会意字です。ぶたが、いのししの家畜として変化したものであることを表わした字です。



象は、で、長い鼻のぞうの形を象った象形字です。音はゾウ。ゾウの意義は、「想像」の意味です。中国には象がいないので、話として伝え聞き、あるいは絵により〝想像〟し、心にその形をえがいていました。

像は、人と象との会意字です。中国では象を実際に見ることはできません。心に想像するだけです。だから、〝心にえがく形〟を、人と象とで代表させたわけです。

豪は、高の意味の亠と豕との会意形声字です。長い毛を高くそばだてる〝山あらし〟を表わした字です。この針のような毛には猛獣も恐れるというので、〝強い〟意味を表わします。豪勇、強豪、豪傑。



羊は、二本のつの、長いひげなどの特長をよく象った象形字です。音はヨウ。家畜の中でも、羊は最も優美で、性質も温和なので、「美」「善」などを表わすのに用いられています。

美は、羊と大との会意字で、美しい動物だが、とりわけ、肥えて大きな羊は見事なので、〝大きい羊〟で〝うつくしい〟という意味を表わしました。美女、美辞、美談。

善は、古体はです。〝りっぱな問答〟という意味の字です。転じて、問答に限らず、広く〝りっぱなこと〟の意味に使われます。最善、善良、善行。

義は、〝我を美しくする〟という意味の、羊と我との会意字です。つまり、りっぱな人間として必要な資質に対して与えた〝徳目〟です。孟子は「仁義あるのみ」と言いました。この道を実行できる人間が、最高の人間だと言うのです。音はギですが、これは〝よろしい〟という意味の宜(ギ)と同じ言葉です。

群は、〝羊の君〟で、〝羊のボス〟という意味の字です。羊はむれをなしていますが、そのボスが群です。転じて、〝むれ〟の意味になりました。群羊、群衆、群雄。

羚は、りっぱな意味の令と羊の会意形声字です。羊に似て、羊よりも大きく、姿や毛並みの美しい〝かもしか〟を表わした字です。

着は、羊の部首の字ではありません。著が変化した形です。著は、第2章の者の項で説明しました。

鳥は、長い尾のとりの形、隹は、短い尾のとりの形を象った象形字です。しかし、部首としては、鳥も隹も同じく、一般的な〝とり〟の意味に使われています。

鳩は、クークーと鳴く音を表わした九と鳥との形声字で、〝クークーと鳴く鳥〟つまり〝はと〟を表わしています。呉音はク、漢音はキュウ。鳩首（首を集める→相談すること）。

鳴は、鳥と口との会意字で、〝鳥のなく〟ことを表わした字です。音はメイ。転じて、〝なる〟〝ならす〟意味にも使います。共鳴、雷鳴、鳴弦。

鵞は、ガーガーという鳴き声を表わした我と鳥との形声字で、〝鵞鳥〟のことです。

鶏は、コケッコウという鳴き声を表わした奚と鳥との形声字で、〝にわとり〟のことです。「鶏口となるも、牛後となるなかれ」「鶏鳴狗盗」などの故事があります。

鶴は、カッカッという鳴き声を表わした隺と鳥との形声字で、〝つる〟のことです。「鶴首」は、首を長くして待ち望むことです。

雀は、〝小さい隹〟という意味の字で、〝すずめ〟のことです。「雀躍」は小踊りして喜ぶことです。燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや（小人に大人の心がわかるものか）。門前雀羅（訪れる人がいないので雀取りの網が張れるほどだ）。

雄は、宏の意味する広の厷と隹との会意形声字です。体の大きくてりっぱな〝おんどり〟を表わした字です。転じて「雄大」「雄壮」などの意味に用います。また「英雄」の音は厷が変化してユウになりました。

雌は、同音の妻（㊟サイ）の仮借である此と隹とで、〝妻鳥〟と呼んだものです。〝めんどり〟が本義で、広く生き物の〝めす〟の意味に用いられます。

雑は、雑が本字です。𠂤は衣の変化した形で、この字は古くは褋でした。これがずれて雑となったものです。〝いろいろ布を集めて作った衣類〟という意味の集と衣との会意形声字です。音は集が変化したゾウ。ザツは慣用音です。雑言、雑草。

集は、𩫖が本字です。木の上に鳥が〝あつまっている〟という意味の会意字です。音は聚（シュウ）です。

雅は、カアカアという鳴き声を表わした牙（か）と隹との形声字で、〝からす〟を表わした字です。からすは〝反哺〟と言って、餌を取ることができなくなった親鳥に餌を口移しに食べさせる孝鳥だと言われています。その親子の情愛が〝正しく〟〝ゆかしい〟というので、〝正しい〟〝ゆかしい〟という意味に用いられるようになり、からすは「鴉」と書き分けるようになりました。典雅、優雅、雅量。

離は、美しいという意味の麗と同音の离（り）と隹との形声字で、鶯の一種である麗（り）と呼ぶ鳥の名が本義です。人里離れた島に住むので〝はなれる〟意味に用いられるようになりました。



隻は、又（手）と隹との会意字で、〝鳥を一羽手に入れた〟という意味の字です。〝一羽の鳥〟が本義です。二羽の鳥は「雙」（今は略して双）と言います。隻手（片手）、隻眼。転じて、水鳥になぞらえて、舟を「一隻」「二隻」と数えるようになりました。

奪は、大と隹と寸（手）の会意字です。奮は〝大鳥〟の意味ではなくて、鳥が翼を大きく広げる意味の字です。手に入れた鳥が羽ばたいて逃げるのが奪の本義です。音は「脱（だつ）」で、本来は脱と同音同義の字です。今は〝うばう〟の意味に用います。奪回、強奪。

奮は、大と隹と田の会意字で〝鳥が田んぼから羽ばたいて飛び上がる〟意味の字です。飛び立つ時の勢いの盛んな有縁から、〝ふるいたつ〟意味を表わしました。奮起、発奮、興奮。

馬は、馬の全身を横から象った象形字です。漢音はバ、呉音はマです。国語の〝うま〟は、呉音のマを〝（う）ま〟と発音したもので、純粋の日本語ではありません。〝ん〟を〝（う）ん〟と発音するのと同じです。馬については、「馬耳東風」（馬の耳に念仏）「馬脚を現わす」「馬鹿」などの故事が

あります。

駄は駄が本字。〝人を乗せて運ぶ馬〟を表わした、人の意味の大と馬との会意字です。転じて、〝荷物を運ぶ馬〟「駄馬」の意味になり、さらに転じて〝荷物〟その物を言うようになりました。荷駄（にだ）、駄賃。また「駄馬」は、〝下等な馬〟の意味に転じ、「駄句」「駄洒落」などの使い方が生まれました。

駒は、狗と同じく、〝小さい〟意味の句と馬との会意形声字です。〝若い小馬〟を言います。〝こま〟と言うのは、〝小馬（こま）〟または〝子馬〟という意味です。わが国では、広く〝馬〟の意味に使われています。また、「将棋の駒」とも使われます。

駢は、並ぶ意味の并（へい）と馬との会意形声字で、〝二頭立ての馬車〟のことです。漢文で、四字句と六字句とをうまく並べた名調子の文を「駢儷文（べんれい）」と言います。

駟は、〝四頭立ての馬車〟です。「駟馬にむちうつ」とは、高位高官にのぼり、得意な様を言います。「駟も舌に及ばず」は、言葉を慎重にせよ、という教訓です。

驚は、つつしむ意味の敬と馬との会意形声字で、〝馬が暴れないようにしっかりと手綱をおさえる〟という意味の字です。馬はからだの大きいのに似合わず、驚きやすいので、〝おどろく〟意味に使われます。〝おどろく〟の本字は「駭（ガイ）」です。驚は、漢音はケイ、呉音はキョウです。驚天動地。

騒は、蚤（そう）（のみ）と馬との会意形声字で蚤のために、馬が体を木にこすりつけたり、体をぴくぴく動かしたりして〝さわぐ〟ことを表わした字です。〝動く〟〝さわぐ〟が本義。騒動、騒々しい。「噪」と同音同義。

蚤は、蚤が本字。叉は、爪（つめ）を表わした指事字で、かゆい所をかく意味を表わしています。蚤は、〝人をかゆくさせる虫〟という意味の字です。「掻」は、〝かく〟という意味の字です。

貝は、二枚目を正面からみた形を象った象形字です。海から離れた昔の中国では、貝の装飾品は手に入れがたい貴重品でした。美しく磨いた貝は宝石に匹敵する価値がありましたので、部首としては〝財貨〟の意味に使われます。また物々交換をする時代では、軽くて小さい貝は貨幣的な存在でした。音はパイ。

「責」「貨」「賞」「貨」「購」「賠」など、すでに第2章に出て来た字がかなりあります。

貯は、貝と宁との会意形声字です。壮丁、丁年の丁は成熟の意味の字で、家に物の充実することが

宁です。〝家にお金を充実させること〟が貯です。今は広く、〝物をたくわえる〟という意味に使います。貯水。

財は、貝と才との会意形声字です。才は木が根をわずかに張り始めた形を表わした字で〝わずか〟〝始め〟という意味の字です。これから生長してどんな大木になるかわかりませんので、〝将来に発展する能力を秘めた素質〟という意味に使われます。財は、いろいろな能力を発揮させ成功させる働きを秘めたものであるから〝才〟というのです。財貨、資財。

貴は、虫と貝との会意形声字です。虫は臾の変形したもので、人が両手を左右に広げた形です。貴は、両手を広げたほども財貨を持っている、という意味の字で、〝身分の高い人〟を表わした字です。貴族、貴重、貴賤。

資は、次と貝の会意形声字です。〝命の次に大切なお金〟という意味の字です。財の所で述べたように、仕事の〝もとで〟にするものなので、「資本」「資金」などと使います。

買は、罒と貝との会意形声字です。罒は円で、網の本字です。網で鳥を一度にたくさん取るように物をごっそりと手に入れることを意味しています。〝お金と交換に物をごっそりと手に入れる〟つまり〝かう〟ことです。

販は、〝物を買い入れて反対にそれを売る〟という意味の字で、貝と反との会意形声字です。〝買い入れた物を売る〟ことですから、あきないとして、〝物を売る〟ことです。販売、販路。

賛は、贊が本字です。兟は〝進める〟という意味の字で、訪問時の〝進物〟が本義の字です。受け取った者は、開いて見て〝ほめる〟のが礼なので、〝ほめる〟意味になりました。賛美、賛嘆、書画のすみに「賛詞」を書いたものを「賛」と言います。「自画自賛」は〝身ぼめ〟〝手前みそ〟の意味によく使われる言葉です。音は兟が変化してサン。

讃は、〝賛めて言う〟という意味の、賛と言との会意形声字です。賛と全く同じに使いますので、当用漢字からはずされました。

賀は、お祝いの言葉を述べた上に財貨を贈るという意味で、加と貝との会意形声字。〝言葉に加えるに財貨〟で、相手に祝意を表するのが賀ですが、今は単に「賀詞」を述べるだけでも賀です。祝賀、年賀。

加は、力の不足を言葉で補う意味の字で力に口を〝くわえる〟ことです。

賃は、〝人としての努め（任）に対して支払われるお金〟という意味の字で、任（にん）と貝との会意形声字です。音は任が変化してチンになりました。労働者が、その労働の報酬として受ける金銭を「賃金」と言うのは本義に適っています。運賃、家賃、駄賃。

任は、壬と人との会意形声字です。壬は〝つ〟で、人のおなかに胎児のいる事を表わした指事字で、音は人（漢音はジン、呉音はニン）。妊の本字です。壬（妊娠）は、婦人の〝人としての務め〟ですから、人と壬とで〝つとめ〟と云う意味を表わすことができます。任務、責任。また、妊娠は、婦人だけに〝まかせられた〟ものですから、〝任（まか）せる〟という意味にも使われます。委任、任意。

則は、〝貝に刀で傷をつけてしるしとする〟という意味の会意字です。〝しるし〟が本義で、それは〝標準〟とするものですから、「法則」「規則」という用法が生まれました。

賊は、**賦**が変化したもので、則（そく）と戈との会意形声字です。〝標準、法則を傷つけ破る〟という意味の字です。〝国を乱す者〟が本義で「乱臣賊子」という使い方が本義です。転じて人を殺したり、物を盗んだりする無法者をも言うようになりました。

貧は、分（ふん）と貝との会意形声字で、〝財産を分割する〟という意味の字です。お金が乏しくなるので、〝まずしい〟ことになります。「貧乏」「貧困」。音は分が変化してヒン。また「貧血」「貧弱」というようにも使われます。

費は、払うという意味の弗（ひ）と貝との会意形声字で、〝お金を支払う〟という意味の字です。〝ついやす〟こと。費用、消費、旅費。

貢は、工（こう）と貝との会意形声字です。工は工芸品、貝は土地の産物を意味します。〝地方の工芸品や産物を朝廷に奉献すること〟を貢と言います。朝貢、貢物（みつぎもの）。「貢献」は、世のためになる仕事をすることを言います。

貞は、卜（うらない）と鼎（テイ）の形声字で、〝国運をうらなう〟のが本義の字です。鼎と貝と、古体では形が似ているので、誤って貝になったものでしょう。昔は、大事を決する時は、亀の甲を焼いて、そのさけめによって判断しました。これを亀卜（きぼく）と言います。天下を安定させる大切な行事なので、貞が定（さだまる）または正（ただしい）の意味に使われるようになりました。

負は、人の意味の𠂉と貝との会意字で、〝人が財産を頼みに、気負っている〟ことを表わした字です。〝たのみにする〟〝気負う〟が本義の字で、転じて、〝背負う〟、さらに転じて〝背を見せる〟

（まける）意味にも使われるようになりました。自負、負担、勝負。

貫は、貝をひもで通した形の毌（かん）と貝との会意形声字で、〝つらぬき通す〟または〝金銭〟の意味に使われます。貫通、銭貫。また、金銭の単位名、重さの単位名にもなりました。

貿は、卯（ぼう）と貝との会意形声字です。卯は⇳で、物を均等に分けた形です。二つの物の価値がひとしいことを意味する部首です。貿は、お互いが持つ品物を、価値が等しいように交換しあうことを意味した字です。〝物々交換〟が本義です。今では外国と品物の売買することを「貿易」と言います。

賓は、字形が客と同じ意味の宀（ひん）（ヒンは臨の意味の言葉）と貝との 会意形声字。少は攵と同じく、〝足〟の意味の部首（足の項参照）です。どちらも、〝家（宀）に訪れ来る（足）人〟を表わしています。〝贈り物を持って訪れる客〟が賓です。一般には、身分の高い場合は賓、身分の低いのを客、と使い分けているようです。賓客、主賓。

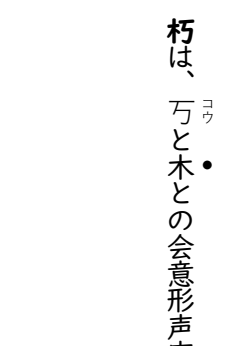
賢は、堅の意味の臤（けん）と貝との会意形声字です。貝は、財産ばかりでなく、地位の尊貴なことをも意味します。〝財産や地位を堅く守る人〟という意味の字です。転じて、広く才知徳行にすぐれた人を言うようになりました。賢明、聖賢。



賦は、音は付（フ）です。役所から納付するように割り付けられた財物を〝納付〟することを表わした言葉です。軍役に徴発されることをも含めて賦という字になったのかと思われます。つまり、国民としての二つの義務（軍役と租税）を表わす武と貝との会意字と見ることができます。音は、納付の付によったものと考えられます。「月賦」は、月々に代金を取り立てる所から生まれた名称です。

頼は、賴が本字です。刺（ラツ）と貝との会意形声字です。刺は、束を刀で切りほどくことです。束は、木を保存することを意味し、刺は、それを消費することを意味します。賴は、貯えておいた金を消費することを意味しています。財貨の威力を〝たのみ〟にして、どんどんと使うことで、〝たよりにする〟〝たのむ〟という意味に使われます。依頼、信頼。

植物に関する部首



木は、立ち木の象形です。紙のまだなかった時代は、木の札に字を書き、金属の道具のなかった時代には、木を使いました。だから記録に関係するものや、機械などを表わすのにこの〝木〟を使っています。

本は、木の根に当たる部分にしるしを付けて、根を示した指事字です。木。これと反対に、木の〝すえ〟を表わしたのが「末（木）」という字です。本の音は、根の変化したものです。

札は、木と乙との形声字で、〝木のふだ〟のことです。これに字を書いてひもでとじたものが冊です。冊は、その形を使った象形字です。冊がサツと読まれるのは、札に影響されたためでしょう。「お金の札」「検札」（切符）「表札」など、材料が紙でも、金属でも関係なく使われています。

机は、几が本字。古字は冂で、つくえの象形字です。後に、材料の木を加えました。音はキ。机上の論。

朽は、丂と木との会意形声字。丂は、上がつかえて伸び悩んでいる形です。〝伸びなくなった木〟という意味で、〝くちる〟意味を表わしています。音は丂が変化してキュウ。宰我という人は昼寝をして、「朽木ほるべからず」（腐った木では彫刻しようがない）と孔子に叱られました。

枯は、古と木との会意形声字。木が古びて〝かれる〟という意味の字です。枯木死灰枯淡の趣き。

朱は、木で、木の中心部を示した指事字です。幹の中心部の〝あかい〟部分を示したものです。〝あか〟。朱にまじわれば赤くなる。

株は、朱と木との会意形声字。木を切ったあとの〝切りかぶ〟のことで、朱の部分が見えるからです。「守株」は、待ちぼうけの歌で知られた故事です。

材は、才と木との会意形声字。才は、木がわずかに根を張り始めた象形指事字。これからりっぱになる〝もと〟を表わした字です（財の項参照）。りっぱな道具や建物のもとである木が〝材〟です。材料、資材、人材。

条は、條が本字。幼と同音の攸と木との会意字で、〝小枝〟を表わした字。転じて、〝すじ〟の意味に使われます。条文、条例、条項。

杯は、不（𠙵）と木の形声字。木で作った〝さかずき〟のこと。「盃」とも書きます。玉杯、賜杯。

カップの意味にも使われています。天皇杯。

枚は、攵（手の攵の項参照）と木との会意字。むちか棒きれ程度の木のことを言う字です。転じて、それらを数える時の助数詞になりました。一枚、二枚。

枢は、区と木との会意字。品物や家畜を区分けして入れておく所が区です。この区から出し入れする時に開閉するしかけが枢です。重要な所だというので、「枢要」「中枢」などと使われています。

架は、〝木を加する〟という意味の字です。〝木をかけ渡す〟こと。架橋。転じて〝たな〟（棚）のこと。書架。「架空」は、とてもできないことですから、〝想像〟の意味に使います。

某は、甘と木の会意字で、〝おいしい実のなる木〟という意味の字です。音はボウ。〝うめ〟が本義ですが、今は〝なにがし〟（ある人）という意味になりました。某月某日。「うめ」は楳となりましたが、同音の毎（ボ）を用いて梅という字を作りました。

染は、木と水と九の会意字。昔は衣類をそめるのに、草や木の汁を煮て、色を煮出し、これに漬けました。何回もくり返さないと染まらないので、九と水とでこれを表わしたのです。

柔は、矛と木との会意字。〝つよい丈夫な木〟という意味が本義だと思います。柳の枝に吹き折れなしで、転じて〝しなやか〟〝やわらか〟の意味になったのでしょう。柔軟（じゅうなん）、柔和（しなやか）。

栄は、榮が本字です。火が明るく燃える意味の（虫の項の螢参照）と木との会意形声字で、音は（けい）がなまってエイ。〝花が燃えるように美しく咲く〟が本義です。転じて〝さかえる〟意味になりました。栄枯盛衰、栄華。

校は、人が足を交叉させる象形のの交（こう）と木との会意形声字で、〝人の手足を交叉させたまま動けないようにはめ込む木製の処刑道具〟のことです。〝手かせ、足かせ〟が本義です。鬨（コウ）と同音なので、古くから「学校」の意味に使われています。「校正」は、罪人を〝調べる〟意味の校です。

核は、根の象形の亥（かく）（刀の刻の項参照）と木との会意形声字で、〝草木の根〟が本義の字。大切な所という意味で、専ら〝大切な所〟の意味に使われます。また、根からさかのぼって〝種〟〝木の実〟の意味にも使われます。

案は、按（しらべる）の意味の安と木との会意形声字。調査の書類を書くのに用いる〝つくえ〟のこと。転じて、〝考え〟という意味に使います。立案、草案、案外。

械は、戒（かい）と木との会意形声字で、〝罪人を戒めるための責め道具〟のことです。〝かせ〟などと言

います。転じて〝しかけ〟ということで、機械。

機は、機微の意味の幾と木との会意形声字。その働きが微妙である〝しかけ〟を表わした字です。「機会」は効果に微妙な働きを持つ時期という意味です。機械類が昔はすべて木製品であったことを字がよく物語っています。

植は、直と木との会意形声字。木を直立させるという意味の字で、苗木を移し〝うえる〟ことを表わした字です。音は直の変化したショク。植樹、移植、植民。

棋は、其と木の形声字。将棋の〝こま〟のことです。囲碁は〝石〟なので「碁」です。

棒は、〝奉げ持つ木〟という意味の会意形声字で、音は奉です。〝手に持てる程度の大きさの丸太〟のことです。

棺は、〝死者の館〟という意味の官と木との会意形声字です。

極は、亟と木との会意形声字です。亟は𠂤で、狭い所に追いつめられ、今にもとらえられそうになって悲鳴をあげていることを表わした字です。〝進退きわまった状態〟を表わしていて、〝きわまる〟という意味の字です。極は、〝木の窮まる所〟という意味の字で、家屋の〝むな木〟が本義ですが、今は単に亟の意味に用います。北極、極端、終極。

概は、既（𣪊）と木との形声字で、米をますではかる時に使う棒（ますかき）のことです。高い所と低い所とがこの棒でならされるので、〝ならす〟意味になりました。概略。その結果は〝あらまし〟〝おおむね〟という意味になります。

楼は、樓が本字です。婁は、屢や數（数）の婁で、〝重なる〟意味の部首です。屋根の重なった、つまり平屋ではない〝高層のたかどの〟を言います。楼閣、楼台。

様は、羕と木との形声字で、〝とちの木〟が本義の字です。〝ありさま〟（様子）という使い方は橡の仮借です。橡は様の別字で、やはり〝とちの木〟のことです。

横は、黄と木との形声字で、〝門のよこ木〟のことです。転じて、広く〝よこ〟の意味に用いられるようになりました。「横道」は邪道ですから、〝悪い〟意味に用いられます。横着、横暴、横行。

標は、票と木との会意形声字。人目によくつく〝目じるしの木〟です。標柱、標識。

票は、𤇾で西と火の形声字で、火の燃え揚がる意味の字です。〝火花〟が本義で〝目じるし〟の意味になりました。「表」や「礼」や「券」の意味に使われます。

禾は、稲の穂がみのって垂れ下がっている形の象形字です。音はカ（xwa）。

和は、豊年で、〝稲が十分口にはいる〟という意味の字で、「平和」を表わす。衣食足りて礼節を知る。食足りて心が〝なごやかになる〟とはよく庶民の情を表わした字。音は禾（カ）がなまってワ（xwa）。

利は、禾と刀との会意字です。豊年だと思っても、取り入れ寸前で暴風のために収穫が零になることがあります。取り入れて初めて、「利益」がはっきりします。稲と鎌（かま）の意味の刀とで、これを表わしました。

種は、〝よくみのった重い禾（いね）〟という意味の会意形声字です。音は重がつまってシュ。収穫した稲の中から、最も大粒の重いものを選んで〝たね〟とします。

穫は、鳥を取る意味の蒦（かく）と禾との会意形声字で、〝禾（いね）を取ること〟です。動物を取るのは「獲」と言います。

秒は、細く小さい意味の少と禾との会意字で、針のような〝もみの先毛〟のことです。〝微細〟の意味に用いられます。角度や時間で、分の六十分の一、のことを言います。音は、少が変化してビョウ。

秋は、龜（しゅう）の略字の火と禾（いね）との会意形声字で、〝禾のみのる季節〟を表わした字です。音のシュウは、火の燃える音です。火は熟す意味を表わしたものと考えることもできましょう。

科は、米をはかる〝ます〟の象形の斗と禾（か）との会意形声字です。〝米の取れ高の多少を調べて、品質の等級をつける〟ことです。〝品定め〟。転じて、物事を〝分類〟し、〝秩序立てる〟意味に使います。学科、科目、科学。

秩は、窒と同音の失と禾との形声字で、〝収穫した禾を窒（穴倉）に納める〟という意味の字です。きちんと積まなければならないので、「秩序整然」という使い方が生まれました。

移は、禾（いね）と多（い）との形声字で、稲が豊かにみのって風にゆれ動く様を言うのが本義ですが、今では、「迻」（うつる）の仮借字として使われます。収穫が多くてひと所に収容できずに、新しい倉を作って、そこに〝うつす〟のだと解くこともできそうです。

程は、〝呈出する禾（いね）〟という意味の会意形声字です。法規によって、呈出すべき量が決められていますので、転じて〝分量〟、また〝きまり〟の意味になりました。行程、規程。

税は、〝分ける〟〝抜く〟の意味の兌と禾との会意字で、収穫物の中から、租税として、〝別に分

けておく禾〃という意味の字です。〃今では金で納めるので税金と言います。

穀は、殻と禾との会意形声字です。稲のもみ殻をかぶっているのが、穀です。また、稲に限らず、穀をかぶった作物を「穀物」、または「穀類」と言います。

穂は、〃天の恵みの禾〃という意味の字で、〃稲のほ〃を表わしたものです。会意字。音は〃稲穂が垂れる〃の垂です。

稿は、〃高くのびた稲のくき〃を表わした会意形声字です。〃わら〃のこと。長い茎は実を結ぶための〃下地〃です。それで、書物の〃下書き〃を「稿」と言うようになりました。〃わら〃の意味を表わすのに〃藁〃また〃藁〃という字を作りました。

米は、稲穂にもみが付いている形を象った象形字です。実際の米は、もみをついて、殻を取ったものです。肝芽や黒い薄皮の付いたのを玄米と言います。これは保存がききますので積み重ねておくので、粗と言うことは第2章の且で述べました。漢音ベイ、呉音マイ。

粉は、〃米を細かく分ける〃という意味の会意形声字で、〃こな〃のことです。

粋は、粋が本字。砕くという意味の卒と米との会意形声字で、〃米をよくついて白げた米〃のことです。「精」と同じ意味の字です。精粋、純粋。

粒は、立と米との形声字で、米の一つぶ一つぶのこと。転じて、「砂粒」「微粒子」などと使います。

粘は、黏が本字。霑（うるおう）の意味の占と黍との形声字で、〃うるおった黍〃の〃ねばる〃ことを表わしたものです。

粧は、妝と同じ〃よそおう〃という意味の庄と米との形声字で、〃米の粉でよそおいをする〃という意味の字です。昔は米を細かくすりつぶして、これを顔料としました。これが「白粉」（おしろい）です。

糧は、〃はかる〃意味の量と米との会意形声字。〃食料として必要なだけの量の米〃〃かて〃という意味の字です。

糖は、荳（もやし）の意味の唐と米との形声字です。米のもやしから、糖分である〃あめ〃を作ります。



竹は、竹の子の出始めた形を象った象形字です。音はチク。竹を薄く削って作ったふだは、木の札と共に記録に使われました。簡や策がこれです。

簡は、竹と間との形声字。音の間は、刊の意味です。竹を割って削り、干して、これに漆で書きました。〝竹ふだ〟が本義。転じて、〝書物〟また〝手紙〟さらに転じて、〝軽便〟（手がる）の意味に使われます。竹簡、簡策、書簡、簡単。

策は、竹と束（朿）との形声字。音は束がつまってサク。簡をひもでとじた冊を表わしたものです。〝簡に文字を書きつけたもの〟が策の本義です。転じて、〝はかりごと〟の意味に用いられます。策略、対策。

管は、竹と官との会意形声字。音の官は、串（貫く）の意味です。竹の節を貫いた〝くだ〟が管です。

範は、竹で作った型という意味の笵と車との会意形声字で、〝車の通る道〟〝軌道〟が本義の字です。転じて、〝人の行なうべき道徳〟〝手本〟。規範、模範。模は〝木型〟型は〝土型〟が本義です。

篤は、竹と馬の形声字。竹がトクに変化しました。〝馬がトコトコと歩く〟という意味の字で、〝ゆっくり歩く〟ことを表わした字です。転じて、〝慎重〟〝重厚〟の意味に使われます。懇篤、篤志（人情が厚い）、危篤（病気が重い）。

築は、筑と木の形声字。地がために、丸太で〝木づく〟こと。筑は、木でつく音を表わしたものです。転じて、〝家〟などを〝建てる〟意味に使います。建築、築港。

符は、竹と付との会意形声字。契約をする時、簡に文字を誌し、これを割って、相手に与（付）えた。これが符です。〝契約の後日のための証拠のしるし〟です。割符。

簿は、竹と薄との会意形声字。薄（ホ・ハク）は、すすきを編んで（縛るので、音は縛）作った〝すだれ〟のこと（わが国では薄を〝すすき〟と解し、〝すすき〟の意味に使っています）。簿は、竹簡を縛したもので、今の〝帳面〟に当たります。帳簿、名簿。

簀は、竹と責の形声字。責が変化してサク。わが国では、つづめて「す」、または「すの子」と呼

んでいます。〝竹を編んで作った敷物〟が本義ですが、今では、板を編んで作ったものを言います。

簾は、竹と廉（れん）との会意形声字。廉は、家の側面の外界と接する所です。ここに垂れ下げる〝竹のすだれ〟が簾です。〝すだれ〟は〝簀垂れ〟という意味です。「簾中」は、〝すだれの中の貴人〟、という意味で、〝大名の正妻〟の異称に用いられました。

箱は、竹と相との会意形声字。相は、〝助ける〟という意味の字ですが、助ける人あれば必ず助けられる人ありで、二人いなければなりません。「相互」「相対」「相思」というように使います。箱は、〝ふたのある箱〟のことです。上下相逢うはこです。

算は、竹と具の会意字。〝竹で作った計数用具〟のことです。〝算木〟、転じて〝数を数える〟こと。

艸は、草の生えている庭を象った象形字で、「草」の本字。草冠の原形です。音はソウ。

草は、早（そう）という音をつけ加えたもので、形声字です。〝粗末〟の意味に使われます。草屋、草案、草競馬。

芳は、あたり（四方）一面が草という意味の字で、〝草の香〟がただよっていることです。〝かんばしい〟こと。また、〝草の放つもの〟と考えることもできます。芳香。転じて敬称に用います。芳名、芳志。

葉は、艹と世と木の会意字です。世は、十を三つ組み合わせた字で、三十の意味です。人間は三十年を〝一世代〟とするというので、「世代」という意味になりました。葉は、草や木にたくさん（世）付いている〝は〟を表わしたものです。「笹」は、竹の葉で、〝ささ〟のことです。

芽は、艹と牙（が）（きば）との会意形声字。草木の〝め〟の出始めの形は牙の形をしているので、芽でこれを表わしたものです。発芽。

若は、艹と右の会意字。〝手で摘み取る草〟という意味の字で、〝わか草〟が本義です。音は、弱（ジャク）（わかい）です。若年（じゃくねん）（弱年）。

荘は、艹と壮（そう）との会意形声字。〝盛ん（壮）に草の茂ること〟が本義。転じて、いなかの別宅の意味に使います。別荘。

華は、艹と垂（𠦂）の会意字。花の美しく垂れた形を表わした字です。花の古字です。今は〝草の

お化け〟の花の方が多く用いられ、この字は、「華美」「華燭」「栄華」など、〝花やか〟の意味に用いられます。

菜は、艹と采（採の本字）との会意形声字。〝摘み採って食べる草〟という意味の字です。食用とする草の総称。〝な〟。野菜。

採は、扌と采との会意形声字。采は、爪と木の会意字で、〝木の葉や、木の実をもぎ取る〟こと。転じて「採領」「採地」などの用法ができたため、扌を加えるようになりました。採集、採用。

茂は、艹と戊との形声字。草のぼうぼうとしげること。音は戊、呉音はモ。繁茂、茂生。

荒は、艹と流との会意形声字。流は、川が氾濫して、地上の動植物を亡ぼすこと。そこに雑草が茂ったのが（荒）です。〝あれ地〟が本義。土地の〝あれる〟ことから転じて〝心のあらい〟こと。荒涼、荒廃。

苦は、艹と古との会意形声字。薬草は干してよく乾燥させて保存します。〝古い草〟とは薬草のことです。〝にがい〟が本義です。転じて〝くるしい〟意味に使います。苦手、苦笑、苦痛、音は古が変化してク。

英は、艹と央との会意形声字。〝草の中央〟という意味の字で、〝草花〟が本義。特に、房になって咲く花、〝はなぶさ〟の意味に使われます。今は、「英才」「英雄」などと使います。音は央が変化してエイ。

苗は、〝田に生ずる草〟という意味の会意字で、〝なえ〟のことです。音は、小さいという意味の秒。

荊は、艹と刑との会意形声字。人を責める刺（とげ）を持った〝いばら〟のこと。「荊妻」は、自分の妻を謙遜して言うことば。

荷は、艹と何との形声字で、蓮（はす）のこと。花は「蓮華」、葉は「荷葉」と言います。はすの葉は、物を包むのに使われ、〝包み〟の意味になりました。荷物、出荷。

落は、艹と洛の形声字。草の葉の枯れおちること。各は〝高い所から降下する〟のが本義の字。

葬は、二つの艹と死との会意字で、〝死体を草原にほうむる〟こと。音は喪。

蓄は、艹と畜との会意形声字。畜は田のすみに穴倉を掘って〝たくわえる〟こと。艹は穀物のこと。五穀をたくわえるのが蓄です。今は、広く「蓄財」「蓄電」と使います。

蒸は、艹と烝の会意形声字。烝は水を下から火で熱して、蒸気を立ち上らせること。〝むす〟こ

とです。音は昇です。蒸は、〝穀物などをむす〟こと。今は単に〝むす〟意味に使われています。蒸発、蒸気。烝気の方が本義に適った使い方ですが。

蔵は、臧が本字。臧と艹との会意形声字。臧は爿と臣と戈の会意形声字で、家来が武器を持って守る意味の字。〝家来〟〝よい〟〝おさめる〟の意味に使われます。蔵は、〝穀物などをおさめてしまう〟という意味の字です。物をしまう所の「倉」の音は、この蔵の意味です。

薄は、艹と溥（水が溢れひろがること）との会意形声字。〝雑草が一面に生い茂る〟が本義の字。〝やせた土地〟のこと。故に、〝とぼしい〟意味に使われます。薄学、薄情。薄が、雑草を編んで作った〝すだれ〟の意味に使われることは竹の項の〝簿〟で述べました。

薬は、苦いが飲めば病気がなおって楽になる〝薬草〟が本義で、艹と楽との会意形声字です。楽が変化してヤク。

薪は、艹と新との会意形声字です。新は辛と木と斤（斧）との会意形声字で、木を切って作った〝たき木〟が本義の字です。切り口の〝あたらしい〟ところから、「新旧」「革新」という使い方に転用されたため、本義の〝たき木〟を表わすために、たきつけに用いる草を加えて〝薪〟としたものです。

臥薪嘗胆。

薫は、艹と熏との会意形声字。熏は火の黒の項に述べてあるように、〝火を燃やしてくすぶる〟意味の字です。薫は、〝芳草をくゆらして、香気を発散させる〟ことです。人を善導することにも使います。薫風、薫陶。

藩は、艹と番との会意形声字。番は水面にできる〝うずまき〟のこと。藩は、家の周囲を取り巻く〝まがき〟が本義です。封建時代、諸侯は王室の「藩屏」（まがきやへい）であるというので、諸侯の称になりました。藩主。

天地自然に関する部首



日は、太陽の象形です。天候を左右し、昔から時刻の基準とされたので、気象、時間に関係する文字の部首となっています。音は、漢音がジツ、呉音がニチ。

旦は、地平線に太陽が現われた形で、〝あさ〟を表わした字で

す。今では、「元旦」以外にあまり使われないようですが、もっと使われてよい字だと思います。旦夕（朝夕）。

早は、旦と全く同じ着想の字で、〝朝はやい〟の意味を表わしています。十は艹の略形でソウの音を表わしています。この〝はやい〟は時期的な早さのことで、その反対は「晩」です。「早春」「晩春」。速さは、「速い」「遅い」と使います。

晩は、〝のがれる〟意味の免と日との会意形声字です。日がのがれ去る、とは〝日が沈む〟ことで、「早」に対する言葉です。〝おそい〟が本義の字です。時期的には〝夕ぐれ〟を言います。晩鐘、晩餐、晩年。

旬は、包（人の勹の項参照）の勹と日との会意字で、〝十日を一包みにする〟という意味の字です。昔は、十干十二支で日を表わしました。十干は十日で一巡しますので、十日を「巡」と言い、字形を旬で表わしたのです。

昇は、上の意味の升と日との会意形声字で、〝日が上る〟こと。昇天、昇進、昇降。

易は、𠂒で、とかげの象形。日の光を受けて色が変わるので、〝かわる〟という意味に使われます。貿易、交易。〝とかげ〟は虫を加えて「蜴」。



星は、古体は𣅀で、星の象形と生の形声字。今の形からは、〝太陽から生まれた惑星〟と考えることもできます。

映は、英の省略された央と日との会意形声字で、〝日の光に照りはえて物の姿が美しく見える〟という意味の字です。〝映える〟〝うつる〟。

昨は、阻と同音の乍と日との形声字で、〝一日へだてた日〟を表わしています。音は乍です。転じて、「昨年」というように使います。

是は、正の変形した疋と日との会意形声字です。〝太陽の巡行のように正しい〟という意味の字で、〝正しい〟という意味を表わしています。是認、是非、是正。

昼は、晝が本字。晝（𣅀）と日の会意字と見ることができ

ます。日は、太陽の出ている時を画したもので、〝ひる〟を意味します。

普は、並と日との会意形声字。〝日が何日も並ぶ〟という意味で、〝平生〟〝普段〟という意味を表わした字です。「普通」（並み）。音は並（ヘイ）がつまってフ。

景は、日と京との会意形声字。京は高で、丘の上に高くそびえる宮殿の象形字です。太陽をそれになぞらえて、〝高い空に輝く太陽〟というようにたたえたのが景の字です。〝太陽〟が本義で、〝陽光〟、転じて、〝ありさま〟の意味に使われます。光景、景色。

暁は、〝高い〟意味の堯と日との会意形声字で、〝日の高く上る〟夜明けの意味を表わした字です。〝あかつき〟。

暇は、〝借りる〟意味の叚と日との会意形声字で、〝日を借りる〟という意味の字です。「休暇」とは、公事をすべきだが、借りて私事に使わせてもらう、という気持の言葉です。

暖は、緩（ゆるやか）の意味の爰と日との会意形声字。〝おだやかな日〟の意味で、〝あたたかい〟ことを表わしました。

緩は、爰と糸との会意形声字です。爰は、爪（手）と于と又（手）の会意字で、両方から物を引っ張って伸ばす意味の部首。〝糸をゆるめる〟のが本義です。

暫は、〝日を斬る〟という意味の会意形声字。日数が少なくなるので、〝わずかの期間〟つまり〝しばらく〟という意味になります。暫時、暫定。

月は、半月の象形です。まん丸い時もありますが、欠けている時の方が多い。太陽に比べてそこが特徴です。音は欠（ケツ）という意味です。

朗は、〝良い月〟という意味の会意形声字です。音は良（ろう）。晴れた空に満月で、〝あきらか〟〝ほがらか〟の意味に用います。朗月、明朗、朗読。

期は、其（箕（き）の本字）と月との会意形声字。箕は米や麦をふるって良い物を〝選別する〟道具です。昔は、庶民はこよみを持たないので月の欠け具合で、日を知りました。月は日日（ひにち）を意味します。期は、〝会う日日（ひにち）を選定する〟ことを表わした字です。〝約束の日〟〝日を決めて会う〟〝約束する〟〝決心する〟などの意味に用いられます。期日、期待。

望は、𡈽、𡈼、望と変化してきています。王は、呈の王で、𠂉。**望**は、番兵が目を見張って遠くを

〝のぞむ〟意味の字。望は、〝月を望む〟意味の字で、〝満月〟の意味も生まれました。望は、臣（目の臣の項参照）の代りに音を表わす亡（ボウ）を入れたものです。〝のぞむ〟が本義で、〝満月〟は転義。希望、望月（もちづき）。

有は、ナ（手）と肉月の会意形声字で、音は又（ユウ）です。右手に肉を持つ形で、〝もつ〟が本義。所有者。転じて〝ある〟。有徳者。

服は、令のP（第2章参照）と又と舟月の会意字。〝天子のPを手にして任地へ向かう〟ことを表わした字です。「明従」が本義の字です。「南船北馬」と言って、舟は交通機関の最も重要なものでした。「服務」から転じて「服用」「服装」の用法が生まれました。

朝は、卓と舟月との形声字で、草の間に太陽が見える〝あさ〟を表わした字です。音は舟（シュウ）が変化してチョウ。今の字形からは、〝月が沈んで、代って日が上る〟意味に取れます。

夕は、半月が山から半分のぞいている形の字です。〝夕ぐれ〟を表わした字です。夜の初めです。音は寂（セキ）（しずか）。

外は、亀卜のトと欠ける意味のタとの会意字です。〝亀卜の割れ目（欠）〟は〝そと〟に表われるので、〝そと〟の意味を表わしたものです。（貝の項参照）。音は割（ガイ）。

多は、タベを重ねる意味の会意字です。〝おおい〟こと。

夢は、瞢（ぼう）とタとの会意形声字。漢音はボウ。呉音はム。は、目が覆われて全く見えない意味、は、ぼんやり見える意味。事実は目で見ないのだが、ぼんやりと見ているような感じの〝ゆめ〟をよく表わしている字です。

雨は、空から垂れ下がった雲間から水滴の落ちる形を象った象形字です。音は宇（ウ）（そら）です。国語の〝あめ〟が天であるのと同じです。

雲は、〝くも〟の象形の云（うん）に雨を加えた会意形声字です。〝雨ぐも〟が本義。

需は、あごに垂れた鬚（ひげ）の象形である而と雨との会意形声字。〝雨だれ〟が本義。転じて〝ぬれる〟意味がある（襦を参照）。〝もとめる〟の意味は、同音の須（シュ）（鬚の本字であり、而とも同音同義）の仮借です。需要、必需。

霊は、靈が本字です。巫（みこ）が神霊を呼び降して、雨乞いの祈祷を唱える、という意味の字で、〝神のみたま〟を表わした字。音は零（レイ）（令を参照）。

露は、雨でないが、雨粒のように路上に置かれる〝つゆ〟のことです。音は路（ロ）。

霜は、雨と相の形声字。相は冰（ひょう）の意味。少が秒、眇（びょう）と変化したのと同じ例。〝雨のこおったもの〟の意味で、〝しも〟を表わしました。

霧は、雨と務（む）の形声字。務は無（む）の意味で、有るようで無く、無いようで有る〝きり〟を表わしたと思われます。「雹、電、震」は、第2章の辰の項。

示は、祭段の机の象形で、犠牲を載せて神に供えるので、〝神〟の意味の部首として用いられます。音は載（サイ）（si）の意味のシ。

「神」「社」は第2章、辰の項。

礼は、神前にひざまずき、「拝礼」している形の字です。後、音を表わす豊（レイ）との形声字、禮が作られましたが、今はまた古い形にもどりました。

祈は、ネと斤の形声字。斤の音は幾、覬、希で、〝のぞむ〟こと。神に〝いのる〟ことです。

祉は、ネと止の会意形声字。〝神の恵みがわが身に止まる〟という意味の字で、〝さいわい〟。「福祉」。

祝は、神官が神に祈りを告げる意味の兄とネとの会意字。〝神官〟〝祝詞〟（のりと）〝いわう〟などの意味に使われます。

祥は、ネと羊との形声字。羊の音は変化して詳（ショウ）。羊を犠牲として神前に供え、〝さち〟を受けること。さいわい。吉祥（きっしょう）。瑞祥（ずいしょう）。

禍は、過失の意味の咼（か）とネとの会意形声字で、〝人間の過失に対して神の下す罰〟という意味の字です。〝神のとがめ〟〝わざわい〟。

祭は、肉の意味の夕と又（手）と示との会意形声字です。肉を神前に捧げて、〝まつる〟ことを表わしています。音は示（サイ）（si）。

禁は、林と示との形声字。音は林（リン）が変化してキン。この音は忌（キ）を表わしています。〝神〟を祭る時の〝いみごと〟が本義で、〝避ける〟〝やめる〟という意味に使います。



火は、火の燃えている形を表わしたもので、脚となったときには「灬」となります。

灰は、灰が本字。手の意味の𠂇と火との会意字で、上から手でおさえられることを表わした字です。火の燃え尽きて〝はい〟となった状態を表わしています。

災は、わざわいの意味を表わす巛の略字の巛と火との会意形声字で、〝火のわざわい〟という意味の字。巛は、川の流れのふさがった形で、〝犯濫のわざわい〟を表わした部首です。音は塞（ふさがる）です。

炉は、爐の新字体です。家（戸）の中で火を燃やす所という意味の会意字です。音は盧。

炭は、山の崖の意味の𡈼と火との会意形声字です。〝すみ〟は、山の中腹で、焼いて作ることを表わしています。

烈は、はげしい意味の列と灬との会意形声字で、〝火勢のはげしい〟という意味の字です。烈火。転じて烈日。烈風。

焦は、〝鳥（隹）を焼く〟という意味の会意字です。〝こげる〟意味に使いますが、音は焼です。

煩は、頭の意味の頁と火との会意字で、〝わずらわしい〟ことがあって〝頭がかっかとする〟という意味の字です。音は、繁雑の「繁」です。煩雑（繁雑）。

焼は、焼が本字。堯（目の暁を参照）と火との会意形声字。〝火が高く燃え上がる〟こと。〝やく〟こと。音は堯がなまってショウ。

熱は、勢の意味の執と灬との会意字。火が勢いよく燃える、という意味の字で、〝あつい〟ことを表わしています。

燈は、高きに登る意味の登と火との会意形声字。高い所から照らすための〝ともし火〟のことです。

爆は、〝はげしい〟意味の暴と火の会意形声字。〝はげしく燃える〟という意味の字です。音は、慣用音でバク。爆発、爆破。「火薬」の意味に多く使われています。

水は、川の水の流れる形を表わしたものです。扁の氵は、その省略した形です。脚の場合は氷となります。音はスイ。

永は、𣴓で、川の分流する所を表わした字。支流を持った〝長流〟の意味の字で、〝ながい〟とい

う意味を表わしました（脈の項参照）。

汁は、氵と十（じゅう）との形声字。ジュースも汁の仲間でしょう。胆汁、果汁、墨汁。

汽は、蒸気の立ち上る象形の气（気）と氵との会意字で、〝水蒸気〟のこと。

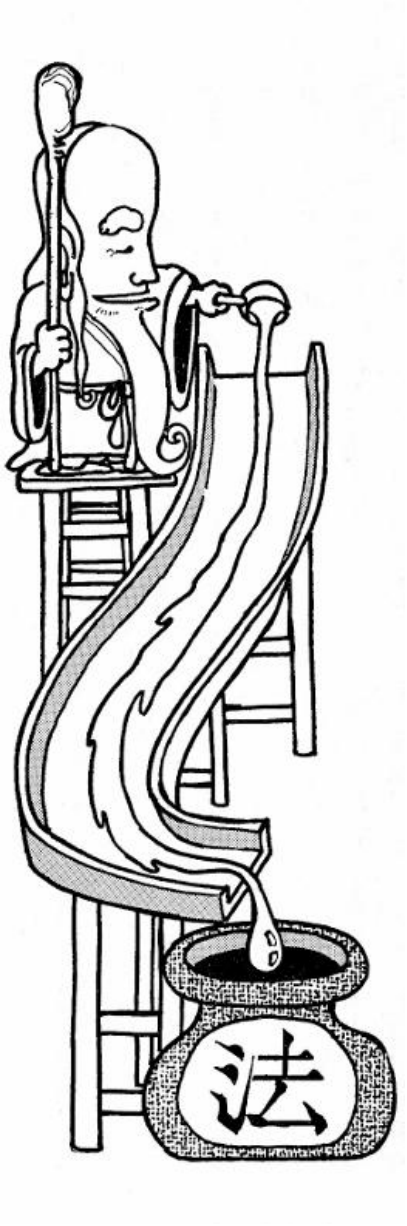
決は、缺ける意味の夬（けつ）と氵との会意形声字です。下流の氾濫を軽減させるために、〝上流の堤を切る（決壊）〟ことです。これは大変に判断のむずかしいことなので、「決心」「決断」を必要とするのです。

沈は、人が家にこもって〝しずんでいる〟意味の冗（ちん）と氵との会意形声字で、〝水にしずむ〟こと。頭の下に沈む木が「枕」です。

油は、由（ゆう）という川の名です。この流れはとろりとして、波一つ立たないので、〝とろりとした液体〟〝あぶら〟を表わすようになりました。

沸は、フツフツとわき立つ音を表わす弗と氵との形声字。沸騰、煮沸。

治は、台（ち）と氵との形声字。台は致で、〝ほどよく〟し〝整える〟意味。中国では洪水が多く「治水」が国を〝おさめる〟ことでした。



法は、水の低きについて流れ去るように、無理のない〝正しい生活のよりどころ〟を表わした字と考えてよいでしょう。本字は灋で、廌（かいち）と去と氵との会意形声字です。廌は君生の刑罰が正しく行なわれている時に、朝廷に生まれると言われる神獣です。この神獣と水の自然の理法に適った姿とで、〝おきて〟のあるべき姿を表わしています。音は去（キョ）が変化してホウになりました。

波は、表面の意味の皮（ヒ）と氵との会意形声字で、〝水面に生ずるなみ〟を表わしています。音は皮が変化してハ。

泳は、〝水中に永くいる〟という意味の会意形声字です。音は永。〝およぐ〟ことです。

泣は、人の立っている形の立と氵との会意形声字。目から水を出すのは〝なく〟ことです。音は立が変化してキュウ。

温は、溫が本字。囚人に食べ物を与えることで、心のあたたかいことを表わす囚と氵との会意形声字。〝あたたかい水〟〝水をあたためる〟が本義。

渡は、〝はかる〟意味の度と氵との会意形声字です。水の深さをよくはかってから〝わたる〟のです。

渉は、水中を歩いて〝わたる〟という意味の字です。渡渉。

測は、きまりの意味の則と氵との会意形声字です。長さのきまりである物指しで、水の深さを〝はかる〟ことです。測定、測量。

源は、原が本字です。厂と泉との会意形声字で、水の湧き出る〝水源〟が本義の字です。転じて、崖の上の平らな所を「原」というようになったので、氵を加えて「源」を作りました。高くて平らな所は原（高原）、低くて平らな所は野（平野）です。「原野」（野原）は両者を含めて言ったものです。

氵は、氷に見える〝すじめ〟の形で、〝こおり〟の意味を表したものです。〝氷〟が本義で、〝寒い〟意味にも用いられます。

冰は、冫と水との会意形声字。〝水がこおる〟という意味の字で、〝氷〟の本字。

氷は、冰の略字。水と丶の指事字で、水の固まったことを示したものです。

凍は、冫と東との形声字で、〝こおる〟という意味の字。音の東は冬。凍死、凍結。

凝は、冫と疑との形声字で、氷の〝かたまる〟意味を表わした字です。音は疑がのびてギョウ。凝固。凝結、凝視（じっと見つめる）。

冬は、古い形は。は、家の周囲を閉じた形で、氷と合わせて〝さむい冬〟を表わしています。音は終がなまってトウ。

寒は、古い形は。家の中を枯草で囲い、その中に人がいる形に氷を加えて、〝さむい〟という意味を表わしたものです。

土は、草木の芽が地上に出始めた形を象ったもので、〝つち〟を表わしています。音は地上に物を

吐き出す意味の吐。

在は、𠂇で、才と土との会意形声字。才は、草木の芽がわずかに地上に出た形で、〝わずかだが確かにある〟という意味を表わしています。音はサイ。

地は、〝べび〟の本字の也と土との会意形声字。へびのようにうねっている大地、という意味の字です。音は蛇が短かく発音されてジ。

池は、城壁の周囲を蛇のようにとり巻いている川のことです。「他」は〝蛇のようないやな人〟が本義で、〝あいつ〟という意味の字です。転じて〝よその人〟。

坪は、家を建てるために〝平らにならした土地〟という意味の字で、転じて、土地や建物の広さを表わす単位になりました。音は平。

城は、土を盛り上げて作った「城壁」が本義の会意形声字です。音は成（漢音はセイ、呉音はジョウ）。傾城、落城。

堀は、掘と土との会意形声字。掘は、体を屈曲させて手を使う、という意味の会意形声字で、〝ほる〟ことを表わした字。土を振り起こして作った溝が堀です。

境は、竟と土との会意形声字。竟は、章と儿（人）の会意形声字。章は、基本数の最後である十と音とで、〝音楽が完結する〟ことを表わした字です。楽章。人が音楽を〝奏し終える〟のが竟の本義。〝終り〟という意味を表わします。畢竟（とどのつまり）。〝土地の終わる所〟が境です。鏡は、実体と映像との境の金属という意味です。

金は、土の間に混入している金属の塊を表わす<u>𠆢</u>と今との形声字で、〝金属〟の意味を表わした字です。

針は、十が本字。十は針に糸を通した象形です。十の音が数字の十（八十寺の例で分かるように十は十と読む）と同じだったので、この字は専ら数字として使われ、そのため金を加えて作った字です。

釘は、丁が本字。丁が釘の象形です。針と同じように、本字が別の意味に仮借として用いられたために、金を加えました。

鉱は、金と広との会意形声字。鉱石を掘り出す坑内の広くがらんとしていることから、〝坑内〟を鉱と言ったものです。〝鉱山〟が本義に近い用法です。今は鉱山から掘り出された〝金属を含んだ石〟

の意味に なりました。

錯は、借りる意味の昔と金との形声字。一つの金属の上に、他の金属を〝借り〟てかぶせる、という意味で、〝めっき〟のこと。二つの金属がまじるというので、転じて〝いりまじる〟〝まじわる〟意味になりました。音は、昔(セキ)が変化してサク。交錯、錯覚。

錠は、扉が開かないように、固定させるための〝金具(かなぐ)〟を表わした会意形声字です。これは、わが国で作り出した用法です。

錦は、〝金糸銀糸を織り込んだ帛〟のことで、金と帛との会意形声字です。〝にしき〟。「錦(にしき)を衣(き)て郷に還る」「錦を衣て夜行く」「錦上に花を添(そ)う」「錦を衣て絅(けい)を尚(くわ)う」。

石は、口が石の象形。これでは口(くち)と同じになるので厂(がけ)の部首を加えました。会意字です。音は積(セキ)、磧です。言葉の意味は、〝ごろごろと積み重なっているもの〟ということです。

碑は、石と牌(はい)との会意形声字。牌(ヰ)は低い意味の卑(ひ)と、木の切れの意味の片との会意形声字で、〝低い所に掲げられた小さな掲示板〟が本義の字。位牌、骨牌。碑は、それが石でできたもの、〝いしぶみ〟。石碑、墓碑。



礎は、石と楚の形声字。楚(漢音はショ)は初と同音で、ここではその意味を借りて、家を建てる時の「初めの石」、〝土台石〟(いしずえ)を表わしたものです。「基」は、土台の土を堅めること。その上に置く石が「礎」です。基も礎も、共にしっかりとしないと、建物がしっかりしませんので「基礎」という熟語が生まれました。

磁は、石と茲(じ)との会意形声字。茲は、草の〝ますます茂る〟意味の部首。鉄を吸いつける鉱石を、ふえる意味の茲と石とで表わしたものです。

滋は、草が水を得て、ますます〝しげる〟意味の会意形声字です。人の名では〝しげる〟。滋養、滋味。〝うるおう〟意味にも使います。

慈は、植物を育てる〝やさしい心〟を表わした字です。いつくしむこと。慈愛、慈悲、慈善。



山は、山の象形です。音はサン。呉音はセン。金剛山（こんごうせん）、大山（だいせん）。

峠は、山を上りつめて下る所、〝とうげ〟を表わした会意字です。わが国で作った漢字ですから、音はありません。

岐は、〝山の尾根の分かれる所〟を表わした字で、〝分かれる〟こと。支（し）（支の項参照）と山の会意形声字。音は支（シ）が変化してキ。

峡は、山と夾（きょう）との会意形声字。夾（きょう）は、夾で、人が両わきに子供をかかえた形で、〝はさむ〟こと。〝山と山にはさまれた所〟が峡です。

挟は、〝手ではさむ〟こと。「鋏」は、金属で作った〝はさみ〟（わが国だけの使い方）。「頬」は、左右から顔面をはさんでいる〝ほお（ほほ）〟。「莢」は、豆をはさんでいる〝豆がら〟。弱い人を助けかかえてやる人が「侠」（客）です。

岳は、丘（おか）と山の会意字。丘は凸で、横に広くて、上の方が聳えていない形の〝小山〟です。

岳は、丘の形の大きい山を言います。音は嶽（ガク）。嶽は岳と同音同義の字。

崇は、山と宗との会意形声字。宗（宀の宗の項参照）は本家ですから、〝本家の山〟〝一番高い山〟のことで、転じて〝気高い〟という意味に使います。崇高、崇拝。

島は、鳥と山との会意形声字で、音は鳥（チョウ）の変化したトウ。海中、鳥の住む所の〝しま〟を表わしたものです。「嶋」とも書きます。

田は、整然と区画された〝た〟の象形です。中国では〝た〟も〝はたけ〟も田で表わしています。わが国では、田は「水田（すいでん）」で、稲を作る所。他の作物を作る〝はたけ〟は「畑」「畠」という字を作って、これを表わしました。

画は、畫で、田の境界をはっきりさせる意味を表わした字です。〝区切る〟こと。区画、計画。転じて、〝絵〟。名画（めいが）。

留は、卯（りゅう）と田の形声字で、〝田んぼに止まって見張りする〟ことを表わした字。今は、〝とどまる〟意味に用います。留学、留任。

畔は、〝田を両方に分かつ、まん中の道〟を表わした会意形声字です。〝あぜ道〟。転じて「湖畔」「河畔」（ほとり）。

界は、分ける意味の介（かい）と田との会意形声字で、〝田を分けるさかい〟のことです。

邑は、古い形がで、囲みを表わす口と人との会意字です。中国では、聚落の大小を問わず、その周囲に城壁を築いて、野盗の襲撃から守りました。口はその城壁を表わしたものです。部首としては、邑が省略されてβになりました。〝村落〟から、〝都市〟〝州国〟の意味に使われます。旁に使われて「大里」と呼ばれています。

邦は、βと（ほう）との形声字で、〝くに〟の意味の字です。小さいのを国、大きいのを邦とした時代もありましたが、今では同じように使います。友邦、連邦。

郊は、〝邑と邑との交わる所〟という意味の字で、一つの邑を出はずれて、次の邑に近い所を表わした字です。〝町はずれ〟。近郊。

郡は、〝邑の群〟であり、またそれを統一する〝君王のいる邑〟でもあります。βと君または群との会意形声字です。〝多くの邑の集合体〟。秦の始皇帝は、全国をいくつかの郡に分け、それぞれに王を派遣して治めさせました。これが郡県制度の始まりです。

郷は、（）と皀（きょう）との形声字です。普通の邑を二つほど合わせたほど〝大きい邑〟という意味の字です。自分の住む邑を中心として付近の邑を含めた地域をさす名称です。近郷、故郷。

部は、解剖の意味の音とβとの会意字です。邑をいくつかに〝切り分け〟て、その分かれた小さな聚落が〝部〟です。部落。転じて、〝区分け〟の意味に便われ、「野球部、卓球部」「総務部、渉外部」などと使います。

郵は、辺境の意味の垂とβとの会意字で〝辺境の宿場町〟が本義です。転じて、〝宿駅〟は伝達を取り次ぐところから〝文書を運ぶ〟意味になりました。郵送、郵便。

阜は、で、崖の地層の様子を象った字です。β（）はその省略した形で、山のけわしい斜面、〝がけ〟の意味の部首です。「大里」とは形は全く同じですが、そのもとは全く異なっており、意味が違いますから、注意することが大切です。

防は、四方に人工の崖つまり城壁を築いて、敵を〝ふせぐ〟ことです。阝と方との会意形声字です。中国の都市の構造をよく表わした字です。

院は、〝完全な防壁〟をめぐらした建物のことです。今では、〝大きな建物〟〝りっぱな建物〟という意味に使います。病院、学院。

陣は、軍（車の軍の項参照）、帥（巾の帥および師の項参照）で説明したように、軍隊は兵車を中心にし、小高い丘に〝じん〟を立てました。阝と車の会意字です。〝軍隊のそなえ〟。

陥は、阝で、崖のわきにある、落とし穴に人がおちたことを表わした会意字です。〝おちいる〟こと。陥落（かんらく）、陥没（ぼつ）。

陰は、阝と侌（きん）との会意形声字。侌は、今と云（雲の本字、雨の雲の頂参照）との形声字で、〝曇って日光がよくささない〟意味の字。陰は、〝日当たり悪い北向きの崖〟が本義の字です（第2章易の陽を参照）。山の北側が山陰、川では反対に南側が陰です。中国の古い都の洛陽は洛水という川の北側にあったので、この名が付けられたのです。

階は、阝と皆との形声字です。皆の比（人体の比の項参照）は人の並ぶ形なので、同じものが続く意味があります。階は、登るために〝崖につけられた階段〟が本義で、堂に上る段を言うようになりました。転じて、「階級」という使い方が生まれました。

陛は、阝と坒（い）との会意形声字。坒は、土の段々を並べて積む意味の字です。天子が天を祭るため、郊外に祭壇を作りますが、これに登る段が土の段、つまり陛なのです。天子を「陛下」と呼ぶのは、これから起こったものです。

隣は、粦（りん）が本字。粦と邑との形声字で〝となり村〟が本義の字。邑の意味が失われたためか、これだけが小里扁になってしまいました。これでは、崖に関係のある字と誤られますので、やはり、もとの字に改めたいものです。